
氷の華 ～二度目の告白～

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の華 ～二度目の告白～

【Nコード】

N1689P

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

—彼女は本当の意味で私を理解しようとしてくれた—
ちよつと根暗なところ以外どこにでもいるような何の変哲もない少年。
年。

—もう私は彼なしでは生きてはいけない—
学園では知らぬものはいないといわれるほど有名な少女。
そんな二人の恋愛模様。

根暗で弱気な少年の男心を果たして少女は、打ち落とすことができるだろうか。

臆病な彼氏と可憐な彼女が織り出す物語の序章

消えたサイト未熟な魔術師のお店の小説を復活させたものです。
多少、加筆修正されていきますが、原作通りの展開です。

ブローグ

「す、好きです。わ、わ、私と、つ、つ、付き合ってください」

冬にしては珍しいうらかな午後、なぜか私は少女に呼び出されて告白を受けた。

いったいどうしたものののだろうかと思い、内心で頭をかきつつ、目の前にいる少女の方を見る。

第一印象はまず間違いなくかわいいだろう。

それこそ、よほどのど近眼か、好みが著しくおかしいものでない限り、そうなるはずである。

一つ一つ特徴を挙げてみれば、まず一番最初に目を引くのは、その愛らしい瞳だろう。

二重まぶたでくりりとした大きな目の瞳が特徴的だ。

さらに、肌はぬけるように白く、くすみやさばかすなどそのような肌荒れを表すようなものは一つとして存在していない。

まさしく雪色の世界と言っても過言でもない。

また長い亜麻色の髪も思わず目が言ってしまう。

枝毛などの存在など感じさせないほど、さらさらと風が吹くたびに

なびいている。

おまけに、思わず抱きしめたくなるほどの華奢な身体つきをしている。

おそらく身長は、160に届くか届かないかぐらいなのだろうが、それよりもっと小さく見えるほどである。

そんな彼女が私に告白してきている。

もちろんこんな一人称だが、私はれっきとした男だ。

だから、この告白がいわゆるそっち系ではないと言っことぐらいは言い切れる。

けれど、だからと言ってそれを素直に受け入れられるかと言っと、そうでもない。

何せ、はつきり言おう。

私は十人並み以下の男なのだから。

自分で言うのも少々辛いのだが、ここで嘘を述べてみた所で意味ないので、この際はつきり言わせてもらう。

顔はまずたいしたことはない。

近所のおばさんたちに言わせれば、かわいいと言っ事らしいが。それを正直に信用できるほど私は愚かではない。

それに年齢が変われば、見方もしかりである。

よって、そんな判断は瞬殺される。

そして、次にだが、頭である。

確かに悪いとは言わない。

けれど、だからと言って良いかと言われると、それはノーとなる。

残念ながら、クラスで半分ぐらいでしかない。

おまけにスポーツなどもある程度恥を書かない程度にはできるが、それほど得意と言うわけでもない。

そして、極めつけは、この根暗さである。

ここまでくれば分かるだろうが、そう私は根暗である。

今の私に親友と呼べるものなどなく、友人もない。

いるのは単なるクラスメイトだけでしかない。

だから、こんな告白なんてありえるはずがないのだ。

「それって、本気？」

だから、そう訊ねた。

いきなり核心につけるほどの勇気は私にはなかった。

私を騙しているのではないのか。

なんて事を堂々と聞ける勇氣なんてものはなかった。

だから、こんな遠まわしな言い方しかできない。

「う、うん。本気」

彼女は震える声でそういう。

まさしくその声は必死になっているように見える。

けれど、私にはそれが芝居なのかそうではないのか分からなかった。

今まで生きてきた環境のため、素直に信じる事ができなかったからだ。

けれど、私は

「分かった。良いよ」

彼女の言葉を受け入れた。

もう、どうしても良かったのかもしれない。

例え、それが芝居でも。

それが私を欺き、嘲笑うためのものだったとしても。

もう、どうしても良かったのかもしれない。

当の昔に、私の心は壊れてしまっていたのだから。

早く朽ち果てていく事を望んでいたのだから。

第一話 夢崩れ

「夢……か」

凜とする空気の朝もやの中。

私はようやく今見たものが夢である事に気付き、覚醒した。

いや、それも間違いか。

あれは夢などではない、回想だ。

確かに、あのシーンはあった。

大体一年前に。

そう、一年前のあの日、彼女に告白され、私はそれを受け入れた。

そして、晴れてその日から私たちは恋人となった。

もちろん、それも今も続いている。

別れてなどいないのだから。

それどころか、別れようとは思えない。

彼女は私にとって必要不可欠な人だから。

彼女のあの笑顔が私に今を生きる力をくれる。

明日への活力となる。

あの時感じたことが馬鹿な事だと、思えるぐらい彼女の存在は穢れを知らなかった。

ただただ純粹に私の事を思っていてくれたのだろう。

それが分かる。

あれは、芝居などではないと言つ事ぐらい今ならよく分かる。

彼女にはそんな真似ができない。

私が知っている中での彼女は。

けれど、その彼女の様子が最近おかしい。

どこか、よそよそしいのだ。

しかも、ここ最近では、まともに会うどころか、メールをする事すら難しくなっている。

自分が何か悪い事でもしたのだろうかとも思ったが、思い当たる節はひとつもない。

唯一挙げる事の出来る理由と言えば、私とは違い、彼女はもう私とは別れるつもりでいるのかもしれないと言つこと

ぐらいだ。

私としてはそんな事を考えたくもないが、そうと考えれば、つじつまが合う。

彼女は優しい。

その容姿に合わないようできて、ある種マッチするぐらい優しい。

だから、私を傷つけないようにしているのかもしれない。

少しずつ距離を置いていく事で、私にゆっくりと別れを告げているのだろう。

そうすれば、ゆっくりと覚悟もでき、比較的心に傷を残さないで済む。

もともと所詮こんな時間は、夢物語、いや幻でしかなかったのだ。

彼女が、こんなみすばらしい私を好きでい続けてくれるはずなんじゃないのだ。

我ながら、マイナス思考だと思うが、それでもなんとなくそれが一番当てはまりそうである。

いや、たぶん、それが正しいんだと思う。

私は起き上がると、すぐに着替えると、枕元に置いてある携帯を手取る。

彼女と付き合い始めたときに買ったものだ。

それまで、そんなものは必要なかった。

誰とも深い関係を築こうとはしなかったのだ、そんなものが必要になるはずもなかった。

手に取った携帯を開くと、メニューを開き、メール項目へと移す。

最初のころは、非常に手間取って、一通送るのに二十分ほど掛かったが、今では一二分で遅れるほどに上達した。

まあ、二行程度までだが、それだけで十分だ。

『もう疲れた。別れよう』

たった十文字程度のメール。

けれど、これで全てが終わる。

彼女の苦しみも終わると思う。

もう、これ以上無駄な事はしなくて済むのだから。

もう、偽って自分の心を痛めなくてもすむのだから。

そこまで思っ、自分のしたことの重大さに気がついた。

私は思わず携帯の電源を切ると、階下へと降りる。

両親は仕事——とはいっても、母はパート——妹も二人いるがその

どちらとも学校で家にいない。

もともと、休みなのは、私たち三年だけ。

今は、自宅学習期間中なのだ。

そして、私は既に推薦枠で大学の合格が決まっているので、基本的にもう勉強なんてものはなくていい。

私はすらすらとメモ用紙に書置きを残す。

『しばらく家を留守にします。次の登校日までには帰ってくるので、心配しないでください』

そう私は逃げるのだ。

おそらくあのメールを見た彼女はきつとわけを問いただすだろう。

良くも悪くも彼女はそんな人なのだ。

そして、問いただされたら、その瞬間に私はもう、嘘などつけやしないだろう。

真実を話し、その結果彼女を悲しませる事になる。

彼女自身が悪いわけでもないのに、自分を責め立てる。

そんなひとなのだ。

だけど、私はそんなことはしたくない。

私は、まだ彼女のことを愛しているからだ。

私は出来るだけ手早く鍵を閉めると、脇に止めてあった自転車に乗り、こぎ始める。

逃げるならば、できるだけ遠くに逃げたい。

彼女だけではなく、誰の追っ手も届かないところへと。

第二話 逃げた先は

逃げる場所。

その場所として選んだのが、城崎温泉だった。

ぜび、一度は行ってみたい所だったので、こうして選んでみたのだが、そこに行くまでの運賃が非常に掛かった。

おまけに宿泊代とかも考えると頭が痛くなってくる。

それこそ、今まで無駄遣いなどせず、こうしてお金をためていなければ、実行する事など不可能に近いほどであった。

そういうわけで、どうにかこうにかして、旅館に泊まったのだが、逆にこうしていると、何か時間がありすぎて手持ち

無沙汰になってしまう。

それこそ、また彼女のことを思い浮かべてしまって、さらに心を痛めてしまう。

仕方がないので、気晴らしとして温泉に向かう事にした。

城崎温泉の変わっているところはこれで、外湯と言うものがある。

旅館ではなく、完全に温泉に入るためだけに存在する施設、と言うものである、と考えればいい。

普通の温泉地ではこうはいかない。

例え、温泉だけ入れるところがあつたとしても、それはあくまでも旅館の一サービスでしかなく、温泉だけが独立していない。

けれど、城崎温泉はそれだけで独立しており、団体で管理されている。

とは言つても、私もそれはここに来て初めて知つた。

そもそも、外湯なんてものがあること自体知らなかったのだ。

やはり、温泉と言えば、旅館と言う勝手な固定概念が自分の中に埋め込まれていたのだらう。

「ばかばかしいな。」

そこまで考えて、思わずため息が漏れた。

こんなところにきてまで、そんなややこしい事を考える必要などないのである。

せつかくここまで来たのだ、余計な事は考えずに、ぼうつとした方が、よっぽど得である。

私はまず一の湯へと行く事にした。

私が選んだ旅館はどうやら、割とサービスが良いらしく、その施設まで送り迎えをしてくれるらしく、そう言つと早速車を出してくれた。

周りの世界がゆっくりと移ろっていく。

こういうところが都会と違う。やはりどこかゆっくりとした時の流れを感じる。

それは人も同様で、観光客たちもゆっくりと歩きながらどこかへと向かっている。

私もそれに習うようにしてのんびり、ぼんやりと眺めていると、不意に運転手が話しかけてきた。

「この時期ここまで来るのは大変だったでしょう。」

運転手は何を言いたいのかがすぐに分かった。

おそらく、雪のことを言っているのだろう。

私は山陽本線から途中播但線に乗り継いで、最終的に山陰本線までこまで来たのだが、その播但線がすごかったのである。

何がすごいのかと言われると、かなりの積雪量だったのである。

私の住んでいるところは南の方で、しかも海岸付近だったため、雪は降ってもあまり積もる事はなかった。

そのため、初めて銀世界と言うものを知った。

その分、汽車も雪のため途中途中で止まり、結果的に遅れてしまったのである。

「そうですね。でも、雪がとても綺麗だったので、そんなことは、帳消しになりますよ。」

それでも、十分心が和む景色だった。

それからつくまでの間、しばらくあったのだが、一言二言話すと、目的地についたので、礼を言って車の外へと出た。

どうやらまた雪でも降り始めるらしく、空には厚い雲が張っている。

まあ、雪見酒ならぬ雪見風呂というのもまた一興だろう。

心の中でそう落ち着けると、さっさと中へと入る。そして、それと同時に驚いた。

結構古くから始まったところだと聞いたのだが、意外に内装は綺麗なのである。

おそらく、改装したのだろうが、何となく興醒めのような気がした。

私はどこかで、古い造りをして、どっしりとした感じのところを求めていたのかもしれない。

けれど、こうしてここに来てしまった以上、もうどうにもならない。

私は、半ば諦めるような気持ちで、出る前にもらった券を番頭に手渡すと、下駄を脱ぎ、中へと入る。

今更だが、今の私はまさしく温泉街に相応しい格好である。浴衣に

陣羽織、そして足袋に下駄である。

まあ、せっかく部屋にあったのだから、着ないともったいないと言
うわけである。

中に入ると、すぐに帯をはずし、脱ぎ始める。

暖房が効いているにはきいているのだが、やはり少々肌寒い。

こういう時、浴衣を着て来たことを良かったと思う。

着るには苦勞するが、逆に脱ぐときは本当に楽で助かるからだ。

私は、脱ぎ終わると早速中に入ってみたのだが、湯気だらけで視界
がかすんでいる。

少々目が慣れるまで入り口でつたつていて、いつまでもそんなと
ころでいるのも、情けなく思えて、適当に歩き回る事にした。

案の定、大して広くない洗い場なので、すぐに座椅子を見つめた。

後は、そこに座ってしまえば言い。

目の前に、その他諸々があるからである。

どうでもいいことだが、私は、まず頭を洗ってから、体を洗う。

そのとき、体の場合はまず左腕から洗う。

以前はそうでなかったような気がするが、気がつくといつの間にか

そうなっていた。

けれどそれが一番自然でしっくりと来るのは確かである。

全てを洗い終えてから、ようやく中に入る。

これが私の最低限度の礼節である。

まあ、常識ではあるが。

しかしそれはさておき、中は予想外に深く、少々落ち着かない。

ゆっくりとしようと思えば、ゆっくりとできるのだが、それではどこか本末転倒に思えて仕方がない。

けれど、このままではゆっくりする事はできない。

仕方がないので、私はここを諦め、露天へと向かう。

できれば中で一通り暖めてからと思っていたのだが、どうやらそれは諦めるしかないようである。

ドアを開けると別世界だった。

よくそういった表現を聞くが、まさしくこの状況はそれだった。

そう、まったくの別世界だったのだ。

今まで、私が見てきた露天風呂とは。

そういえば、看板で見たのを思い出したが、この温泉は確か洞窟温泉とか言のがあるらしい。

それが、どうやらこれなのだろう。

そうなのだろうが、これは果たして洞窟と呼べるのだろうか。

どちらかと言うとただっぴろい洞穴としか思えない。

と言ってみても、虚しくなるだけでしかない。

それ以上追求する事はやめると、早速中に入ってみる。

どうやら、温度は中に比べると少し低いらしく、すんなりと入れた。

けれど、それと同時に何ともいえない安堵感と言つか、幸福感と言つか、どっと力が抜けるような、そんな感覚に陥った。

もしかすると、張りっぱなしだった気が緩んだのかもしれない。

そのせいか、思わずこくりこくりと頭がふらついてしまう。

もしかすると、眠たいのかもしれない。

そう思ったと同時に、頭の中が一瞬真っ白になった。

第三話 二人の仲のきつかけ

彼女と一番初めに話したのは、図書委員での活動のときだった。

それ以前にも彼女の存在は知っていたのだが、まともに話したのはそのときがはじめてである。

彼女の人気はそれこそすごかった。

さすがにファンクラブとかが出来るとはなかったが、それでも噂が良く飛び交うぐらいの人気だった。

私もそれをよく小耳に挟んだ。

クラスメイトからそういった話を良く聞いたからだ。

それで、同じくして図書委員になったのが、私も彼女も二年のときだった。

これは珍しい事で、通常図書委員に関しては、普通変わることはない。

仕事の仕方を覚えなくてはいけないからである。

けれど、それにも例外がある。

クラス替えの結果、前回の図書委員がいなくなってしまったときである。

そうなれば、新しくクラスから選出しなくてはならない。

そして、私のクラスでは私が、彼女のクラスでは彼女が選ばれたわけである。

まあ、彼女のほうはどうしてそうだったかは知らないが、私の方は、半ば無理やりだった。

なんて事ない、ただ私が良く図書室を出入りしている事を言われたのである。

そうなれば、勝手に本好きと決められてしまい、もう逃れられない状況になる。

強引に断れば、自分の立場が危なくなる事ぐらい容易に予想ができたからだ。

別にそんなこと考えすぎだと思うかもしれないけれど、そんなことが思い浮かぶくらい、そのときの私は、クラスで浮いていたのだ。

その浮いている私が無理に断れば、良くない噂が飛び交うことぐらい簡単に思い浮かぶ。

けれど、私はそれを今更どうこういつつもりはない。

いや、むしろ感謝したい。

彼女と知り合う機会を与えてくれたのだから。

同じ委員会になった私と彼女は、何かの縁があったのだろうか、当

番は二人で組む事になった。

うちの学校の図書館はいまどき珍しく、いまだにカードに記入しなくてはいけない。

そのため、非常に作業に手間取ってしまう。

だからどうしても、一人では手が回らない。

時々、誰も来ておらず、ヘルプとして私がするときもあるが、その際一人だと相当辛い。

向こうにも予定があるのだから、のらりくらりするわけにもいかず、必死になってスピードを上げなくてはいけない。

通常の三倍速ぐらいになったこともあり、本当に死ぬかと思った。

そのため、どうしても二人組みにするしかなく、その上やり方知らない人間には知っている奴がつかなくてはいけないのである。

その結果として、私がついたのである。

そこで疑問が浮かんでくるだろうが、実は私も図書委員の仕事を知っていたのである。

先ほと言ったように、私はよく図書室に行っていた。

ただ静かな場所だったから、足を運んでいただけなのだが、時々本も読んでいた。

しかし、私は昼食が済むとすぐに行っていたため、当番はおらず、教師しかいなかった。

私と言う人柄はどうやら年が遠い方が案外打ち解けやすいらしく、その教師は女性だったのだが、その彼女ともすぐに仲良くなった。

そのため、仕事内容も教わり、自分の事は自分でし、当番がいない時に人が来た時は私が代わりにした事もあった。

だからこそ、私がつくことになったのである。

仕事を良く知っている人間として。

皮肉な事に、他のどの図書委員よりも、私の方が仕事を知っていたのだ。

そして、彼女ともそこで少しずつ打ち解けていく事になった。

けれど、とは言っても、それにいくまでに、最初のうちはかなり時間が掛かった。

もとより話し下手で、しかも人見知りが激しかったからである。

そのため、最初のうちはほとんど仕事の内容しか喋らなかったし、自分から話しかけることなんて皆無に近かった。

そんな私が、始めて彼女にまともに話しかけたのは、確か、今年の十月に入ってからだったと思う。

普段の仕事が終わった私と彼女が、帰ろうと、席から立ち上がったとき、不意に背中から声をかけられた。

もちろん、この教室にはもう、私と彼女と、図書の先生以外誰にもいないので、おのずと決まってくる。

「なんですか？」

私は振り向くと同時に尋ねる。

隣にいる彼女のほうを見れば、同じ気持ちなのだろう、そう言いたげな顔をしていた。

「ちょっと仕事を頼まれてくれない？」

「仕事、ですか？」

「ええ、新書の受け入れがまだ全部終わってないのよ。」

その言葉を聞き、内心ちよつといやな気持ちになった。

新書の受け入れには結構面倒な作業が多々ある。

私はあまり好きではない。

だが、そんな感情が表に出ないように気をつけ、それをひた隠しすると

「俺は、全然かまいませんよ。」

了承の言葉で答える。

良くも悪くも私はこのような人間である。

決して人からの評価を下げないように、立ち回る卑怯な人間なのである。

ここで断つても、たいしたことにはならないかもしれない。

けれど、それでも、評価を上げておいても損にはならないだろう。

そういうことだ。

「私も大丈夫です。」

そんなわけで手伝いをする事に決まり、極力早めに終わらせるため、早速作業に移ろうとしたところで、隣にいる彼女も私と同じ答えを出した。

正直言つて驚いた。

夏が過ぎたため、もうそろそろ日が暮れるのも早くなってきた。

だから、女子である彼女が手伝いをするとは思わなかったのである。

いや、それ以前に、そんな事をするような人には見えなかったのである。

彼女はこの高校では有名人である。

かなりの美少女だといってもいい。

けれど、だからこそ性格は破綻しているものだと思っていたのだ。

世の中、美少女で性格のいい女なんてものはいるはずがなく、絶対にわがままな奴だと思っていたからである。

周りにちやほやされて、そんなふうになるものだとばかり思っていたからである。

けれど、彼女はそんな私の予想を裏切り、手伝う事を了承した。

まあ、その裏切りは正直助かる。

やはり、一人より二人、二人より三人である。

それからしばらくの間は、全く無言であつた。

ちよこちよこ先生が話しかけてくるが、用事があつて外に出てしまった今では、それすらない。

静かな沈黙が部屋を満たしている。

別にそんなものになれている私としては、何ともなかったのだが、どうやら彼女のほうは耐えれそうにもないらしい。

まあ、普通の人にはこういうのは耐えられないのかもしれない。

自分が異常だと言つつもりではないが。

「もう、遅くなってきたから、帰ったほうがいいんじゃない。後は俺と先生がやっておくから。」

だから、私は親切心で一応彼女に、話しかけてみた。

彼女は、少々びっくりしたように私の顔を見る。

まあ、私から話しかけることは、皆無なので、そのような反応を取ってしまいたくなるのも分かるが、正直にそうされ

ても少し困る。

少々傷ついてしまう。

けれど、私はそれをおくびにも出さず

「もうそろそろ日も暮れてくるだろうから、早めに帰ったほうがいいと思って。女の子の夜の一人歩きは危険だし」

そう続けたのだが、今度こそ本当にびっくりした顔をしている。

おそらく、私がこんな事を言うなんて、まったく予想できなかったのだろう。

まあ、それも当然なのかもしれない。

彼女と一緒にいるときはたいてい、無愛想で、あたかも鉄仮面をか

ぶったような表情をしている。

そのため、それに合わせて冷たい人だと思われたのだろう。

まあ、確かに私は冷たいのだが、これぐらいの配慮はする。

「うっん、平気。私も続けるよ。」

けれど、彼女はそれを断ると仕事を続け始める。

「そっか、それならよろしく。」

彼女がそついうのなら、それでいいのだろう。

私には、彼女することを強制できるわけでもないし、彼女の自由意志ならそれで良い。

私も、自分の分の仕事を始める。

結局、仕事が終わったのは、それからまたしばらく掛かり、既に七時を大きく回ったときだった。

先生のほうは少々申し訳なさそうな顔をしていたが、私たちの仕事が遅かったのだから仕方がない。

私は、先生の言う謝罪の言葉をうまく受け流すと、かばんを持って

下駄箱へと向かう。

何の連絡もなしに遅くなったので、母親が少々立腹しているかも知れない。

今更だと思いが、できるだけ早めに帰らなくてはいけない。

そう思って極力急ごうと思ったのだが、トイレに行きたくなった。

長い間いすに座っていたため、少々下半身が冷えたからだろう。

できるだけ手早くそれを終わると、自分の下駄箱に上履きを入れると、次に靴を取り出し、履き替える。

それと同時に傘置きにおいてある傘を手取る。

つい先ほどから急に振り出したのだ。

朝しっかりとニュースで予報を見といて正解だった。

まあ、この時間帯まで学校にいなければ、不要だったかもしれないが、備えあれば憂いなしというものである。

私は昇降口のドアを開け、早速外へと出て傘を差したのだが、視界の端に人影をとらえた。

電気がついていればすぐに分かっただろうが、この学校はよっぽどの理由がない限り、基本的に完全下校が七時であるため、基本的にこんな時間にこの場所にいることはない。

野球部やその他の運動部の人間もここではなく、全て部室で終えるため、ここまで来る事はない。

よって、ここに電気がついていることはほとんどない。

そのため、外に出るまでは人がいるとは全く思わなかった。

誰だろうかとちらりと横目で見たのだが、すぐに分かった。

まあ、こんな時間にこんな場所で突っ立っている人なんてものは限られてくる。

部活動をしている人間か、はたまた何らかの理由で残っていたかぐらいである。

そして彼女の場合は、後者だった。

先ほどまで一緒に私と図書室で仕事をしていた彼女である。

どうやら、私がトイレに行っている間に、抜かれてしまったようだ。

それで、当の彼女は、外に出て初めて雨が降っていることに気付いたところだろう。

何となく少々鈍いのではないかと失礼な事も考えたが、そんなことはさっさと心の奥底にもぐりこませると

「もしかして、傘ない？」

分かりきっている事だが、あえて聞く。

どうしても、私はこうしないと話しかけられないからだ。

そんな私の内心のことなど知らず、彼女は少々照れくさそうに苦笑して頷く。

まあ、傘があるのならば、いつまでもこんな所で立ち尽くしているはずもない。

私は、自分の持っている傘を彼女に差し出すと、自分のかばんの中からもう一本の傘を出す。

これは折りたたみで普段、もしもの時ようにもってきているものだが、どうやら今回役に立ったみたいである。

「俺、二本あるから、それ貸してあげる。それじゃあね」

その折り畳みを差し、彼女のほうへと向き直るとそういつてさつさと玄関から離れていく。

少々強引な気がしないでもないが、まあそうでもしないと彼女は素直に受け取らないだろう。

実際、先ほど良かれと思っていった事もさりと返されたのだ、これぐらいの強引さも必要だろう。

そう思ってたことだった。

第四話 思い出されるのは

その傘のおかげで私と彼女は、比較的仲が良くなった。

とは言っても、単に図書室で仕事をする際少々話をする程度だけの事で、それ以上のことはなかった。

そんな事をしようと言う考えすら起こらなかったのだから。

そつと岩肌を背中を預け、天井を見上げる。

雪が降っているのだろつ、隙間からちらほら入ってきている。

けれど、岩肌の天井のために、それを見ることはできない。

少々、失敗したかなとも思ったが、あえて考えなかった事にする。

今更、そんな事を言つたところで無意味でしかない。

そういえば、傘を貸した次の日、ちらほらと彼女の姿を見かけたような気がする。

ただ、そのときは自分になど全く関係のないことだと決め付けていたので、気にも留めなかった。

けれど、本当は彼女は借りた傘を早速私に返したくて、私のクラスにまできていたらしい。

ただ、残念な事に私はそれに気付かなかった。

そして、結局返してもらったのは、放課後になってからのことで、その際はその事は一言も言わなかった。

このときの真実を聞いたのは、もっとあとのことで、付き合い始めてからしばらくのときであった。

不思議なものだ。

こうして思い出をめでていると、不思議と心が穏やかになる。

私自身こんな事は本当に久しぶりだ。

確かに彼女といるときは幸せだった。

それだけはまず間違いないことである。

けれど、それと同時にどこか不安もあった。

この幸せはいつたいいつまで続くのであろうか、と。

私は知っている。

いつまでも、永久にあり続けるものなど、この世の中には存在しないと言う事を。

それは、人間に死と言う物がある限り。

それは、世界が有限である限り。

だから、私は安穩とした生活の中で不安を抱えながら過ごしてきた。

それはある種混沌としたものであった。

自分を映す鏡のように思えて。

第五話 彼女との初デートと付き合い方

彼女と初めて行ったデートは、映画だった。

付き合い始めてしばらくたってからのことだったのだが、私自身デートどころか、友人とどこか出かけることすらほとんどなかった。

そのため、基本的に彼女に任せたるような形になり、そうやってしまったのである。

その時の私には、今一付き合い合うということが理解できていなかったからなのかもしれないが、結局私は最初のうちは彼女に全てまかせつきりだったという事実には変わらない。

そういうわけで、彼女が決めたデートは映画だったのだが、何を見るのかで、まず手間取った。

彼女は恋人らしくラブロマンスを見たかったらしいのだが、はつきり言って、私はそんなものにまったく興味がなかった。

いや、あまり好きにはなれないといったほうが正しいか。

以前、一度だけ、大作と呼ばれたラブロマンスを見たことがあった。

それは結構楽しむ事はできたのだが、また見たいとは思えなかった。

自分には、全く合わない種類のジャンルだとすぐに分かったからである。

だから、どうしてもそれだけは止めてくれと頼んだのだ。

結局、彼女のほうが折れてくれたので事なきを得たのだが、その後が大変だった。

見たかった映画が見れなかったため、鬱憤がたまっていたのだろうが、買い物にまで付き合わされる羽目になった。

妹の付き添いで、ある程度そういうものになれてはいたのだが、それでも最後の方が辛かった。

それこそ、顔に出さなかった自分を褒めてやりたいくらいである。

けれど、それもまあ、それはそれでよかったのではないかと思う。

帰り際の彼女の笑顔は本当に輝いていた。

それだけ今日この時間が楽しかったのだろう。

それだけで十分私は報われた気分になった。

自分でも人を楽しませる事ができると言うことが分かったからである。

けれど、そんな陽気な気分も次の日にいつの間にか飛んでいった。また。

いつもどおりに、いつもの時刻に教室に入ると、クラス中から視線を浴びた。

いったい何の事だろうかと思ひましたが、考えてみたところで、無意味でしかないかと決着をつけると、席に着き、かばんの中身を机の中に放り込む。

とは言つても、私も置き勉派に属していたので、持って帰っていたものと言え、宿題ぐらいである。

そういうところは、どこか抜けている私なのである。

全ての作業を終えると、ようやく私は途中まで読んでいる文庫本を開く。

最近お気に入り作家の小説である。

中身は、恋愛ものである。

不思議と映画ではそんなものを見る気は全く起きないのに、小説となると話が変わってしまう。

そんな自分がどこか矛盾しているようで、おかしく思うが、何となく納得もしている。

たぶん、小説では、一つ一つの表現に深みを感じ取る事ができるからなのだろう。

現に本には映像にはない面白みがある。

それに気がついてしまった今では、もう抜け出せないところにまできてもいる。

そんな事を考えながらも本を読み続け、もう少しで半分まで到達するかしないかのところで、不意にクラスメイトに話しかけられた。

何か用でもあるのだろうかと思って、声をかけてきた人間の方を見てみて驚いた。

確かに傍にるのは一人なのだが、確実に集から視線がここに集まっていることが用意に予測がつく。

果たして、ここまで周囲の視線を集める用とはいったい何なのだろうか。

そう思っただけで思案に耽りながら、相手の顔を見る。

どうやら、向こうも逡巡しているようで、すっぱりとは切り出してこない。

できれば早めに済ましてしまいたいのだけでも、向こうから話を振ってきた以上、私の方から何か言うわけにも

いかず、ただ待つ事しかできない。

内心で少々いらいらし始めるころにようやく口を開いた。

けれど、それはまさしく青天の霹靂だった。

目の前にいる男は、私が彼女と付き合っているのか、と訪ねてきたのである。

実は、私と彼女が付き合っていることは、内密の事だった。

彼女の方は、気心の知れる友人に関してのみ言っていたのだが、私は誰にも言っていない。

公表すれば、どうなるかぐらいお互い容易に予測できたからである。

一瞬、私の脳裏に否定する言葉が頭の中に浮かんできた。

自分の保身のための言葉だった。

認めれば、自分の身が危くなるのは既に分かりきっている事である。

真実、クラスの男子の目はぎらついている。

おそらくは嫉妬から来るものなのだろうが、はっきり言って精神的によろしいものではない。

けれど、私は認めることにした。

自分の保身の結果として、彼女を傷つける事の方が、よっぽど怖かった。

そう彼女の告白を受け入れた時点で、既に私は決心していたのだ。

自分の身がどうなったところで、どうでもいいということとは。

もちろん、私が認めた瞬間に、クラスの男子から顰蹙を買った。

はっきりと分かる妬みや嫉みの目で私を見ていた。

けれど、助かった事に誰も実力行使をしなかった。

それ以前に、以前と同じ対応しか、しなかった。

それこそ、時々嫉妬のこもった目で見ること意外は。

その結果として、私と彼女は学校でも堂々とする事になった。

正直言つて、私はいやだったのだが、彼女がどうしても言うので、折れざるを得なかった。

別に、四六時中べたべたするわけではなく、一緒に登下校をしたり、一緒に弁当を食べたり、その程度の事だったのだ、

断りようがなかったというのが、正しい。

まあ、それなら以前はどのような付き合い方をしていたのか、となると、正直普通なら考えられない付き合い方をしていたと答えるしかない。

実際、彼女と私は確かに付き合っていたが、一緒にいたことはほとんどない。

あえて挙げるとするならば、図書委員の仕事のときぐらいである。

しかもその時でさえも、まともに甘い言葉の一つも唱えなかった。

唯一、まともに会話をしたときと言えば、メールぐらいである。

彼女と付き合い始めた翌日に買わされたのである。

私としては、必要だと思ったのだが、彼女が普段まともに一緒に
いられないならせめて、と言うことなので、買うことにしたのだ。

その際、両親に難色を示されたが、無駄遣いはしないということで
決着をつけた。

その携帯で、夜にメールのやり取りをしていただけである。

それが、それから以降は、二人でいることが多くなった。

まともに恋人らしい会話なんてものはしなかった。

けれども、それでも彼女にしてみれば、十分だったみたいである。

私が見た彼女の顔はいつも輝いていたから。

たとえば、今はもうそうではなくなってしまうたのだろうが。

第六話 考え事後の一休憩

気がつけば、湯の中に入ってからかなりの時間が経っていた。

さすがにこれ以上はいつておくのも危険だと思った私は、すぐ傍においておいたタオルを手に取ると、湯から上がる。

けれど、長い間はいつていたためか、外に出ても体が火照って寒さを感じない。

逆にばかばかと温まって気持ちいいくらいである。

時計を見れば、長針が一周していた。

まあ、これほどまで入れば、そうなくても当然か。

心の中でそう呟くと、私は脱衣所へ戻った。

その際、もちろんある程度体を拭くことも忘れない。

これも最低限度のエチケットである。

脱衣所に戻った私はすぐに浴衣に着替えた。

せっかく風呂に入って体を温めたのに、湯冷めしたのでは意味がないからである。

すべてきてから、また乾ききっていない髪をタオルで拭く。

まあ、この時期乾かすには時間が掛かるだろう。

洗面台にドライヤーがおかれて入るが、有料となっており、何となくもったいなくて使う気が起きない。

と言うか、普通、今時ドライヤーが有料か、とも思ってしまう。

まあ、良くも悪くも田舎なのだなと思った。

風呂を出た私はすぐさま携帯の電源を入れた。

今までずっと切っていたのだが、旅館の人を呼ばなくては帰れないので、緊急用である。

できれば、ずっと消していたかったのだが、この際そんな事を言うてみるしょうがない。

私は、さっさと電話をかけることにしたのだが、当然のことなのだろうが、すぐに迎えに来てくれた。

そして今度は行きとは違い、帰りは雪夜空の中を車は走り始めた。

周りを見れば、迎えに来てもらっている私を少々うらやましがな目で見ているものもいる。

どうやら、彼女らの旅館ではそう言ったサービスはしてもらっていないようである。

まあ、だからといって私の選んだ旅館が特別だと言うつもりはない。

私以上に待遇のいいところもあった。

現に私が乗る車の前を小さめのバスが走っているが、それも私のところと同じく違う旅館のバスである。

「お料理の方は、帰り次第準備いたしますが、それでよろしいでしょうか？」

窓の外をぼんやりと眺めながら、そんな事を考えていたら、運転手の女性が話しかけてきた。

どうやら、早くもそんな時間のようである。

もちろん断る理由なんてどこにもない。

「はい、よろしく願います。」

「では、六時頃に全てが整うと思いますので、それまでお部屋でお待ちください。」

素直にそう答えると、時間をはつきりと教えてくれた。

今から帰れば、大体一時間近く余るだろう。

私はその事を頭の中で計算すると、また風呂に入ることを考えた。

もちろん、旅館にある風呂である。

まあ、入ったばかりのため、少々不必要な事だと思えないもないが、それでもやはりせっかく泊まるのだから、出来るだけ早めに入

っておきたい。

私は無類の温泉好きなのである。

本当は、旅館につき次第そうするつもりだったのだが、外湯めぐりの方についていけず行ってしまう、結果として後になってしまったのである。

第七話 汚い男

旅館の風呂は露天ではなかったが、それでもなかなかの絶景だった。

おそらく、冬である今だからこそののだろうか、窓から見える景色は、一面雪化粧を纏い、きらきらと輝いていた。

そんな風景を見ながら、入った風呂の後に、私はようやく食事にした。時間的には、普段よりずっと早いのだが、どこか待ちくたびれた感を覚えたのは否めなかった。

けれど、出てきた料理はその気持ちを吹き飛ばすほど上等なものだった。

あまり金の無駄遣いをしなくなかった私は出来るだけ安めの宿にしてみたのだが、どうやらそれがあたりだったらしく、今日の夕飯は力二尽くしだった。

囲炉裏でかにの足を焼きに、甲羅は甲羅蒸しにする。

それを食べた後、味噌の残っている甲羅に熱燗を注ぎ、温める。

普段の私なら、そんな事をしようとは思わなかっただろうが、良くも悪くもここは誰一人として私の事を知らないのである。

そのため余計な事を言われる事などない。

名簿に記帳する際も少々さばを読んで置いたので、大丈夫なはずである。

その熱燗を飲み終わると、最後にかに雑炊をいただき、部屋へと戻る。

どうやら、ほんの少し酔いが回ったらしく、体が浮き上がるような感覚を覚えるが、ふらつくわけでもない。

難なく、私は部屋に戻ると、いつの間にかにしかれていた布団の上に倒れこむ。

不思議だった。

逃げるようにして来たはずなのに、不思議と焦りはない。

先ほどの料理だって、本当においしかった。

もしかすると、そんな私は異常なのかもしれないが、無駄に自分を卑下したくもない。

よって、そんなふうに思いたくもない。

結局、不思議としか言いようがない。

実際、私はいたいここに何をしに来たのだろうか。

彼女を傷つけないためと言う名目上で逃げてきたはずなのに、今の私のしている事はどうだ。

彼女を避けて、彼女を一方的に責めているようにしか思えない。

わけも分からず、自分が何かしたのではないだろうか、逆に自分のことを責めさせようとは思えない。

ようやく私は今になって自分のしたことの本当の間違いに気付いた。

彼女にあんなメールを送ったのが間違いなのではない。

逃げた事が間違いだったのである。

そう結果として、こちらの方がより彼女を苦しめる事になったのである。

けれど、逃げてしまった以上、もうどうにもならない。

今更悔やんだところで、時間など戻ってはくれないのである。

私は衣紋掛けに掛けているオーバオールポケットから携帯を取り出し、電源をつけると、朝と同じ行動をする。

ただし、内容だけは変える。

『全て悪いのは俺。君が悪いわけではない』

朝のときより、少々長くなったが、そんな事を気にしている余裕は、今の私にはなかった。

ただ、それだけを打つと、また電源を消し、適当に畳の上に転がすと、布団の上に転がる。

先ほどのメールは彼女のためを思って送ったメール。

彼女が悲しむ必要なんてないのだ、言いたくて送った。

なのに、どうしても、送った自分自身がそう思えない。

結局、自分の自己満足のために送ったものでしかないように思えてくる。

いや、実際そうなのかもしれない。

心の中にある罪悪感を払拭したいがために送っただけの事なのかもしれない。

今思えば、私と言う人間は自己保身の強い人間なのだ。

こうしてここにいられるのも、自己保身のために、好きでもない演技をして、教師に逆らわず、問題行動もせず、自分を偽って、心を殺して学校生活を送ってきたからこそである。

そうでなければ、私のようなごく平凡な人間が推薦してもらえるはずもなかっただろう。

結局私は汚い人間なのである。

私は部屋の明かりを消すと、布団の中にもぐりこむ。

酔いの勢いで眠るため。

今ここにいるのが自己保身による逃げならば、余計な事を考えたところで、それは無意味でしかない。

ならば、とことんまで汚い人間でいよう。もう、それぐらいしか私には残されていない。

第八話 なぜ私を愛した？

彼女といるとき、私は常に思っていたことがあった。

なぜ、彼女は私を選んだのだろうか、と言う事である。

実際に彼女に聞いたわけではないので、どこまで信憑性のある話なのかは定かではないが、彼女は私に告白するまで、相当な回数の告白を受けたらしい。

一説では、百人を突破したと言う話もある。

さすがに、私もそれを信用するような事はしなかったが、この高校に彼女のことを好きな生徒が百人いる、と言われれば、私はそれを信用しただろう。

それほど、彼女は人気があり、まさしく一種のアイドルといっても良かった。

そんな彼女はいったい私のどこを好きになったのだろうか、それが不思議で不思議でたまらなかった。

実際、私は告白を受けた時点では、彼女のことを好きではなかった。

いや、そもそも恋愛と言うものすらどういふものか知らなかった。

言葉にすれば、簡単だった。

愛しく思う気持ちを持つ事。

それが恋する気持ちである。

けれど、それならば愛しく思う気持ちとはいったいどのような気持ちを表すのだろう。

それすら分からなかったのだ。だから、あの告白を受け入れる事を考えたのだ。

その結果として、私は彼女と一緒にいることで、恋愛と言うものを少しだけ知る事ができた。

どのような気持ちか、いとおしいと言うのか、どのような気持ちか、愛していると言うのか、それをほんの少しだけ感じる事ができた。

だから、よりいっそう彼女を愛しく思った。

今まで知らなかった思いを教えてくれたからこそ、私は彼女のことを好きだと思えた。

けれど、私は彼女にいたい何を与える事ができたのだろう。

残念ながら、私にはそう思えなかった。

もし私の気持ちの起こり方と彼女が同様ならば、彼女は私のことを愛しく思えるはずがない。

ならば、彼女は私のいっただこを愛しく思っただろう。

それが分からなかった。

だから思い切って一度聞いたことがあったのだが

「あなたの優しさが自然だったから」

わけの分らない答えを返された。

私は、自然な優しさなんてないと思っていたからである。

優しさなんてものは結局自己満足か自己陶醉でしかない。

物質的な便益ではなく、精神的なものを求める行為でしかない。

私には、そう思えて仕方なかった。

そのため、私は彼女の答えに納得しなかった。

これと似たような事を言ったのも覚えている。

けれど、彼女はそんな私を見て、本当に幸せそうな笑みを浮かべると

「だからこそ、君の優しさは自然なのかもしれないね。どこかで割り切っているから」

とても鋭い切り口で返された。

そんな笑顔で言う言葉なんかではないと思った。

そんなことはもっと悲しそうな顔つきになるはずだ。

私の言っている事は、あまりにも悲観的なものなのだから。

だから、それを肯定するのならば、それにあった顔をしなければならぬはずなのだ。

なのに、彼女の顔は晴れやかなのだ。

まるで、私の心の奥底を覗き込んでいるかのように思えてくる。

そして、私の心内全てを読んだ上で、答えているようにしか思えない。

そんな彼女が少し私は恐ろしくもあった。

自分の心を読まれるほど、恐ろしいものはきつとない。

けれど、どこかでそれを望んでもいた。

もしかすると、私自身を、本当の私を理解してもらいたがっていたのかもしれない。

私と言うものを理解した上で、答えて欲しかったのかもしれない。

おそらく、私は彼女のことを本当に愛しくて愛しくて仕方がなかったのだろう。

好きな人には自分の全てを見て欲しいのだろう。

以前、私が読んでいた小説にも書いてあったことだ。

どんなにつまらない事でもいい。

好きな人には、知ってもらいたいのだ。

そして、例え納得ができなかったとしても、その時の心を理解して欲しいのだ。

けれど、それは傍から見れば滑稽なものでしかない。

狂気染みたものでしかないのである。

いや、もしかすると、恋愛自体狂気じみているのかもしれない。

心のどこかで眠っているものが呼び起こされるのだから、そうなってしまうと考えるもおかしくはない。

実際にストーカーだってそうだろう。

愛しているからこそ行うつ行為であり、そうでなければそんな事をしようなどと露とも思わないはずである。

もっと、身近な話ですれば、お互い縛りたいと思い、縛られたいとも思うことである。

誰かを束縛し、誰かに束縛される事で、自分の存在の光を強めようとする。

私にはそれ自体も狂気染みているとしか思えない。

けれど、私はその心を、否定することはできなかった。

日に日に自分が変わっていったことが、よく分かった。

おそらく少しずつながらも彼女に看過されて行っただろうが、それでも私はその生活に身を任せていた。

その狂気染みた世界が心の拠り所にもなったからである。

常に物事には表と裏がある。

何事にも良い面と悪い面があるのである。

そして私にとって、恋愛と言うものは悪い面では、狂気の只中で生きるきっかけであり、良い面では心の拠り所にするきっかけでもあったのである。

私は、その狂気が生み出す虚ろな世界で生きてきた。

そして、できることならずっとそうしていたかった。

けれど、やはり何事にも永遠なんてものはない。

優しすぎる時間はすぐに過ぎて消えていく。

今、こうしてここにるのが、その証である。

第九話 雪景色

私が目を覚ましたのは、まだ夜も明けていない時刻だった。

携帯の電源をつけ、時刻を見てみれば、五時を回ったばかりである。

私はおもむろに起き上がると、浴衣の崩れを戻し、袋を持って外へとでる。

旅館のほとんどの明かりが落ちているため暗く、見渡しが悪い。

仕方がないので、私は、ドアを閉め、そこにもたれかかると目を瞑る。

まあ、こうしておけば、しばらくすればある程度は見渡せるはずである。

そして、案の定、三十秒ほど我慢した結果、歩ける程度まで暗闇に目が慣れた。

極力私は、壁をつたうようにして、廊下を歩き階段を下りる。

もうここまでくれば、安全である。

さすがに一階までくれば、廊下の明かりも少々ついている。

多少心許ない気もしないでもないが、まあ大丈夫だろう。

躓く事はないはずである。

私は、ある程度周りを見回してから、再度歩を進める。

向かう先は、電気の消えている部屋。

いや、部屋ではない。

浴場である。

他の旅館ではどうなのかは分からないが、ここは24時間利用可能なのである。

だから、どうせならもう一風呂浴びようと思ったのだ。

一旦目が覚めた以上、今更二度寝しようとは思えない。

おそらく、そうすれば、朝食の時間に間に合いそうにもないからである。

二度寝したら、おそらく次に起きるのはきっと、昼近くになることはまず間違いないからである。

私は、脱衣所に入ると、手探りで灯りのスイッチを探す。

さすがにこんな時間にまで灯りをつけるようなことはしていないみたいである。

明かりをつけると、すぐに帯をはずし、浴衣を脱ぎ、籠に入れる。

やはり冬だけあって、早朝は夜なんかとは比べ物にならないほど、

寒い。

いや、冷たいと言った方が正しいか。

肌が空気に触れた瞬間鋭い痛みを感じたのだ。

足先など、既に感覚がない。

私は出来るだけ急いで、中に入ると、さつさと頭と体を洗い、中へと入る。

足先にしびれるような痛みが走るが、逆にそれが心地よい。

窓の外を見ると、家の明かりもなく、相変わらずの見渡す限りの闇である。

けれど、屋根や道路に新しく積もった雪が月明かりを浴びて淡く輝き、どこか幻想的だった。

できれば、いつまでも見ていたいと思う風景だ。

私は、屋内に掛けられている時計に目をやる。

まだ夜明けまでには時間がある。

まだ、しばらくの間は見れるはずである。

この幻想的な風景を。

第十話 私と彼女と春手前の海（前書き）

godaccell様、感想ありがとうございました。
お返事させていただきました。

第十話 私と彼女と春手前の海

数回ほどデートを重ねた後に、私と彼女で、海へ行った。

まだ春手前で肌寒い時期のことだった。

「うわー、やっぱりこの時期だとまだ寒いね」

そう言っていると、彼女は自分の体を抱き、私の方へと向き直った。

けれどその表情は、彼女の言葉振りとは少々異なり、本当に楽しそうである。

「でも、誰もいないから、独り占めだね」

あ、そういうことか。

思わず心の中でそう呟いていた。

何がそこまで嬉しいのか計りかねていたのだ。

けれど、彼女の感想は賛成できる。

いや、違うか、私がここを選んだのは、それが理由だからだ。

今まで、全部彼女に任せてきた私だが、そろそろ自分でも何かしないといけないと思い始めたのだ。

さすがに、進歩がないし、自分としても情けなさ過ぎる。

そう思ってたのだ。

「ええっと、こっちにきてくれる？」

本当に楽しそうに、しげしげと目の前に広がる海を見る彼女を私としてはいつまでも眺めていたかったのだ。

けれど、いつまでもここにいては、体が冷えてしまう。

彼女もそれが十分に分かっているのだろう、私の意見を素直に聞き入れると、傍までゆっくりと歩いてくる。

「じゃあ、俺の後に……」

とっておきの場所があるので、彼女にぜひ連れて行こうと思い、ついてきて、と言おうとしたのだが、皆まで言わせてもらえなかった。

彼女が後ろから抱き付いてきたからである。

女性慣れしていない私は正直言つて、あわてた。

もう、これでもかと言つぐらいの慌てぶりだった。

思わず、そのまま前に倒れてしまいそうなほどだったのだから、よほどの慌てぶりだと言つことが分かんと思う。

彼女のほうも、あまりにも私が慌てるので、驚いたらしく、私と一

緒にあたふたしている。

はたから見れば、何をしているのだろう、このバカップルは何てことが言われてもおかしくないほどである。

しばらくの間、馬鹿みたいにたたらを踏んでいたが、どうにかこうにかして立て直した。

そのときには、お互い息を切らして座り込んでいた。

私は、息を整えながら立ち上がると彼女に手を差し出す。

「さ、ついてきて」

そして、立ち上がらせると、すぐに手を放し、目的地へと向かった。

向かった先は岩場だった。

いろいろなところでこぼがあり、私はそれをつまく使って慎重に上る。

たいした高さではないし、下は砂地なので危ないわけではないが、それでも慎重に越したことはない。

ようやく、全部上りきったところで、下を見ると呆然と私を見ている彼女の姿があった。

「えっと、俺がしたように上ってみて」

もともと目的地はここなのである、そこでいられても困る。

それに、下よりこの方がずっと眺めが良い。

と思う。

さすがにどうしても無理そうだったら、諦めるが彼女の運動神経なら大丈夫だと思う。

別に絶壁なわけでもない。

一番初めに上ったのは小学生だったのだが、その時の私でも軽く上れたぐらいのものなんだから、彼女ならできるはずである。

「ほら」

そう言っただけで彼女を促す。

上るときはまず間違いなく安全だと言う保証をつけてもいい。

それが伝わったのかは、定かではないが、どうやら彼女もようやく決心がついたらしく、一回頷くとよじ登り始める。

不慣れなため、何度か手の位置を変えてはいたが、しっかりと見極めて手を置いているので見ていて安心できる。

私なんかは行き当たりばつたりのため、何度か落ちた事がある。

怪我とかは一度もしたことはなかったが。

「はい、お疲れ」

ようやく私のところまで来たので、手を差し出す。

彼女もそれを拒否する事はなく、素直に取ると私の傍まで来る。

「ほら、見てみて」

傍まで着た彼女の肩を掴むと、向きを変える。

その瞬間目の前には海だけが見える。

そう、砂浜も何もかもが消えて、海だけが見える。

海の先に見えるはずの島も、まるであたかも存在しないかのように、消えてしまっている。

彼女もその風景を見て黙り込んでいる。

ちょっとした感動を与えられればいいのだが。

そんな事を内心で思いながら、彼女を座らせる。

立っただけはここに来た意味がない。

もともとここはくぼんでいるため、座ってさえいれば、風をさえぎってくれる。

それこそ、海から吹いてこない限りは。

彼女はいまだに海を見ている。

その姿を見て、幼い自分を重ねてしまった。

はじめてみたここからの景色に心を奪われてしまった、幼い私の姿を。

それからどれくらい彼女が景色に見とれていたのかは分からない。

ただ、食い入るように見ていた。

その姿はまるで、何かに憑かれているようでもあった。

いや、もしかしたら憑かれていたのかもしれない海の精に。

「綺麗だね」

ようやく視線を私に戻した彼女の第一声はまさしく私が望んでいたものだった。

「でしょ？俺のお気に入りの場所。誰にも教えた事ない、とっておきの場所なんだ」

そう、誰にも教えた事などない。

ここは私だけの場所。

誰にも侵されたくない、あたかも聖域みたいな場所だった。

だから、初めてこの場所を教えて、出た感想が私の望んでいたものだったから、自然と声のトーンも高くなった。

それを聞いた彼女は嬉しそうだった。

理由は分からない。

でも、彼女を喜ばせる事ができたのだから、上出来だと思う。

もとより、私の願いはそれだけだったのだから。

彼女の喜びが私の幸せ。

どこかの三文小説のような言葉だけど、まさしくそれだった。

彼女が幸せだったならそれでいい。

そう思えたから、ここを教えたのだ。

とっておきの、私が知っている一番の絶景を。

「でも、来るのは大変なんだね。」

まあ、それは否定しないが。

「でも、そんなに難しくはなかったでしょう?」

それでも、そんなに難しくはなかったはずである。

そう思ってたのに、どうやら彼女にはそう思えなかったらしく、少々不満げな顔をしている。

「小学生のときから、俺は上ってたんだし」

そう言っと、彼女は何も反論はしなかった。

さっきも言ったように、子供の私でもたやすく上れたのだから、それほど難しいわけではないのである。

と言う事は、もしこれが難しいのならば、彼女は小学生の私より運動音痴と言う事になるのである。

まあ、彼女もそれだけはお断りのはずである。

依然として不満げな顔をしているが。

仕方がない。

心内でそう思うと

「でも、やっぱりこういうのは、一人で見るものじゃないね」

彼女に話しかける。

せっかくの絶景なのだ、楽しんでもらわなくては意味がない。

だから、ちょっと気恥ずかしい感もあるが、ここはぐっと耐えるしかない。

まあ、彼女のほうは俺が意図している事には全然気付いていないみたいだが。

「誰かと一緒に見るほうが、ずっといいよね。」

そういつて彼女の手を握る。

自分からこんな事をするのは始めてである。

今までずっと迷っていたのだが、今この瞬間やらないといけない、心の中でそう思ったのだ。

「そうだね」

彼女のほうも、私が何を言いたいのか伝わったらしく、しっかりと握り返してくれた。

その手は暖かった。

どうしようもないほど暖かった。

たぶん、これが人の言う幸せの一つなんだと思う。

この暖かさは、人の心を和ませる。

寂しさを拭い去ってくれる。

私は、決して一人ではないんだ。

すぐ傍に心を暖めてくれる人がいるんだ。

そう思わせてくれるものがある。

彼女の手の暖かさは。

私はいつそう強く彼女の手を握り締める。

離したくはなかった。

何があっても、この手だけは離したくはなかった。

たぶん、彼女の手を放たしたとき、私は今の私ではいられなくなってしまう。

きっと何かが砕け散ってしまう。

それほどまで彼女の存在は、私にとっては大切に、必要なものなのだ。

なくてはならないものなのだ。

そして、できれば、彼女にとって私もそうであって欲しい。

私はそのとき、心の中でそう思った。

第十一話 突然のコールと携帯

夜明けが近いのだろう、少しずつ闇に光が差し始めた。

時計を見れば、もう六時を回っている。

考え事、いや思い出に浸っているうちに、いつの間にか長時間たつたみたいである。

私はおもむろに立ち上がると、湯船から出る。

もう、そろそろ、出ておかないと脱水症状を起こしかねない。

実際、少々足元がおぼつかなくなってきた。

このまま長湯したら、それこそ命の危険にかかわる。

さっさとでて、水分補給をすべきである。

湯船から出ると、まず体を洗ったタオルを絞り、水気を取った上で体を拭く。

中学校の研修のときに、言われた事がどうやら体にしみこんだらしく、今でも自分の家以外で風呂に入るときはこうしている。

まあ、当然のエチケットと言えば、そうなのだろうが。

風呂から上がった後に、すぐそばにある自販機ですでに王道と化しているコーヒー牛乳を買って飲むと、自分の部屋に戻る。

長湯のし過ぎのためか体が火照っており、暖房などつけようという気にもならない。

私は、テレビの電源をつけると適当にチャンネルを変える。

けれど、やはりこの時間帯には大して面白いものがあるわけでもなく、どうしたものだろうかと、思案気にしていると不意に携帯がなり始めた。

びっくりした私は思わず条件反射のごとく、携帯を手に取り、でようつとしていた。

しかし、画面に出てきた彼女の名前を目にした瞬間、携帯を放り投げた。

そもそも、私が馬鹿だった。

なぜ、電源を切るのを忘れてしまったのだ。

いくら寝起きで頭がぼんやりしていたからと言って、あまりにも自分のふがいなさのため息が出てきてしまう。

私はなり続く電話が切れるのをじっと待った。

けれど、初めてつながったのをこれ幸いと思い、いつまでも鳴らし続ける。

仕方がないので私は電池を外して、電源を切ると、出来るだけ急いで、設定を変える。

彼女からの電話を拒否するためである。

そして、それが終わるとすぐ電源を切った。

次は、誰から掛かってくるか分からない。

それこそ、彼女から電話が掛かってきた以上、家から来る可能性もある。

まあ、家からの場合ならば、どうにか対応できる。

それ以上に、さすがに一応電話の一本ぐらい掛けておかなくてはいいけない。

ただ、今少々あわてている状況で電話をすると、致命的なミスをしてしまう可能性もある。

今いる場所を特定されるような羽目だけはしたくない。

そう言えば、携帯で思い出したが、今、私が持っている携帯は彼女が選んだものである。

もちろん、買いに行く際は私と親といったのだが、パンフレットを図書室で二人広げて、ああだ、こうだとよく言って決めたのである。

まあ、私は大して意見を言わなかったし、どんな奴がいいのか分からなかったのだ、ほとんど彼女に決めてもらったのだけでも。

場所は別だったが、同じ日に同じ機種の手機を買った、次の日に見せ

合いをした。

もちろん、場所は図書室だった。

「せーの」

二人でそういつてお互いに自分の携帯を出す。

彼女が出した携帯の色は銀色。

そして私もまた銀色だった。

彼女は目を丸くして驚いていた。

ただ、私のほうは全く顔には出さなかったが私もまた驚いていた。

まだ、彼女との間に距離を置いておきたかったため、あまり素直な表情を見せられなかったのだが、このとき彼女と私の感性が少し似ているのではないかと思い、嬉しくもなった。

その後、先生にそれが見つかってしまったが、お互い日ごろの行いというか日頃の仕事振りに免じて許してもらえた。

ただし、次はないと念を押されたが。

そのため、私に関してはそれから以降、学校で携帯を開く事はなかった。

たまに、メールが入ってくることもあったが、その際は、休み時間にトイレに行って返事を送っていた。

やはり、長い間自分を演じていたため、優等生でいることが当たり前となり前となってきたのだろうか。

誰にも自分の本当の姿を見られたくはなかったのだ。

そう例え、それが彼女だったとしても。

しばらくして、ようやく冷静さを取り戻すと、私は携帯を握り、自宅へと電話を掛ける。

まだ、朝も早い。ため母親は起きていないのだろうか、なかなかでなかったが、5コール目にしてようやくでてきた。

「もしもし、私です」

朝も早い。ため、少々機嫌が悪いのだろうか。

かなり気のたった声で電話に出られたので、出来るだけ私は静かな口調にした。

「あんな、今どこにいるの」

けれど、それが気に食わなかったのか。

それとも行方不明になっているくせに堂々と電話を掛けてきたことが気に食わないのか、さらに語調が強くなる。

「と言うか、これはどういうことなの。いきなり、無断外泊なんてあんた、今の自分の立場……」

さらには、矢継ぎ早にああだ、こうだといってくる。

まあ、母親がここまでして言いたくなる気持ちも分からなくもないのだが、素直に耳を貸すつもりは毛頭なかった。

携帯を離して、話が切れるまで待つ。

まあ、すぐに終わるだろう。

案の定、怒りが強かったのだろう、すぐに息が切れて黙り込む。

もちろん、この機を逃すつもりはない。

「私は今、楽しく余暇を過ごしています。何か犯罪に手を貸しているわけでもなく、犯罪に巻き込まれているわけでもないの、心配は要りません。明日の朝までには帰ります。それでは。」

私は言いたい事だけ言うと、さっさと電話を切るとついでに電源も切る。

ただ単に無事な事を伝えるための電話だったので、無駄話をする必要もないからである。

私は携帯を再度たたみの上に放り投げると、布団の上に寝転がる。

何となく自分が哀れに思えたからだ。

結局私はどんなしがらみからも逃れる事などできはしないのだ。

縛られ続けるしかできないのだ。

人形として。

そう、母親は私に人形でいて欲しいのである。

自分が自慢できる優秀な息子。

自分勝手な行動をせず、万事において親の望む行動しかない息子。

そして、今の私はそうではない。

母親の望むとおりの存在ではない。

それが悔しいのだろう。そして、認めたくはないのだろう。

自分の息子がそんな事をするはずがないと。

本当にばかばかしいと思う。

私は人間だ。

人形などではないのだ、人形のようにおもちゃなどではないのである。

意思だってしっかりあるし、時には間違いを犯したくもなる。

全て、正しい事ばかりをしていても、決して正しい人間ではあり続ける事はできないのである。

そして、それに気付かせてくれたのが彼女。

いや、行動に移すきっかけを作ってくれたのが、彼女なのである。

本当の意味での人間臭さを私に教えてくれた。

どこか希薄な存在でしかなかった私にアクセントをくれた。

全てのきっかけは彼女だった。

けれど、私はもう彼女の傍にいられない。

彼女の傍で安穩とした生活を送る事はできない。

だから、私はまた変わらなくてはならない。

彼女が私を今の私に変えてくれたように。

今度は、もう一歩進んだ私にならなくてはならない。

初めは、ただの生きた木偶の坊だった。

そして、今は人間臭さを覚えたばかりの幼子。

だから、次はひとり立ちをしなくてはならない。

自分で自分を支えられるような、そんな人間にならなくてはならな

いのである。

そして、それをするには、ここで一人考えてみる事が必要なのである。

第十二話 お土産と城崎巡りと

豪勢な朝食を取った後、私はしばらくしてからチェックアウトをして街へと向かう。

その際、駅まで車で送ってもらう。

本当に料金の割に、サービスが行き届いている。

適当に選んだつもりが、いいところを選んでいた。

本当に運がいいと思う。

まあ、一人でくるものではない、と思わされるような場面もあったが、それはそれでよかったのではないかと思う。

私は、駅につくとすぐにそばにある里の湯という外湯めぐりの第一番に向かう。

朝一番に入ったくせにまたかと思うかもしれない。

けれど、それでも、せっかく来たのだから、できるだけ多く入っておきたいのである。

とは言っても、おそらく時間的には、これをあわせて二つ程度だろう。

時間を削ってはいるのは少々もったいないし、それに運動部に入っていたわけでもないので、体力的にもきつい。

そういうわけでそれぐらいにしておいた方が無難なのである。

そう言う訳で早速入らせてもらおうと思って、玄関まで着てみて驚いた。

しまっていたからである。

呆然とドアの前で突っ立っていると、営業案内が描いてあった。

私はそれをしげしげと眺め、ようやく今の状況がやっと分かった。

ただ単に今日は、定休日だったのだ。

私は、ため息をつく、別の外湯へと向かう。

適当に道を歩いていると、ちらほらと店先に並んでいる商品が目に入る。

ちらほらとかにも並んでいて、これを土産として買えば、妹たちは喜ぶだろうか、そんな事も考えてしまう。

やはり、私だけに食べてしまったと言う事に、少々引け目があるのかもしれない。

土産でも買ってやろう。

私はそう思うと、適当に選び始める。

結局、買ったのはお菓子だった。

一瞬、饅頭でも買ってみようかとも思ったが、結局却下した。

私は好きだが、妹たちはそうではないからだ。

それに、城崎銘菓と書かれてはいるが、どこにでもありそうな感が否めない。

そう考えると、やはりこちらの方が無難かと思ってしまうのだ。

私は、自分が買ったお土産の入っている袋を覗き込む。

その中には、異彩を放っているものもあった。

キスをしたくなる飴。

目が惹かれてしまい、思わず買ってしまった。

他にもいろいろあった。

たとえば、泣きたくなる飴とか、勉強がしたくなる飴とか、他にも本当に数多くあった。

おそらく、中身は同じなのだろうが、おかしく仕方なかった。

私はこういうのが好きなのだ。

本当にはかばかしくて、くすりと笑ってしまいたくなるような、そんなものが。

携帯を取り出し電源をつけて時間を見る。

どうやら、お土産をどれにするかで相当迷ったため、かなりの時間が立ってしまったようで、もう昼を過ぎていた。

「そろそろかな。」

けれど、昼食はとらないことにした。

なんだか疲れて食べる気が起きないからである。

商店街を過ぎると、とおриには旅館がずらりと並んでいた。

私が泊まった旅館とは逆方向だったし、一度ここを通ったときは車だったので、詳しいところを見ることができなかったのである。

私は、それらをしげしげと眺めながら、のんびりと歩く。

周りを見れば、平日のためなのだろう、人の姿はあまり見えない。

たまに見かれる人と言えば、明らかに仕事の第一線を終えたような老夫婦ばかりである。

私はそれを眺めながら、どんどん進んでいく。

いつの間にかに橋を渡っていたが、それも気にせず進んでいく。

しばらくした後、また商店街が会った。

今度は、先ほどのものと比べ比較的落ち着いた佇みをしている。

それがとても心地いい。

自然と私の歩く足取りも軽くなる。

そのためなのだろう、普段なら全く気付かないような松尾芭蕉と書かれた小さなたて看板を見つけた。

古くからある温泉街である、おそらく松尾芭蕉も来た事があってもおかしくない。

よって、それにちなんだ何かがあるのだろう。

私は深く考えることなく、そのたて看板のとおり曲がってみた。

けれど、角を曲がった瞬間ため息をついてしまった。

少々急な階段を見つけたからでる。

一瞬、見なかったことにしようかとも思ったが、まあ、これも運動かと思えばおすと、私はそのまま上り始めた。

上り始めて分かったが、それほど多いわけでもなく、比較的楽だった。

数分も上らないうちについた。

けれど、それと同時にため息もつきもした。

確かに、芭蕉にちなんだものがあつた。

あつたのだが、小さな建物の中にぽつんと置かれている芭蕉像と、そばにある小さな立石だけである。

そこには、この場所にちなんだ句が読まれているが、それでもどつと力が抜けてしまった。

別に、ドンと大きな社が立っている事を期待していたわけでもないのだが、けれどこれではあまりにも侘し過ぎる。

私はため息をつく、一応その像に手を合わせると、今来た道を戻る。

その足取りが少々力ないようだが、この際は許して欲しい。

その後、また適当に歩いた後、一番奥にある鴻の湯に入ることにした。

昨日とは違い、もう券を持っていないので、料金を払ってから、中に入る。

昨日入った一の湯とは違い少々小さい気がするが、そつと心の中にとどめる程度で済ませると、服を脱ぐとさつさと

中に入る。

中は湯煙で充満している事はなかった。

昨日あまりにもすごかったので、もしかしたらと思ったのだが、どうやらあそこだけが特別だったみたいである。

私は一息吐くと、体を洗うと中に入る。

ここはどうやら普通の深さらしく、ゆっくりと入れる。

けれど、窓ガラスの向こうを見ると、思わず外に出たくなる。

露天があつたのだが、周りには雪が積もっているのである。

しかも、またちらほらと雪が降ってきたらしく、それがまた風情がある。

我慢の限界だった。

私はおもむろに立ち上がると、外へとでる。

外の外気に触れた途端に、震え上がり、肌には鳥肌が立っている。

さすがにこのまま飛び込むのはまずいと思ったので、体に湯を掛けてからはいる。

さすがに外気に触れているためか、少々ぬるくなっているが、それでも十分に暖かい。

私は、ゆっくりとつかると、瞳を閉じた。

第十三話 彼女と私の初喧嘩

彼女とけんかしたのは、覚えている限り一度きりだったと思う。

理由の方は一応聞いたのだが、分からない。

うまく理解できなかったと言った方が正しいか。

それに喧嘩といっても、彼女がいきなり私に対して盛大に悪態をついた、その程度の物である。

最初のうちは、いつもどおりに彼女と帰っていた。

けれど、どんどん険しくなっていく彼女の顔を見ていられずに

「何かあったの？」

そう訊ねたのだが、どうやらそれがいけなかったらしく、彼女の顔はさらに険しくなり、私の顔を睨むと

「なんでもない」

そういつて、そっぽを向く。

けれど、私が知っている限り、彼女のそんな顔を見たことは一度と
してした事はなかった。

だから、彼女がそう言う事で余計に心配になる。

だからもう一度訊ねなおしたのだが、

「なんでもないって言うてるでしょう」

今度こそ、本当に本格的に怒らせてしまった。

けれど、私からしてみれば、何で言われもなく怒られなくてはいけないのか分らない。

思わずムカツと来たが、それでも私は必死になって心を落ち着ける。

なだめる方まで感情的になってしまっでは意味がない。

彼女の怒りを静めるのが先である。

「まあ、いくらなんでも、怒鳴らなくても……」

「しつこいのがいけないのよ」

「な……」

私は、思わず言葉を失った。

彼女と言えば、しつかりそうだったあと私のことを睨み、またそっぽを向く。

そんな彼女の態度が、一々私の怒りを刺激した。

けれど、必死になってその怒りを抑える。

彼女にだって何か理由があるのだ。

それを分かってあげなくてはいけない。

私は自分自身にそう言い聞かせる。

「でも、それは君が心配だから……」

「本当に？」

彼女の言葉、そして表情は、私の言った言葉に対して、何の信頼もないそぶりだった。

あなたは本当にそんな事を言っているの？

ふん、そんな言葉言われたところで、到底信じられない。

そういつているようにしか思えない。

私の中の怒りがさらに膨らむ。

それと同時に必死になって彼女に嘆願していた。

これ以上、私を怒らせないでくれ、と。

私は、彼女とはけんかしたくない。

いや、そもそも自分の感情と言うものを見せたくはない。

この純粋な怒りだけは。

けれど、彼女は私の思いをことごとく打ち落としていく。

私が折れるような言葉を言っても、彼女は逆に噛み付いてくるだけ。

まるで、私の言葉なんて聞きたくもないかのように。

結局、私は、途中で彼女と別れた。

自分の我慢の限界だったのもある。

けれど、それ以上に彼女には落ち着いてものを考える時間が必要だ
と思ったのだ。

いや、それはいいわけだったのだ。

ただ、彼女のご機嫌取りに疲れただけのことだったのだ。

そのときから既に、私は自分の事しか見えていなかったのだ。

家に帰ると、私は、服を着替え、そのままベッドの上に倒れこむ。

それ以外何もしない。

何もしたくない。

今の私の頭の中はどす黒い怒りだけで占めており、私はそれに振り
回されかけている。

もし、こんな時に、何かをしたところで、まともな結果にならない

ことぐらいお見通しである。

私は、盛大にため息をつく、天井を仰ぎ見る。

真っ白な、本当に真っ白な天井である。

母親がうるさいので、部屋の掃除に怠りなどもなく綺麗なのだが、それが逆に腹立たしい。

本当にこれが帰りでよかったと思う。

もし、行きときにあのような局面に迎えていれば、私は校内でこのどす黒い感情と対面しなくてはならなかったのだ。

そう思うと、何ともいえない。

きつと、あからさまな態度で人と接する事になっていただろうことぐらい簡単に予想ができる。

そんな状態の私など、到底私ではない。

学校にいる限り、私は私らしく振舞わなくてはならない。

既に、校内での私の役割がある。

いや、この場合はクラスでの、と言うほうが正しいか。

まあ、どちらにしろ、クラス内での私の位置どころでは、そんなことは許されないのである。

感情をもてあまし、他人に当たってしまうようなことは。

私はおもむろに立ち上がると、本棚から一冊の小説を取り出す。心の中が荒れて、どうしようもない時にはいつもそうしていた。

この本にはそれだけの力があつた。

初めて見た時以来、私はこの本の魅力の虜となつてしまった。

いや、この本の作家にか。

そして、その作家の著作物の中でも、特にこれが私のお気に入りなのだ。

私の心を虜いってくれる唯一のものだから。

第十四話 帰途

雪見風呂をしっかりと満喫した私は、水分補給をした後駅へと向かう。

もうそろそろ帰らなくてはいけない時間帯である。

私は、ため息をつくとき、歩き出す。

先ほどのけんかの結果は、彼女の方が折れる事によって幕が引かれた。

もともと、彼女が勝手にヒステリーを起こしていただけなので、私がどうやっても謝りようがないのも事実だが、彼女の決断のおかげで、いつまでも緒を引かずに済んだのだ素直に感謝しておくべきだろう。

実際、私とその愛読書を読み終えてからしばらくした後に、彼女からメールが来たのである。

内容の方は

『さっきはごめんなさい。あんな態度を取って』

本当は、もう少し絵文字がついていたのだが、まあそれは見逃してもらおう。

それに重要なのは文章なのである。

もちろん、私は許した。

本のおかげでどうにか冷静さを取り戻していたため、すんなり許せた。

割り切る事ができたのだ。

さすがに、冷静じゃない状況となればすんなり許せるかどうかは怪しい。

私はそこまで出来た人間じゃないと思う。

その後、帰りのときの態度のわけを聞いたのだが、どうやら嫉妬からだっらしい。

けれど、それが私には今も理解できなかった。

彼女がどうして嫉妬なんかをしたか、である。

はっきり言えば、私は人付き合いはうまくない。

その上、女子と話すのが極端に苦手で、あまり近づこうとはしない。

それこそ、校内でともに話すのは、彼女と部活の女子、そして図書室の先生だけである。

だから、どうしてもそんな事をしたのが良くか分からなかったのである。

その事についても聞いてみたのだが、彼女は結局答えてはくれなか

った。

私は、駅につくと券売機で切符を買った後に、時刻表を見る。

どうやら、ちょうど良い時間帶らしく、後数分で汽車が出るみたいである。

私は、目当ての乗り場に行くと、ちょうどついたばかりの汽車に乗り込み、がらがらの席に座る。

窓の外を眺めれば、まだちらほらと雪が降っている。

小説でこんな風景の中で佇んでいる人物の事を幾度となくうらやんだが、逆にこうして体験してみると、ことのたいしたことなさに幻滅に近いものを感じてしまう。

けれど、今はそんな事を考えている場合ではない。

逃げの時間は終わったのである。

私は、この移動中の間に、自分の行動の計画を練らなくてはならないのである。

そう、これから先、一人で動くために。

第十五話 たった一通のメールで（前書き）

ここからしばらく彼女視点に変わります。
それに伴って、時間軸も少し戻ります。

第十五話 たった一通のメールで

昼過ぎになって、ようやく私は目を覚ました。

ここ最近ずっと練習、練習でまともにゆっくりするなんてできなかった。

けれど、そんな日々も今日でしまい、ようやくお母さんから合格点もらった。

と言うわけで、今日は久しぶりにあの人と遊びに行こう。

ここ最近ずっと忙しくておざなりになってしまっていたので、怒られてしまいかねない。

まあ、彼は怒りはしないだろう。

彼は優しいから、きっと笑って許してくれるはず。

私は、内心うきうき気分で、寝癖を治し、顔を洗うと着替え始める。

その際、洗面所でお母さんとばったり会って、冷やかされてしまった。

どうやら、それほど私の顔は緩みきっているようだ。

なんたって、本当に久しぶりに彼に会うのだ。

全ての身支度を終わると私は、机の上に置いておいた携帯を手に取り

る。

どうやら、私が寝てる間にメールが来てたらしく、画面には新着メールあり、と表示されている。

私は、それをおもむろに開く。

送ってきたのはその彼だった。

もしかしたらデートに誘ってくれたのだろうか。

そう思って、内心さらにうきうきして読み始めたのだが、その瞬間愕然とした。

ひざが笑い始めて、最終的にはその場に崩れ落ちてしまう。

いや、それだけじゃない。

体中の力が抜けてしまい、何も考えられない。

ただ、頭の中で、どうして、と言う単語だけが、掠め続けるだけ。

彼の送ってきたメールにはたった十文字程度の文章。

『もう疲れた。別れよう』

そのたった十文字程度の文章で、私の中の全てが崩れ去ってしまう。

もう、今の自分がどこにいるのかなんて分からない。

自分自身を支えられているのかでさえ、分からない。

それぐらい彼の存在は私の中で大きい。

私は、のろのろと立ち上がると、たどたどしく階段を降りると玄関で靴を履き替える。

その途中、お母さんは私の豹変振りを見て驚き

「ちょっと、あなたどうしたの」

そう訊ねるが、今の私にはそれに答えるだけの余力はない。

ただ、呆然と歩く事しかできない。

彼の家まで。

彼が一体どうしてこんな事をいったのかわからない。

今まで、私たちは本当に仲が良かったと思う。

だから、こんな急な別れ方になるはずなんてない。

きつと、彼に何かあったのだ。

私はそう思う。

だから、私は彼に直接あつて確かめたい。

電話やメールじゃたぶん足りないと思う。

いや、そもそも自分の感情と言うものを見せたくはない。

絶対に、直接話さないと分かり合えないと思う。

だから、本当は走って急がなくてはいけなのだけれども、やっぱりさっきのメールのダメージが大きいらしく、力が入らない。

どうしても、とぼとぼとしか歩けない。

そして、私は彼の家へと向かった。

第十六話 二人の仲のきっかけ？

彼と一番最初に会ったのは、図書委員での仕事だった。

ずっと、押し黙ったままの無愛想顔で、いくら私が話しかけても簡潔な答えしか出さなかった。

それどころか、私の存在を鼻から無視しているかのようにさえ思えた。

だから、私も彼と話そう何て考えを捨てると、仕事に専念するようになった。

そんなふうに考えれば、本当に付き合いやすい人だったから。

けれど、そんな私の思い描く彼が間違いである事に気がついたのは、そう十月の半ばの事だった。

彼と私は放課後の当番だったのだが、ようやくその仕事も終わり、暗くなる前に帰ろうと思って、帰る支度をしていると、図書の先生に仕事が残っているから手伝ってくれないか、と頼まれた。

正直言って、やりたくなかった。

早く帰って家でゆっくりとくつろぎたかった。

けれど、私と同じく当番だった彼は、素直に了解していたので、さすがに嫌、とはいえなかった。

わがままにしか聞えないからだ。

結局、私と彼と先生三人がかりで仕事をする事になったんだけど、その量は半端じゃなかった。

一体、どうやったらここまでの量の仕事ができるのか不思議なくらいだった。

けれど、だからと言って、愚痴をこぼしていても、仕事が進むわけではない。

私は、ため息をつきたいのを必死に我慢すると、仕事に専念する。

そして、大体自分の作業の半分ぐらいが終わったところで、周りを見してみる。

どうやら、先生はどこかに出かけているらしく、部屋には私と彼しかない。

何と無く、気まずい思いをしながらも、不自然に決してならない様に彼の方を眺めた。

けれど、見なければ良かったのかもしれない。

彼の仕事のスピードは明らかに私より早かった。

彼は私が半分しかできなかった間に、自分の仕事は当の昔に終えており、今は先生の分までやっている。

おそらく、だからこそ、先生はいないのだろう。

安心して任せられる人がいるのだから。

思い出して見れば、いつもそうだった。

彼は私がやりやすいように仕事をし、その上で自分の仕事を手早くやってのけていた。

実際、彼が部活でどうしても、出られないときがあったのだけれども、そのときはつきりと思った。

やりにくい、と。

先生が私に気を聞かせて、ヘルプとしてもう一人付けてくれたのだけれども、すぐくやりにくかった。

こういっただけ言い過ぎなのかもしれないけれども、全く息が合わなかった。

その後、先生にその事を言ったのだが、そのとき笑って

「当たり前よ。なんたって、彼は委員会が一番仕事ができるんだもの」

そう言っていた。

そのときは、さすがにそれは言いすぎだろうと思い、笑って受け流したのだが、どうやらそれは正しかったみたいだ。

ここまで明確な差が出ているのだ、疑いようはない。

私は思わずため息をつき、外を眺める。

夏ももう終わってしまい、日が暮れるのはどんどん早くなる一方だ。こんな時間に女である私が一人歩きするのは危険なんかじゃないのかな、そう考えていると

「もう、遅くなってきたから、帰ったほうがいいんじゃない。後は俺と先生がやっておくから」

不意に誰かの声が脇から降ってきた。

いや、この部屋には二人しかいないので、彼なのだろうが何と無く信じられない。

あの、無愛想で、仮面をつけたような彼が話しかけてくるなんて。

「もうそろそろ日も暮れてくるだろうから、早めに帰ったほうがいいと思って。女の子の夜の一人歩きは危険だし」

けれど、彼はそんな事お構いなしの様子でさらに付け加えた。

けれど、今度こそ驚いた。

まさか、彼がこんな言葉を掛けてくるなんて誰が思うだろうか。

いつもいつも、冷たい態度しか示さなかった彼が、私のことをいたわるような言葉を。

私は思わず呆然とした。

けれど、すぐにそれが失礼な事だと気付くと、急いで、元の顔に戻すと

「うっん、平気。私も続けるよ」

答えを出す。

せつかくの申し出なのだが、やはりしっかりと仕事を頼まれてしまっている手前、途中で帰ることなんてしたくなかった。

「そっか、それならよろしく」

彼の方も、それが伝わったのか、別に無理強いをする様子はなく、ただそういつて頷くと、自分の作業に移った。

それにしても、さっき見たときより、さらに仕事が減っていた。

恐るべし、図書委員のホープ。

内心でそんな馬鹿な事を言いつつ、私も自分の仕事に戻った。

ようやく全部の仕事が終わった時には、七時を大きく回っていた。

先生のほうはしきりに申し訳なさそうにお礼を言っていたけど、逆

にそこまでされてしまうと、なんだか悪く思えてきてしまう。

隣にいる彼の方を見てみれば、普段聞きなれているのだろうか、全く気にしていない様子で、適当に受け流すとさっさと部屋から出て行ってしまふ。

やはり、その姿は前と同じで無愛想かつ仮面をつけている人しか見えない。

はつきりいえば、さっきの事が自分の幻にしか思えない。

そんな事を悶々と考えながら、下駄箱にいき玄関のドアを開けてみたら、もうびっくりした。

しとしと雨が降っていたのだ。

しかもどうやら、結構前から降っていたみたいで、ところどころ水溜りがある。

私は思わず呆然とした。

朝はあれほど晴れていたというのに、まさかここに来て雨が降り出すとは。

どうしようもない私は、ずっと呆然と外を見ていることしかできなかった。

一瞬、両親を呼べば、とも思いもしたが、残念な事に今日はお父さんは仕事で遅くなるし、お母さんも用事があるらしく、夜はいない。

つまり、誰も私のことを迎えになんてこれないと言ふ事なのだ。

私は、ため息をつくしかなかった。

どうやら、私に残されたのは、この雨の中は走って帰るしかないみたいだ。

一瞬、彼が夕方に一度気遣いをしてくれた時に帰っておけば、と思っただけ、すぐに消した。

いまさらそんな事行っても仕方がない。

それに、やっぱり途中で投げ出すような事はしたくは無い。

私は思い切り気合を入れて、早速走り出そうとしたのだけど不意に声を掛けられた。

思わずぎょつとして、声がしたほうを見て、すぐに誰か分かった。

つい先ほどまで一緒に仕事をしていた彼だった。

彼と分かって安心したのか、どうなのかは分からないけど、私は彼の質問に対して、小さく頷いて答えた。

何と無く、それが恥ずかしく笑ってしまったけれども。

まあ、彼が傘を貸してくれると言ふなら、その恥ずかしさも耐えられると思っただけ、さすがに傘を二本も持っているわけないもんだろ。

「俺、二本あるから、それ貸してあげる。それじゃあね」

そう思って、どうなるのだろうと思って、彼の方を見ていると、いきなりぐいっと目の前に傘を差し出し、私の手にしっかり握らせると、そういつてさっさと行ってしまった。

私といえば、思わず何かなんとか分からず握っている傘をぼんやりと眺める事しかできず、お礼なんて出来るはずもなかった。

その翌日は、気持ち良いぐらいの快晴だった。

その快晴も手伝って、私は早速昨日借りた傘を彼に返そうと思った。

思ったのだけれども、なかなか返せなかった。

彼の教室の前まではいけるのだが、どうしても中に入る勇氣はなかった。

おまけに、数回ほど目が合ったというのに、彼は全く私のほうへとはよってこなかった。

後で聞いた話では、傘を返すために自分の教室にまでくるなんて思わなかった、と言っていたので、動かなかった理由は分かったのだけれど、教室の前で、傘を持っているなんて恥ずかしくて仕方なかった。

本当に、自分は何をしているのだろうかと思ってしまって、最終的

には、教室の前まで行かず、放課後まで待つ事にした。

まあ、そのおかげで彼とゆっくり話すこともできたから言いのだけど、その当時はたいして彼のことを思っていたわけではないので、少々漠然としないものを感じていたけれども。

それでも、今思うと、それはそれでよかったんじゃないかって思う。

あの時、彼と話せたおかげで私は彼と言う人間を誤解せずにすんだ。

彼と話してすぐに分かった。

無愛想なんじゃなくて、すごく人見知りが激しく、特に女子相手になるとまともに話せないため、いくら私が話しかけても、そっけない答えしか返せなかっただけの事とか、そのほかにもいろいろと知る事ができた。

おかげで、私は彼と仲良くなれることができた。

第十七話 彼の優しさ

亀のような足取りだった私も、ようやく彼の家に辿り着く事が出来た。

時刻を見れば、ゆうに一時間はたっている。

しかも、メールが来たのはどうやら、朝も早い時刻だったらしく、かなり彼を待たせてしまっている事になる。

そのためか、こうして彼の家に来たのだが、チャイムを押す勇気が出ない。

押そうと思っても、体が硬直して思うように動いてくれない。

私は必死になって冷静になろうとする。

けれど、落ち着かせようとすればするほど、逆に心内が波打って、冷静どころの話ではなくなってしまう。

でも早くしなければ、さらに彼にいやな心象を与えてしまうかもしれない。

私は、力を精一杯振り絞るとチャイムを押す。

けれど、誰も出ない。

私はもう一度チャイムを押す。

けれど、相変わらず誰も出ない。

わけもなく突然怖くなって、私は彼の携帯に電話を掛けた。

けれど、つながらない。

何度掛けてみても、聞こえてくるのは、電源が切られていると言っ
アナウンスだけ。

私は思わず、その場に崩れ落ちてしまった。

理由は分からないけど、彼が何がしたいのかだけは分かった。

彼は、私とは会うどころか、話すらしたくないので、私をずっと避
けようとしている。

なぜなんだろう。

彼はどうして私のことを嫌ったのだろう。

私がかしたのだろうか？

もしかして、ずっと彼との事をおざなりにしていたのがいけなかつ
たのだろうか。

いくら、忙しくて疲れたからといって、電話もメールも適当にした
のがいけなかったのだろうか。

彼の優しさに甘えていた私がいけなかったのだろうか。

彼は、ずっとそんな私のことを許してくれた。

おぎなりの扱い方でも、彼は許容してくれた。

だから、私は甘えてしまった。

彼は、私に優しいから。

だからきつと、大丈夫なんだと勝手に思い込んでしまった。

彼はきつと、私の傍にいてくれる。

私をおいて行ったりしない。

何て勝手に思い込んでしまっていたのだ。

私は、のろのろと立ち上がると着た道を戻り始める。

彼が私に会おうとしてくれない以上、今ここにいても仕方がない。

明後日は登校日。

その日、会ってしつかりと話し合えばいい。

きつと、分かってくれるはず。

彼ならきつとわかってくれるはず。

彼は、優しい人だから。

だからきつと本当のことを言えば、笑って許してくれる。

そして、信じてくれるはずなんだ。

私が、どれほど彼のことかすきなのかって言う事を。

第十八話 彼女の思い

彼のことはあえてカテゴライズするならば、友達程度にしか思っていないかった。

彼の話は一つ一つ興味深く、とても参考になった。

「人が優しくできるのは、たぶん他の人に優しくしたり、愛してもらいたいからだと思うの。ほら、人は愛なしでは生きて行けないってよく言うでしょ。」

そう答えたんだけど、彼はそれを笑って否定した。

ううん、それとは少し違うか、自分自身にとっての優しさはそうじゃないと言っていた。

彼の答えはこうだった。

「優しさなんてものは、たぶん自己満足なんじゃないかと俺は思うよ。だってほら、よく考えてみて。小説とかで、主人公が好きな人のために命を張って何かする場面っていうのがあるでしょう？一見すると、何て健気なんだろうとか、そういうふうに思ってしまうがちだけど、護ってもらおう方からしてみればたまったものじゃないと思う。護られた人はその人の分まで生きなくちゃいけない。しかも自分のせいでその人は死んだんだと言う罪の意識を抱えながら。彼からしてみれば、自分の意思でそうしたんだから、彼女がそんなふうに思わなくて欲しいだろうけど、人の心なんてものはそう簡単に割り切れるようにできてなんかいない。絶対心のどこかで罪の意識にさいなまれ続けなくてはいけない。ね、そう考えたら、そう

いう健気さも、どこか独りよがりな感じを受けない？優しさも同じだと思う。まあ、相手からしてみれば、罪の意識にさいなまれないで済むだけ良いけど、でもやっぱり俺からしてみれば、自己満足でしかないように思えるんだ。結局、相手の嬉しそうな顔を見たいわけでしょう？それはあくまでも自分の利益にしかない。それに、優しさが常に、人のためになるとは限らない。自分の罪の意識にさいなまれている人が、罰してもらう事を望んでいる人に優しく手を差し伸べたところで、なんになる？逆に余計に辛くなるだけだと思わない？そんな時に使う優しさなんて、まさしく自己満足じゃないか。自分はその人より優位な立場にいて、かわいそうな彼を慰めてあげる。そんな自分は何て優しいんだろう。ほらね。自己満足だと思えてこない？」

初めて、それを聞いたとき私はもう、頭に血が上ってしまってどうしようもなかった。

なんだか、人というものの全てを否定しているような口ぶりが、我慢できなかった。

いや、我慢する気なんてものはしなかった。

もう、ありとあらゆる罵詈雑言を並べて、彼に言っていた。

けれど、彼は決して言い返そうとはしなかった。

逆に私が落ち着くのを待って

「まあ、俺からしてみればそんな感じなんだけど、なんかいやだよねこついの」

あつけらかんとそういったのだ。

私は、もう呆然とするしかなかった。

そして、それと同時に恥ずかしくもなった。

私と彼、どちらが子供かということがここで今はっきりとしたからだ。

それに彼も気付いたのだろう、珍しく淡い笑みを浮かべると

「だから、君はそのまま純粹でいて欲しいな」

そう言った。

彼からしてみれば、褒め言葉のつもりなのだろうけど、はっきり言わせてもらえば、何の慰めにもならない。

逆に、君はこのまま子供でいてくださいといっているようにしか聞えない。

私が逆に落ち込んでしまったことは言うまでもない。

と、話がずれてきたので、戻すけど、そう最初のうちは本当にいいあいのできる友人だった。

私には友達が少なかった。

自分でも言うのもなんだと思うけど、確かに私の容姿は良い。

平均並を超えていると思う。

だから、男子にはもてはやされて、それが理由で女子からは妬まれる。

だから、気の許せる友達なんて、せいぜい数人だった。

けれど、その友達とでさえも、言い合いなんてできなかった。

たぶん、友達を失いたくなかったから、それが怖くてできなかったんだと思う。

だから、彼が唯一のけんか友達だった。

まあ、いつも一方的に丸め込まれていたのも確かだけど、私はそれはそれで楽しかった。

男子は本当に苦手だったんだけど、彼からはなんと云うか男臭さなんてものを感じなかった。

後で聞いた話、彼自身も彼のお母さんにそういわれたらしい。

何でも、彼の話しでは、お父さんは仕事のため長期で家を留守にするため、普段は女性しかいなくて、しかも近所にも女の子がいなかったため、必然的に女の子と一緒にいる時間が多くなった実際に彼と話していてその仕草はどっちかと言うと、とっと思ってしまう時が何度もあった。

彼自身も分かっているのだろうけど、直せないらしい。

まあ、今ではそんな一面もいいと思うけれど。

そんなわけで、彼とは仲のいいけんか友達だったのだけど、それが変化したのは彼と彼の同じ部活の人と話しているときの姿を見たときだった。

彼は、今まで一度として、私に見せた事のない姿を、その人には見せていたのだ。

しかも、女子に。

これが、まだ男子だったら違ったのかもしれない。

まだ、男子だったら、やはり男子同士で通じ合うものがあるんだろうと思ったかもしれないけれど、現実はそのじゃなかった。

彼は本当に楽しそうに、その女子と話していた。

私に一度も見せた事もない、本当に人懐っこくて周りを明るくするような笑顔で、その女子と話していた。

私はそれがたまらなく悔しかった。

自分には絶対にそんな姿を見せない。

私に対しては絶対そんなふうには笑ったりしない。

ううん、それどころか、めったに笑う事すらしない。

だと言うのに、その女子とは……

それがたぶん、私が初めて感じた嫉妬と言う感情だと思う。

高校生にもなったと言うのに、私はまだ初恋すらしたことがなかった。

だから、そんな感情なんてものが自分にも存在する事なんて、全く知らなかったし、実際そのときもまさか自分が嫉妬しているなんて微塵も思っても見なかった。

ただ、彼のことを責めるばかりだった。

そう、彼がいくら話しかけても、私はそっけない態度で対応するようになったのだ。

今考えれば、何て幼稚な事をしていたんだろうと、あまりの情けなさにため息をついてしまうけれど、その時の私にはそれをしなければ気がすまないぐらいの不条理さを感じていた。

けれど、それでも彼は感情的にはなりはしなかった。

ただ、彼からそっと離れて行っただけ。

以前と同じように無愛想で仮面をつけたような顔で、必要事項しか言わなくなってしまった。

彼からしてみれば、当然のことだったのかもしれない。

彼には、こう感じられたんだと思う。

自分は嫌われたのだ、と。

だから、自分が身を引けばそれで済むと。

それに気がついたとき、情けない事に私はさらに強い怒りを彼に対してもってしまった。

彼のその余裕ぶっているところが気に入らなかったのだ。

別に余裕ぶってたわけじゃないんだと思う。

けれど、余裕のない私にはそれがわからなかった。

だから今度は完全に無視した。

返事すら返そうとはしなかった。

けれど、それでも彼は感情的にはならなかった。

あたかも仕事のように事務的に処理していた。

要するに彼から話しかけることすらやめたのだ。

よっほどの事情がない限りは。

今度こそそれに気がついて愕然とした。

自分の幼さに。

そして、自分の弱さに。

けれど、私は謝ることは出来なかった。

あれだけのことをやっていたくせに、謝る事すらできなかった。

ただ一言、ごめんなさいといえなかった。

本当に、そんな自分が惨めだった。

そんな自分が無様だった。

それからしばらくは、彼とはまともに顔を合わせられず、当番中以外は彼から避けるようにした。

そして、文化祭のとき、久しぶりに彼の姿をしっかりと見る事ができた。

演劇の舞台上のことだった。

彼が入っていた部活は演劇部だった。

彼はもともと演技する事が好きだったらしく、迷うことなく即決断したらしい。

そして、実際彼は演技がうまかった。

素人目だから、うまくはいえないけど、彼には独特の雰囲気がある。

何ともいえない、その翳りみたいな物が。

そして、私はそれをまるで何かに取り付かれたみたい食い入るようにしてみていた。

それぐらい、私のことをひきつける何かを持っていた。

彼の演技は。

そして、だからこそ、めくるめくる変わる彼の表情を自分だけのものにしたい。

そう思ってしまった。

そう、そのときになってようやく自分の心内が理解できた。

狂おしいほどまで、彼の全てを欲している。

何が何でも、彼の全てを手に入れたいと思う。

そして、どんなことをしてでも、彼を他の人には渡したくない。

そう、自分が彼に恋していると言うことに。

しかも、どうしようもないほど強く。

自分でも自分が抑えきれないほど強く。

そして、それと同時にだからこそ、あんな幼稚な事をしてしまったと言う事に。

彼を独り占めにしたからこそ、あんな幼稚な事をしてしまったと

いうことに。

全てが単なる嫉妬から起きたということに。

公演が終わり、せめて彼に謝るだけ謝ろうと思い、ステージ脇に行こうとしたところで、彼を見かけた。

どうやら、ここではなく別のところで着替えるらしく、脇にサブバスケットを持っており、すたすたと歩いていってしまふ。

予想外の事を、仕方なく私は彼を追いかける。

そして、ついたのは、

「…男子トイレ」

そう、男子トイレだった。

しかもなぜか特別教棟の。

と言うか、なぜこんなところで着替える必要があるのだろうか。

そして、だからこそ、めくるめくる変わる彼の表情を自分だけのものにしたい。

もしかして、彼は部員からいじめられているのではないだろうか。

半ば以上そんな事を悶々と考えていると、どうやら着替えが終わったらしく、トイレからでてきた彼と目がしっかりとあった。

「あ、あははは……」

なぜだろう、どうして人はこんなときに笑ってごまかそうとしてしまうのは。

そう、今の私は変な方向を見て、一人で笑っている。

不審者と思われても仕方ないような気もする。

けれど、いつまでもそうしているわけには行かないので、早いうちに謝っておこうと、彼の方に向き直ったのだが、そこには彼はいなかった。

いつの間にか、移動していたらしく、既に私の横を通り過ぎようとしていた。

「ちょっと待って!!」

思わず私は叫んでいた。

しかも、しっかりと彼の腕を掴んで。

周りを見れば、私とそして腕を掴まれている彼のことを興味津津顔で見ている。

つまり、今の私たちは格好の好奇の的と言う事になる。

「えっと、ちょっとこっちに来て」

さすがにこんな状況下ではまともに謝る事なんて出来そうにもない

ので、彼をぐいぐい引つ張ると、そのまま上へと上がる。

ちょうどいいことに、最上階には図書室がある。

先生にお願いして、ほんの少しの間だけ貸してもらおう。

いればの話だけでも。

どうやら日ごろの行いが良かったらしく、先生がいたので適当な理由を作って教室を貸してもらつと、ようやく一心地ついて、そっと息を吐いてると

「そろそろ、腕離してもらえないかな」

そして、その言葉でようやく気がついた。

今の今までずっと彼の腕を掴みっぱなしだったと言うことに。

それはつまり……

先生の前で説明しているときも、と言う事である。

もしかすると、先生全て分かっていたんじゃないのだろうか。

そして、それを分かった上で、あえてここを貸してくれたんじゃないのだろうか。

そんな憶測も浮かんでくる。

「あの、離して……」

「わあっ、ご、ごめん」

どうやら、一人で考え込んでしまつて、その事をすっかり忘れてしまつていたみたいだ。

慌てて私は彼の手を離すと、彼の方に向きなおす。

彼の方は、前と同じく無愛想、そして仮面つき、である。

どうすれば許してくれるだろうかと思つたが、全く妙案が浮かんでこない。

と言うか、今ここに来て、私は彼のことをぜんぜん知らない事に気がついたので。

確かに、たくさん話すことは話したけど、それでも大半は私が話せばかりで、彼はたいてい聞き役に回っていたのだ、彼の事を知りようがなかった。

私は、心のうちでそつとため息をつくと、決心をした。

もう、こうなれば覚悟を決めるしかない。

ここは素直に謝ろう。

それしか方法はない。

彼はすんなり許してくれた。

もともと怒っているわけではなかったんだけど。

それでも、私はそんな事関係なしに喜んだ。

まあ、せっかく好きだと言うことが分かったと言うのに、その日のうちに嫌われてしまっている事が分かってしまえば、立ち直れない事は必至だったと思う。

だから、当然と言えば当然なのかもしれない。

まあ、どちらにしろ、どうにかまた彼と今までどおりに話せることには違いない。

その後、私たちは一緒に行動した。

彼は特に誰かと約束していなかったので、簡単に了承をもらえたので助かった。

しかも、その時に彼のお母さんにも会った。

とは言っても、ただ単に、彼が今日舞台で使った衣装を渡すためだけに会っただけで、私はそれに付いて行っただけのことなんだけなんだけど。

それでも、やはり顔見知りと言うのはポイントが高いんじゃないかと思う。

やっぱりこういうところから根回しをしておかないと。

で、違うか。

まあ、少し話がずれてきたので戻すけど、文化祭は彼と一緒に行動した。

時々、それぞれ私と彼の知り合いに、からかわれもしたけど——特に彼が——とても楽しかった

本当にいい思い出になったと思う。

彼にとってもそうだったらいいとも思った。

それからしばらくの間は、堂々と言うのは何だけど、彼の情報を集めた。

とは言っても、彼は一体どういう人なのか、と言う事だ。

それが分からなくちゃどうしようもない。

けれど、それは最初から難航した。

この高校に彼と特別に親しい人なんていなかったからだ。

だからと言って、孤立しているわけでもない。

付かず離れずで付き合っていた。

だから、彼が一体どんな人なのかをこの高校で知る事はできそうにもない。

そついうわけで、仕方がないので、今度は彼と同じ中学校の出身の

人に話を聞いてみたのだけれども、その答えもあまり芳しくなかった。

もともと、この学校には彼と同じ出身の人は女子だけのため、立ち入った事を知らないため、聞き

出すことは難しかったし、その上彼女たちが知っている事は到底参考にできるようなものじゃなかった。

中学校のときの彼は、まさしく明朗快活でいわゆるお調子者だったらしい。

けれど、今の彼の姿を見て、そんな事を言われても到底信じられないし、例えそうだったとしても、何の参考にもならないからだ。

結局、彼のことを調べようとしても、無駄でしかないという結果に終わった。

それから、彼とできるだけ一緒にいて、観察するようにした。

演劇の大会があるときは、わざわざ応援にも行っただし、観客席で座っているときは、傍までいって話しかけもした。

できるだけそばで観察して見た。

してみたのだけれど、その結果もやはりあまり芳しくなかった。

何を考えているのかまったく予測が付かなかった。

いや、相手の事を立てたり、一歩引いて行動している事ぐらいは分

かるんだけど、何でそんな事をしているのかがさっぱり分からなかったのだ。

そして、だからこそ、さらに彼に惹かれてしまった。

その彼独特の神秘性に。

第十九話 返事のこないメール

私は家に帰るとすぐに、ベッドの上に倒れこんだ。

もう何かなにやら分からなくなつて、すっかり頭の中は混乱してしまっている。

何がいったいどうしてこんな事にさせたのか、分からないのだ。

理由は分かる。

私がずっと適当な事をしていたのだ、それで愛想をつかれるのは分かる。

けれど、ここまでして私のことを拒絶するわけが全く分からない。

彼は優しい。

面と向かつてそんな事を言えば、彼は即座に否定するだろうけど、私はそう思う。

なぜなら彼はめったな事では怒らない。

どんなに私が悪態をついても、笑って受け流してくれる。

人から見ればつまらないだとか、プライドなんてものが全然ないんじゃないのかとか、それは本当の優しさなんかじゃないとか思われしてしまうかもしれないけど、私はそうは思えない。

彼は分かっているのだ。

相手が感情的になっているときに、自分までも感情的になってしまうては、いつまで経っても堂々巡りにしかならないと言つ事を。

彼の方が明らかに大人なのだ。

ううん、それは少し違つかもしれない。

彼は何もそれを意識的にやっているわけじゃない。

無意識のうちにそうやっている。

だから、大人だとかそうでないとかは言い切れない。

ただ、言えるのは、彼が優しいと言つ事だけ。

だから分らない。

彼がどうしてここまでして私のことを拒絶するのか。

家に帰るまで何通もメールを送ったが、返事が返ってくる様子もないし、つながりもしない。

徹底的に拒絶している。

それが不思議でたまらない。

私知っている中で彼がそんなそぶりをしたことなんて一度もなかった。

彼はいつも彼で泰然としていて、かつ誰も気付かないぐらいひそかに包み込んでいてくれた。

そんな彼が私をここまで拒絶するなんて考えられない。

考えたくもない。

今さながら思うけど、どうやら私はもう彼なしでは生きてはいけな
いみたいだ。

別れのメールを送られただけで、私の全てを根こそぎ奪われたよう
に感じ、彼に会うことすらで

きないでいる今は、まともにたつことすらできない。

明らかに私は弱くなっている。

彼と付き合う前はしっかりと自分ひとりで立てたというのに。

第二十話 弱くなった彼女

前も言ったように、私には友達が少ない。

だから悩み事があっても、基本的に自分で解決して来た。

時々、自分だけではどうしようないときもあつたけど、その時にはお母さんに相談した。

理由は分かる。

だから、精神的にひとり立ちはできていたんだと思う。

だけど、彼と出会い彼に引かれ始めてから私は変わった。

必ず一日に一度彼のことを見ないと落ち着かなくなってしまったのだ。

その上、彼のことを知るにも、人伝いにして人に頼りつきりになってしまった。

それが、仲のいい友達だったから良かったんだけど、それでもやはり弱くなってしまったんじゃないかって思える。

そして、それは告白をするときもそうだった。

彼に告白したのは、大体一年前の事で、バレンタインデーだった。

友達と相談した結果がそれだった。

たぶん、前の私だったら、自分ひとりで計画から行動まで練っていたんだろうけど、その時の私には到底一人でやれるだけの余裕はなかった。

その上、一人で行く事ができず、途中まで付いてきてもらった。

で、告白するときはするときで、緊張にしすぎて、声はどもって俯きっぱなしの最悪だった。

たぶん自信がなかったからなんだと思う。

どうしても、彼に対しては自信がもてなかった。

こういう言い方は失礼かもしれないけど、あまりにも、普通の人とはかけ離れすぎていたから。

そして、彼はそんな告白でも受け入れてくれた。

その瞬間、私はあまりの嬉しさに彼に抱きついてしまった。

当の抱きつかれた方の彼はびっくりして、目を丸くしていた。

私知っている中で、彼が私に対して普通の反応をしたのは、そのときが初めてだった。

もちろん、すばらしい戦果を上げた私は友達にもすぐに言いに行っただ。

そのあまりの喜びように、友達は苦笑しかなかった。

そして、延々としゃべる喜びの声を聞いて呆れもした。

私にしてみれば、それぐらい嬉しかった。

けれど、彼の方はそうではなかったみたいで、私との関係をひた隠しにした。

誰にもいおうとはしなかった。

彼が懸念している事は分かった。

妬まれるんじゃないかと言う事なんだと思う。

だけど、付き合い始めたばかりの私にしてみれば、それはないんじゃないかとも思った。

だけど、結局私もその友達以外には誰にも言わなかった。

別に、彼が懸念している事が起きないためにじゃなかった。

ただ、それじゃあ付き合いえない。

そういわれるのが怖くて、彼の言うとおりにしていた。

実際に、私は回りに知られてもたいした事なんてならないと思っていた。

けれど、実際知られたときはどうだったかと言うと、私に対してはすごい質問攻めだった。

しかも、そのほとんどが何であんな男なんかと、というのが大半だった。

さらに、ひどいものなんて、なにかわけありなのか、何て聞かれもした。

私はそのとき初めて、怒りをあらわにした。

今まで、彼ぐらいにしか怒った調子で言い返すことなんてなかったのだけど、そのときだけはどうしても許せなかった。

彼のことを何も知らないくせに、知った風に言うのがどうしても腹立たしくて、我慢できなかった。

結局、誰も彼のことを堂々と悪く言うような事はなくなったけど、それでも、私の好みはどうたらこうたらと、余計な事を言われ続けた。

彼の方も、嫉妬の目ですつと見られ続けたらしい。

ただ、彼の方は私と違って、相変わらず感情的にはならず、適当に受け流していた。

そこがやはりすごいと思った。

彼はどんなときも彼のままで、自分を乱すことがない。

そんな彼がうらやましくて仕方なかったし、尊敬もした。

そして、彼のことになると、すぐに目の色が変わってしまう自分が少し情けなくなってしまうていた。

特に一番強くそう思ったのが、彼と大喧嘩をしたときだ。

うつん、あれはたぶんけんかとは言えないと思う。

私が一方的に怒っていたただけだったんだから。

そう、たいてい怒るのは私で、それを彼が受け流すと言っのが常日頃だった。

第二十一話 嫉妬からの大喧嘩

付き合っているということがばれてから、私と彼は可能な限り一緒にいるようにした。

登下校の時は待ち合わせをして、お昼を食べるときは、はれているときは二人で外で食べて、駄目なときは屋上へとつながるドアの前でマツトをしいて食べた。

極力彼と一緒にしようとしていたのだけど、それでもやっぱりいつも一緒にいられるわけもなく、彼のことを遠めでしか見られないときがある。

その日は、図書の当番の日だったんだけど、先生も暇だったんで、三人で仕事をしていた。

そこまでは良かったと思う。

私たちは楽しく話していた。

けれど、私もそろそろ新しく読む本が欲しくて、人がいない頃合を見計らって選びに行った時に、見てしまった。

彼が人懐っこい笑みを浮かべているところを。

別に彼が私に対してもそんな顔を見せてくれていたら、たいして気にしなかったと思う。

楽しそうに笑っているぐらいでどうこう言うのは、おかしいと思う。

だけど、私と彼が付き合い始めてから、彼は一度も私にそんな顔を見せた事はない。

あんなに楽しそうに笑ったりした事なんて一度もない。

それなのに、先生には見せている。

それがどうしても悔しかった。

けれど、それでも私は我慢した。

彼との付き合いは明らかに先生のほうが私に比べて長い。

それに、既婚教師と生徒では、嫉妬の対象になんてなりもしない。

そう思い込ませた。

だけど、その後もう一度見た光景で、もう我慢しきれなくなった。

彼は当番の日はそれが終わってから、部活に行き、私はそれが終わるまで図書室の傍にある、準備室で待っている。

以前、彼と先生と三人で仕事をしたのもこの部屋だった。

その部屋で、待たせてもらっている。

もちろん、何か仕事がある場合は手伝っていた。

彼に比べるとまだまだなのかもしれないけど、それでも戦力には違

いないと思う。

それで、その部屋で待つて、だいたい終わった頃合にいつも彼を待たために校門まで行くのだけど、その日は少しだけ状況が違った。

確かに彼は待ち合わせの場所に來た。

ただし一人じゃなかった。

同じ部活の子なのだろうけど、仲良さそうに話していた。

しかも、さっきと同じく、人懐っこい笑みを浮かべて、たまに相手の娘の頭を押さえたりしている。

はたから見れば、恋人同士に見えるぐらいだった。

その後、私と目があうと、その娘と別れて私のところに来て

「ごめん、待たせたね」

そういうのだけど、先ほどとテンションは明らかに違う。

明らかに私に対する態度のほうで、他人行儀に感じる。

もちろん、同じ部活なんだから、私より付き合いが長い事ぐらい、分かっている。

だけど、それでも悔しくて仕方がなかった。

彼は私に対しては、あんな顔をしない。

それがまるで私のことを信用していないみたいで、悔しい。

私は、彼のことがすごく好きだ。

自分でも、おかしくなったんじゃないかと思えるぐらい、彼のこと
が好きでたまらない。

だから、彼にはもっと自然でいて欲しいし、あんな笑顔を私にもし
て欲しい。

その想いが、その時ふつふつと沸き起こってきた。

けれど、彼は相変わらず一步引いた対応で、笑うときも淡い笑みし
か見せない。

それがどうしても悔しくて、それでたぶんすごく不機嫌な顔になっ
てしまったんだと思う。

「何かあったの？」

彼がそうやって尋ねてきた。

その顔が私のことを心配している事がよく分かった。

「なんでもない」

けれど、そんなことはその時の私には関係なかった。

その時の私には、彼が何を言ったところで、気が静まる事はなく、

ただただ余計にいらさせるだけだった。

けれど、それでも彼は私に尋ねた。

本当に心配だったんだと思う。

その目が心配そうに輝いていたのは、今の私には分かる。

「なんでもないって言ってるでしょう」

だけど、その時の私にはそれに気付くだけの余裕はなかった。

ただただ悪態をつくだけで、拳句の果てには

「まあ、いくらなんでも、怒鳴らなくても……」

彼のそういう言葉に対して

「大体、しつこいのがいけないのよ」

「な……」

暴言を吐いてしまった。

彼が思わず黙り込んでしまったのが分かった。

彼の瞳に感情の変化が写っているのも分かった。

けれどそれでも彼は感情的には決してならず

「でも、それは君が心配だから……」

「本当に？」

必死になって私のことをなだめようとしていた。

けれど、それが逆に私を苛付かせた。

そのまるで子供をあやすかのような態度に。

だから、彼が何か言ったびに噛み付き返した。

もうそれは徹底的に。

最終的に、彼は諦めたのか、途中で別れてしまった。

そして一人になってようやく分かった。

彼の態度が示すように私の行動は子供が駄々こねている時のものと変わらないことに。

それで、家に帰ってしばらく悶々とした拳句謝る事にした。

いろいろと不安で、決断してから行動に移すのには結構時間が掛かったけど、彼はすんなりと許してくれた。

あれだけのことをしたのに、本当にすんなりと許してくれた。

逆にそれが怖いくらいだった。

それでも、私は彼が許してくれたんだと信じた。

彼が優しいと言う事だけは、もう既に分かっていた事だから。

その後、彼にいろいろ聞かれた。

どうして、あんなに機嫌が悪かったのか、と。

彼からしてみれば当然の疑問なのかもしれない。

いきなりわけも分からず八つ当たりされたのだ、そう思っても不思議じゃない。

けれど、それを素直に言うのもためられる。

だからといって、答えないのもまたなんだか悪い気がする。

結局、嫉妬していたと答えたのだけど、彼は納得していなかったみたいだった。

どうやら、何で私が嫉妬する必要なんてあるのかと不思議に思ったみたいで、しきりにそんな感じのメールを送っている。

たぶん分かっていないんだと思う。

私が彼に対してはどうしても自信がもてないでいることに。

彼に置いて行かれるんじゃないかと言う不安を常に抱えていると言っことに。

そして、今の私は彼なしでは到底生きてはいけないと。

そう、私はもうなれてしまった。

彼のそつと包み込んでくれるような優しさに。

だからこそ、私は弱くなってしまったんだと思う。

そんな優しさをしじや生きていけないから。

自分ひとりじゃ立てないから。

そして、だからこそ今もそうなんだと思う。

今の私の存在はとても希薄だと思う。

自分自身でさえ、自分の存在を感知できないほどなんだから。

第二十二話 思い出の場所と見られたくないもの

昼も過ぎ日が暮れ始めたらしく、外は赤く染まり始めた。

このまま部屋にいたところで、たぶん余計気がめいるだけだと思っ
ので、私は思い切って、散歩でもしようと思い、外へとでる。

依然として、ダメージは残っているけど、それでも前を向いてしっ
かりと歩けるぐらいまでは回復した。

家を出ると早速紅く染まっている空を見ながら歩き始める。行き先
は別に決めていない。ただ気が向くまま、だ。

しばらく歩くと公園があった。

たぶん、知らず知らずのうちにこっちへと足が向いていたんだと思
う。

ここにも、私と彼の思い出がある。

と言うよりも、この街全体に数多くの思い出がある。

彼は、あまり外に出たがらなかった。

私がセッティングしたデートなら時々付き合ってくれたけど、それ
以外はほとんど家でいたらしい。

彼の話では、そちらの方が落ち着くらしい。

友達といろいろと遊びに行くのが好きな私には、少し理解に苦しんだけど、今の私にならよく分かる。

たぶん、人と会うのがいやなんだと思う。

そんなふうな事を思わせるようなことを何度も言っていた。

まあ、それはいいとして、この公園には何度か来たことがある。

学校の帰りに時間があるときなんかは、この公園のベンチに座っていろいろと話したり、デートとしてきたりもした。

彼にとってもたぶんここはお気に入りなんじゃないかと思う。

そうであって欲しいと思う。

私にとっては、大切な思い出の場所のひとつだから。

「ねえ、どうしてそんなに嫌がるの？」

久しぶりに街に遊びに行こうと提案したのに、彼が頑なに拒否したので、仕方なくすぐ傍にある公園に遊びに来たときの事だ。

どうしても嫌がる彼に少々むつきていた。

「ただ、ちょっと街をぶらつくこうって言うてるだけなんだよ。」

それは確かな事だった。

別に買い物がしたいわけじゃない。

彼と一緒にいろんなところに行つて、いろんなものが見たい。

ただそれだけのこと。

なのに、彼はそれでもいやだ、と言つ。

私としてはかなり譲歩しているつもりなんだけど、彼はそれでも街には出たくないという。

それはもう私からしてみればわがままにしか思えなかった。

「それとも、もしかして私と出かけるのはいや？」

だから、自分でも意地が悪いと思うけど、そんな事まで言ってみる。さすがにそこまで言われると、少々彼も焦ってしまい、動揺の色をその瞳に浮かべる。

ここ最近になつて、ようやく、本当にようやく、彼の心の変化を見ることができるようになった。

と、それは良いとして、彼もようやく答えてくれた。

「そんなわけじゃないんだけど。俺って、なんていうか、人アレルギーって言うのかな、たくさん人がいるところにいると気分が悪く

なるんだ。だから、ああいう人がいっぱいいる街はあまり好きになれないんだ」

彼の言いたいことが分かるには分かる。

確かに、そういう人がいると言うことぐらいなら私も聞いたことがある。

友達の彼氏がそういう人でなかなか遊びに連れて行ってくれなくて困るとかそういう感じのことを言っていた。

だけど、だからと言ってそうやって街を敬遠ばかりされても、困る。

それでは遊びに行くところが決まってしまうし、何よりつまらない。

たまに、人気がないところに行くのならかまわない。

心の休憩も必要だと思う。

だけど、毎回そうだったら、すぐに飽きてしまう。

時々行くからこそ、ああいったところは楽しいんだと思う。

だから、なんとしても今日は街に行きたい。

私は一生懸命に彼に頼んだ。

こういう時に女の特権の甘えることができればもう少し楽になるんだと思うけど、そういうのは彼には効かない。

もうまったくというぐらい効かない。

と言つか、逆に嫌がられる可能性のほうが大きいし、嫌われる事だってあるかもしれない。

だから、普通に頼むしかなかった。

もう押して押して押し捲った。

最終的には彼の方が折れてくれて、街に遊びに行っただけで、そこで後悔した。

普段の彼はあまり感情の変化を見せたりはしないし、口数も少ない。

それは私の前でも同じで、あまりそういったものは見せない。

だけど、それでも彼はある程度の反応はしてくれる。

なんだけど、街に出てしばらくして彼はほとんど反応をしてくれなくなった。

言葉は返してくれるんだけど、いつも以上にそっけない態度だった。

私としては、せっかくこうしてデートとして街まで出でてるんだから、もっとこう甘い雰囲気でいたいのに、彼はそんな事を意に介してない様子で、態度はそっけない。

手を申し訳程度に握っているだけ、はつきり言って満足できない。

その旨を伝えようと思い、近くの喫茶店で休みがてら入ってみたん

だけど、そこでようやく気がついた。

中に入って、適当に注文を済ませて、彼の方を見てみたら、そつとため息をついていたのだ。

今まで彼は私と一緒にいるときにそんな事をしたことは一度もなかった。

確かに、見ていて自分まで明るくなってしまふような人懐っこい笑みを見せてもらった事もなかったんだけど、それでもため息をつかれることなんてなかった。

それに良く見てみれば、どうやら結構疲れているみたいで、ポーカ―フェイスも少々崩れてきている。

それが自然とそうなっていたのなら、私としては大万々歳なんだけど、明らかにそれとは違う。

もう疲れていることが明白だった。

それでようやく分かった。

彼がどうしてあんなに頑なに街に行くのを嫌がったのか。

たぶん、私と一緒にいるときにそんな事をしたくなかったんだと思う。

自意識過剰なんじゃないのかと思われてしまふけど、彼の場合だとたぶんそれであっているんだと思う。

彼としばらく一緒にいれば分かる。

彼は人に自分がいやな顔をしているのを見られるのを極端に嫌がる。特に怒った顔や悲しい顔なんてものは絶対に見せたがらない。

一度、彼が滅茶苦茶な事を言われた事があった。

もちろん、近くにいたから聞いたんだけど、それを聞いた瞬間私は頭に血が上ってしまった。

もし、相手が男子じゃなかったら、もう堂々と噛み付いていたと思う。

さすがに、男子相手に噛み付く勇氣はなかった。

それで、彼の顔が気になってみてみたんだけど、彼は表向きは何でもなさそうな顔をしていた。

他の人に聞いても、そうだった。

だけど、私には分かった。

彼がものすごく怒っていると言っているのに。

目が違ったのだ。

明らかに目の色が違った。

もう爛々に光っていた。

それでも彼は文句の一つも言い返さなかった。

ただ皮肉っぽい笑みを浮かべて、その表情どおりの言葉を使った程度だった。

けれど、私にしてみれば、もうびっくりした事だった。

どこかで彼は絶対に怒らないと思っていたのかもしれない。

その後、心配で彼の傍に言ってみただけど、もうそのときには普段どおりだった。

ただ静かな彼だった。

そして、瞳も穏やかだった。

その時に感じた。

彼は人に自分の負の感情に気取られたくないということに。

その事がその時の私の頭にはすっかり抜け落ちていた。

自分のことばかりに夢中で彼のことを考えている余裕なんてなかった。

しばらくの間、その喫茶店で休んだ後、すぐにまた最初の公園へと急いで戻った。

理由が分かった以上、もうそれ以上街に入られないと思ったからだ。

彼ももうこれ以上気張らなくてすむと思って安心したんだと思う、普段は見せないやわらかい表情をした。

「ごめんなさい」

公園に付くと同時に私は彼に謝った。

「無理させて」

一体何がとも言うような顔をして私を見たので、すぐに理由を答えた。

やっぱり、こういうことはきちんとしておきたかった。

彼は優しいから、たぶん私が謝らなくても、怒ったりはしないと思う。

ただ、さらりと受け流されるだけの事だと思っただけ、私はその優しさに甘えたくなかった。

と言うよりも、彼の優しさに甘えて、人として大切なものを失いたくなかった。

「ごめんなさい」

「別に、いいよ。気にしないで」

そして、もう一度謝る。

彼が許すと言う言葉を言うまでは、何度でも謝るつもりだったんだけど、彼はやはりすんなりと許してくれた。

なんとなく、その優しさまた私は甘えているんじゃないのかとも思ってしまった。

やはりと思っている時点でそうじゃないのか、と。

けれど、そんなことはすぐに頭の隅へと追いやられる。

彼のやわらかい笑みを見ると、私の思考は全て、麻痺してしまう。

ある種麻薬のようなものだ。

たぶんそのときだと思う。

私が彼なしではもうまともに生きていけないと思ったのは。

第二十三話 私と彼と彼の妹と……

公園に入ると私たちがいつも座るベンチに腰掛ける。

一番見晴らしがいいところだ。

だからなんだと思うけど、この公園のほとんどを見渡す事ができる。

実際に、今公園に走って入ってきている人だって見える。

年のころはたぶん、大体私と同年代だと思う。

と言うか、私が通っている高校と同じ制服なので、たぶん間違いはないはず。

その彼女は、誰か——もしくは何か——を探しているみたいで、しきりに首を振っている。

その様子はかなり必死のようで、周りのことなんか目に入ってはいないみたいだ。

そして、そんな彼女と目があって、私は思わずはっとした。

向こうも気付いたみたいでさっき以上に急いで走ってくる。

彼女とは数回会ったことがあった。

彼の家に遊びに行ったときのこと。

そう、彼女は彼の妹で、私たちの通う高校の一年生でもある。

どうしたのだろう。

私は思わずそう思った。

彼の話では彼女は非常にマイペースであり急いだり、焦ったりする事はないそうだ。

しかも、それは、マイペースというより、自己中心的なものに近いみたいで、彼もいろいろと苦労しているとも言っていた。

そんな彼女が、ものすごく焦っている。

それが不思議でたまらない。

「どうし……」

「お兄ちゃん知りませんか!!」

彼女が目の前に来た瞬間、思わずそう尋ねようとしたのだが、それはあっさり彼女の言葉で覆いかぶされた。

けれど、そんな事より気になることがあった。

と言うよりも、わけの分からない、といった方が正しいかもしれない。

それが思わず表情に出たのだろう、目の前にいる彼女は、深呼吸をして、一生懸命になって、落ち着こうとしている。

「お兄ちゃんが、いなくなっただんです」

けれど、どうやらそれはうまくいっていないみたいで、やはりそわそわしている。

兄妹なのに、ものすごく違う。

たぶん、彼なら、どんなに焦っていても、表情に出しはしないと思う。

と、そんな悠長なことを考えて、はたと気付く。

「いなくなっただ？」

「はい、そうなんです。お母さんがパートから帰ってきたら、玄関に鍵が掛かっていたらいいんです。自転車もなかったみたいで、そのときはどこかに遊びに行ったんだろうと思ったみたいなんですけど、キッチンにいったら、朝なかった紙が机の上にあって、それにはしばらくどこかに行くなんてことが書かれていたんです。しかも、電話を掛けても全くつながらないし、メールを送ってみても返事も全然返ってこなくて」

話しているうちによほど感情が高ぶったみたいで、支離滅裂な言い方になっていたけど、彼女が言った事は大体こんな事だと思う。

「もう、お兄ちゃんがなくなっってから、お母さんは怒ったり騒いだして私たちに当り散らして大変だし、弟は泣きだすし、ほんとにもう……」

もうたぶん限界なんだと思う。

独り言のように呟く。

その姿は今にも泣き出しそうだ。

そういえば、前彼が言っていたことを思い出す。

なんとなく、失礼だとも思ったんだけど、そんな妹の事が好きなのか、と聞いたことがあった。

なんとなく、もし私が彼の立場なら好きにはなれそうにはなかったからだ。

「大切だよ」

けれど、彼はいつもどおりにやわらかい笑みを浮かべるとそういった。

「確かに気が強くて、自分勝手に、たまにやつあたりしてくるけど、でもあいつはものすごくもろいから。一見するとすごく強いように見えるけど、ものすごくもろい。たった一つのこと、簡単にも崩れる。それが分かるからね、護ってやらなくちゃ、て思うんだ。それに、たまにかわいいところもあるしね。まあ、早くそれに気付ける恋人ができてくれればいいんだけど、簡単にはできそうにもないからね。しばらくは、俺がその代わり。普段、家には父さんがいないから、俺がそうするしかないでしょ」

なんだか、そのときほんの少し胸がちくりと痛んだ。

たぶん、嫉妬だったと思う。

彼は本当に優しくそんな顔で話していた。

それがたぶん、たまらなく悔しかったんだと思う。

けれど、今は彼の言っていたことがよく分かった。

たぶん、彼からしてみれば、彼女は幼いんだと思う。

年はほとんど変わっていないみたいだけど、内側の年齢がかなり開いているように見える。

それに、今の彼女を見ると、本当に痛々しくて思わず手を差し出したくなってしまう。

だから、たぶんそんな気持ちになったんだと思う。

「あの、それで、お兄ちゃんの事知りませんか？」

と、どうやら自分の世界に行っていたみたいで、彼女の声でようやくわれを取り戻す。

けれど……

「ごめんなさい、分からないの」

私は何も知らない。

彼からは何も言われてない。

ただ、別れようと言われただけ。

そして、いくら質問してもその答えも返ってこない。

彼は私と接触する事を拒否しているから。

彼女は私がそう言うのと、ものすごく落ち込んだようで、肩を落とす。

「大丈夫？」

その姿があまりにも弱々しくて、言わなくても分かっているのに、思わずそう訊ねていた。

「大丈夫」

けれど、彼女は笑ってそう言う。

その笑顔は作っているものだとすぐに分かる。

それが分かっているんだと思う。

すぐに、辛そうな顔をする

「お兄ちゃんの真似はできませんね」

泣き出しそうな声で言った。

「お母さんなんかが言うとお兄ちゃんはものすごく弱いつて言うんですよ。すぐに弱音ばかりはいたり、諦めたりするって。でも、

私からしてみれば、そうは思えないんですよ。確かにお兄ちゃんは、表面だけ見たら、精神的には弱そうだし、諦めも早そうに見えるんですけど、本当は違うんです。周りが本当に辛そうなときは、自分が辛くて辛くてたまらなくても、優しい笑顔をして周りのことを気に掛けるんです。自分が精神的に追いやられていても、自分のことより周りを、そんな事ができるんです。それに、諦めの速さだって、本当に大事な事は絶対に諦めたりしない。ただ、優先順位の中で切り捨てて行ってるだけみたいだし。本当のお兄ちゃんは、ものすごく精神的に強い。実際、出て行ったのが私で、残っているのがお兄ちゃんだったら、たぶんこんな事にはならないと思うんです。今、お母さんは、いろんなことがあって頭が混乱して、ものすごく慌てているけど、お兄ちゃんならお母さんをすぐに冷静にしてくれるし、弟を泣き止ませられるし、きっと今みたいな滅茶苦茶な状態にはさせないと思うんです。私みたいに慌てる事はないと思うんです。」

彼女は泣きそうな声でそう言うと、俯いてしまう。

私は何も言えなかった。

彼女の言っていることはたぶん間違いないことだから。

彼は、本当の意味で強い。

精神的な強さを持っている。

彼はたぶんこういうときだからこそ冷静さを失わないように心がけ、まず体制を整える。

そして、それができてから、初めて行動をする。

まず間違いなく行き当たりばったりの計画を立てたりはしない。

だから、たぶん彼女の言うとおりなんじゃないかと思う。

「ねえ、携帯見せてくれない？」

「え？いいですけど」

彼女はいきなりのことにきょとんとしたけど、コートのポケットから出すと、私に渡してくれる。

私はそれを開くと、彼女の個人情報を開き、それを見てからワン切りとメールを送り

「これ、私の携帯の番号とアドレス。何かあったり、辛くなったりしたら、連絡して」

彼女に笑いかけながらさういう。

彼女の気持ちが痛いほど分かった。

私も時々彼を見てそう思ってしまうときがあった。

だから、彼女の力になりたかった。

ううん、たぶんそれだけじゃないと思う。

彼女を通して、彼の情報を手に入れるとができるという理由もあると思う。

「えっと、その、ありがとございます」

そんな心内の考えなんか余裕のない彼女には判らないんだろう、お辞儀をしてお礼を言っと

「それじゃあ、失礼します」

彼を探すために急いで私のもとから去った。

第二十四話 揺らぐ思い

それからしばらくの間は、公園にいたが、日が暮れ始めたので、家に帰った。

だからといって、家に帰ってもすることはほとんどない。

その後も、ぼんやりと過ごし、晩御飯の時間になると、親子三人でそれを食べて、すぐに自分の部屋に戻る。

その姿を見て両親は心配していたので悪いと思うけど、何とも答えようがなかった。

まさか、ふられてしまったなんて言えるはずがない。

たぶん、そんな事をいえば、お母さんに怒られると思う。

一体、あなたは何をしたんだ、と。

お母さんは、彼のことをものすごく気に入っている。

彼がお母さんの前で今時珍しいぐらい礼儀正しく、柔らかに対応しているからと言うのもあるだろうけど、たぶん彼の人間性を好んでいるんだと思う。

さすがだてに私たちより長く生きていないと言うだけはあって、あつという間に彼の本性というか、彼の態度の理由に気がついた。

たぶん、そんな健気で誠実なところを気に入ってくれたんだと思う。

それに彼もお母さんのことを気に入っているみたいで、あつという間に慣れてしまっている。

それこそ、私にはなかなかしてくれなかった、あの柔らかな笑みをお母さんにはあつという間にしたのだ。

たぶん、気に入ってもらおうという理由もあつたんだろうけど、彼だつてお母さんがその事に気がついてくるぐらい分かっていたんだと思う。

それでも、そんな事をしていたんだから、すぐに慣れてしまったんだと思う。

それがわかったときは思わず、お母さんにまで嫉妬してしまった。

母親相手に、と思うかもしれないけど、彼相手になるとそんな事がいえなくなる。

そんなことを思ってしまうほど、彼はなかなか私になれてくれなかったのだ。

そして、その結果として、彼は私に別れを言った。

さらりと、メールで。

直接会ってから言つて欲しかった。

そうすれば、まだ話し合うだけのよちはあつたと思う。

なのに、彼はそれをまったく残してくれなかった。

彼らしくないほど、容赦なくだった。

もう、無理なのだろうか、やり直す事は。

思わずそんな事が頭に浮かびかけて、慌てて頭を振る。

まだ間に合うはずだと思う。

誠意を込めて言えば、彼ならきつと分かってくれる。

だから、そんな事を思っではいけないんだ。

そう思い直して、自分に活を入れたちょうどそのとき、携帯がなり始めた。

それを聞いた私は思わず携帯に飛びついた。

理由は、簡単だった。

その着信音が彼専用だから。

彼からのメールが来たという事を言っているのと同じだから。

私は手に取った携帯を開くと、今着たばかりのメールを開く。

そこに打たれていたのは

『全て悪いのは俺。君が悪いわけではない』

全くわけが分からなかった。

たぶん、私が送ったメールを見てないんだと思う。

だから、こんな事を送ってきたんだろう。

そして、彼には分かっていたんだと思う。

だからこそ、こんなメールを送ってきたんだ。

きっと、私が一人で思い悩んでしまっただろうと。

私は、すぐにメールを閉じて、リダイヤルする。

もしかすると、と思つてのことだったんだけど、やはりつながらなかった。

たぶん、彼はメールを送ると同時に電源を切ったんだと思う。

つまり、何があつても私と連絡を取りたくないということは同じ。

そして、彼女の、彼の妹の手助けすらできなかったということになる。

第二十五話 夏の思い出

彼が私をデートに誘う場所は大体散歩に近いものばかりだった。

人が大勢いるところへ誘った事なんて、夏に海に誘ったときと誕生日、クリスマスときぐらいだった。

たぶん、そのときだって義務感みたいなものがあつたんじゃないかと思う。

夏なんだから、海に連れて行ってやらなくちゃいけない、とか。

せつかくの誕生日とかクリスマスなんだから、街へと出ているいろとエスコートしてはいけない、と。

だから、その日は普段以上に優しくかった。

いつも以上にふんわりとした笑みを浮かべ、ふんわりとした口調だった。

だけど、その時の私はそれに気がつかなかった。

海に連れて行ってくれたこと、クリスマスを一日中一緒に過ごせる事に有頂天で、自分のことで一杯一杯だったし、それから後も別段気にしなかった。

たぶん、こうやって離れているからこそ、気付けたんだと思う。

海に行った夏。

彼自身もいろいろ選んだんだと思う、あまり人が来ないような場所をしていた。

長い間いるんだから、あまり自分に負担が掛からないような場所を選んだんだと思う。

私が思う中で、彼が自分に自分を妥協した日だと思う。

だけど、そんな事を知らない私は、彼と一緒に遊びまわった。

遠くまで泳ぎに言ったり、砂浜で遊んでみたりとても楽しかった。

まあ、残念な事もあったのはあったんだけど。

その日、私はほんの少しだけ勝負した。

ビキニを着てみたのだ。

今まで、私は友達と海に行くときはワンピースだった。

自分でも、男の人の視線が自分に集まってきたことぐらい自覚があったから、ビキニなんてものをきる気なんて全く起きなかった。

だけど、そのときはそんな悠長な事を言っている暇なんてなかった。

そのときはもう既に付き合い始めてから半年がたっていたんだけど、彼は全く私に手を出そうと言うそぶりすら見せない。

それこそ、まだキスすらされた事もない。

彼のことだから、たぶん私のことを大切にしてくれているんだと思う。

だけど、友達にまだなのか、て聞かれる度に恥ずかしくて仕方ないし、女としての自信もどんどんなくなっていく。

だから、この夏は勝負しようと思った。

さすがに一線を越えようとまでは思わないけど——さすがにいきなりそれは恥ずかしくて無理——せめてキスぐらいは、と思ってた。

だけど、彼はショックを受けるほどいつもどおりの彼。

今日きている水着は友達と相談して選んだもの。

友達もこれならといていた。

実際に、周りから男の人の視線を受けている事も分かる。

分かるんだけど、彼は全く気にしてくれてなんかなかった。

全然ぐらついている様子も見受けられない。

それほど自分の体に魅力はないのだろうか、思わず思ってしまう。

確かに、胸はそんなに大きくない。

だけど、それでも平均並ぐらいはあると思うし、腰だって綺麗にくびれて、足だってすらりと伸びている。

肌だって、白くてすべすべで綺麗だという自信だってある。

友達だって、あんたの体ならいちころよ、と言う太鼓判を押してくれた。

だと言うのに、彼は全く気にしてくれない。

それがすごく傷ついた。

だからだと思う。

帰りのとき少し機嫌が悪かったのは。

そういうのに敏感な彼は、すぐに気がついたんだけど、理由のほう
は分からないみたいだった。

当然だと思う。

だって、キスしてくれないから、拗ねているんだ。

そんな事をしようと考えていない彼が判るはずがない。

だけど、それが逆に本当に寂しかった。

なんだか、一人で恋愛しているみたいで、悲しかった。

それこそ、恥ずかしい話、涙がこぼれだしそうだった。

だけど、実際にそうならなかったのは、彼がそっと抱きしめてくれ

たから。

たぶん、私がそんな顔をしていたからだと思う。

だから、寂しさとか悲しみとかを拭いたくて、抱きしめてくれたんだと思う。

だけど、それでもそれが嬉しくて、私もぎゅっと抱きしめ返していた。

運がいいことに、周りには誰もいない。

私と彼の二人きり。

ここしかないと思った。

今この甘い雰囲気はたぶん初めてだと思う。

それまで全く感じさせなかった彼が、今日初めてそれを出してくれた。

女は度胸。

彼がそんな事を考える事ができないなら、私から行くしかない。

少しはずかしいけど、そんな事を言っていたら、全く進まない。

思い切って、

「ねえ、キスして」

彼の胸に頭をこすり付けるようにしてそういった。

あまりのはずかしさに声がかすれてしまったけど、たぶん聞えてい
ると思う。

彼の心臓の鼓動がほんの少し早くなったように感じられた。

だから、聞えたんだと思う。

だけど、彼はなかなか動こうとはしなかった。

もしかしていやなんじゃないだろうかと思って、不安になってしま
う。

けど、私はしたいし、普通誰でも本当に好きな人とならそうしたい
と思うはず。

だけど、彼は全く動かない。

どうしてなのかは分からない。

私は勇気を出して恐る恐る彼の顔を下から見上げてみた。

そしてすぐに見えた。

始めてみるぐらい耳まで真っ赤にしている彼の顔を。

びっくりした。

彼はどんなときでも表情を崩さない。

そうだとばかり思っていた。

だけど、今日の前にいる彼の顔は私も驚くくらい真っ赤だ。

彼もすぐに私が彼の顔を覗き込んでいる事が分かったんだと思う。

ぱっと向こうを見る。

けれど、もう遅い。

彼の恥ずかしげな顔をしっかりと見てしまった。

もう、脳内にしっかりとインプットされている。

「ねえ、キスして」

相手が動揺している事が分ければ、逆に私のほうは余裕が出てくる。

もう一度、彼の耳元でそう言う。

その際、彼の体を抱きしめる力を強くする。

友達が教えてくれたテクニクだ。

こういうことをすれば、その気になる、とか何とか言っていた。

案の定、彼にもそれが聞いたらしく、赤かった顔がさらに赤くなる。

嬉しかった。

別に彼は私の体に興味がないとか、魅力がないとかそう思っていない。しっかりと意識してくれていた。

それがすぐに分かった。

今までならたぶん、これで満足したと思う。

でも今日は違う。

もう一歩先へと進みたい。

もっともっと、彼を近くに感じていたい。

「だめ、かな」

最後の殺し文句だったと思う。

すぐに彼が落ち着きを取り戻そうとして、深呼吸をしているのが分かった。

今まで、真っ赤だった顔が今までどおりの柔らかい表情に戻る。

そして、逆に私の顔はたぶん真っ赤になっていると思う。

せっかく初めて私が優位な立場にいたのに、あっという間に形勢逆転。

やはり、私では彼には勝てないみたい。

「えっと、じゃあ、目をつぶって」

そんな事を内心で考えていると、優しくそう呟く。

もう完全に普段の彼である。

それがたまらなく悔しかったけど、ゆっくりと目を瞑る。

途端に、心臓の鼓動が早くなっている事が自分でも分かった。

ときどきする。

けど、このときどきはどこか心地よかった。

なんとなく、彼が動いているのが分かった。

たぶん、もう少し。

そう思った次のタイミングで私の唇に柔らかくて暖かい何かが当たった。

たぶん、彼の唇だと思う。

そう思うと嬉しくて、なぜか目を開けた。

理由は分からない。

分からないけど、どうしてか開けていた。

その瞬間彼と目があう。

けれど、そんな事よりもっと驚く事があった。

私が目をあけている時は、普段の柔らかい顔だったのに、今の彼の顔はその前と同じ真っ赤だった。

彼が慌てだした。

たぶん、間近でそんな顔を見られたのがはずかしいんだと思う。

ぱっと、体を離すと、両手で顔を覆って隠す。

それほどまではずかしかったのだろうか。

思わず、のんきにそんな事を考えてしまう。

けれど、そんな彼をたまらなくかわいく思えた。

なんとなく男の子である彼にそんな事を思うのは失礼なのかもしれないけど、そう思えた。

そんなかわいい彼を見ながら、さっきまで彼の唇が触れていた部分を指でなぞってみる。

触れた瞬間、何ともいえない充足感を感じた。

そして、離れた瞬間、なんとなく残念な気がした。

たぶんもつとそれを感じていたかったんだと思う。

これはいけないと思った。

彼は麻薬のような人とは思った。

彼なしじゃ生きていけそうにもないとも思えるときが多々あった。

けど、さつきキスしたとき、それはさらに強くなってしまった。

もっとしたい、もっとそれを感じていたい。

そう思えてたまらなかった。

改めて、恋の怖さを知った。

まさか、自分がここまで堕ちてしまうとは思わなかった。

たったキスだけで。

でも、それも彼となら悪くないと思った。

彼と一緒になら、それでもいいかと思った。

そのときは翌日、友達にどうなったのかと聞かれたけど、適当にはぐらかした。

誰にも言いたくなかった。

あの彼のかわいい姿を誰にも教えたくはなかった。

まあ、キスぐらいしたのかどうかぐらいは聞きだされたけど。

第二十六話 繋がる電話、繋がらない思い

いつの間にか眠ってしまったみたいだ。

部屋の壁に掛かっている時計を見ると、六時を大きく回っていて、既に半近くなっている。

こういうときは眠れないものだと思っていたけど、不思議と眠れる事ができたみたいだ。

でも、それがなんだか心苦しい。

まるで、それがこのことを大して気にとめてない、それこそどうでもいいことに思っている。

そんなふうに思えてくるから。

私はおもむろにすぐ傍においてある携帯を手取る。

それを払拭したかったから。

それに、たぶん、つながらないと思う。

絶対に電源を切っていると思う。

だけど、もしかすると、そんな思いも浮かんでくる。

それと同時に、ものすごく気にかけている。

そう思いたくて。

それに、もしかするとつながるかもしれない。

もしかしすると、電話に出てくれるかもしれない。

そんな想いも浮かんでくる。

私は恐る恐る携帯を開くと、リダイヤルを押す。

つながらないかもしれない。

そんな考えが頭の隅から浮かんできて、どんどん私の中で膨らんでいく。

思わず携帯を閉じてしまいたくなる。

けれど、私はそんな弱い自分を叱咤すると、思い切ってリダイヤルする。

ワンコール目。

何の反応もない。

ツーコール目。

まだ何の反応もない。

スリーコール目。

依然として、反応はない。

これはもしかすると、つながっているんじゃないか。

そう思った。

けれど、いくら鳴らし続けても、つながらない。

ただコール音が鳴り響くだけ。

たぶん電源はついているんだと思う。

ただ、彼が出ないだけ。

でも、流し続ければきっと彼は出てくれる。

絶対に。

そう思っただけ流し続けていると、突然ぶちっと切れた。

わけも分からずもう一度掛けなおす。

けれど、無情にも今度は電源が切られているといわれるアナウンスが流れた。

思わず私は泣き出してしまった。

彼と付き合ってから、今まで一度もそんなことはなかった。

彼は絶対、私が泣くようなことをしなかった。

優しく包み込んでくれた。

だけど、今の彼はそんな気など、もうないのだろうか、あっさりと私のことを切り捨ててしまう。

それが悲しかった。

もう、彼は私には優しくしてくれないんじゃないかと思えた。

第二十七話 彼と一緒に私の誕生日

私が彼の誕生日を知ったのは、彼の誕生日が過ぎてからだった。

気になったから、友人伝いで聞いてみたのだけど、その瞬間ため息をついてしまった。

彼の誕生日は2月7日。

私が告白する一週間も前の事だった。

おかげで、誕生日プレゼントなんかももう渡せるはずもなく、自分の運のなさを少し嘆きもした。

そんなふうに時間が過ぎて、私の誕生日がきた。

お母さんは、今日はパーティをするから早めに帰ってくるように言われながら家を出ると、彼との待ち合わせ場所へと向かう。

私は彼に自分の誕生日を教えなかった。

なんだか、そうすることでプレゼンをねだっているようにしか思えなかったからなんだけど、今思うと教えておけばよかったんじゃないかと思う。

今日は、久しぶりに彼の誘いで街へ出かける。

今まで、彼が街へと遊びに誘う事ほとんどなかった。

ちょっと街に出る用事があるときぐらいだった。

そのときも、買い物の手伝い。

別に私はそれはそれで楽しかったんだけど、そういうときは家族のプレゼントを選ぶ手伝いだった。

彼の家は女系家族だ。

だから、必然的にプレゼントは女物になるため、同じ女である私に相談してくるんだけど、私については何にも聞いてくれなかったのだ。

ちらりと私の誕生日のことを匂わせるような事を言うんだけど、まるであたかも狙っているかのようにさらりと流してしまう。

おかげでたぶんいまだに彼は、今日が私の誕生日だという事は知らないと思う。

だけど、今更いうのもやはり気が引けるし、だからといって、せつかくの日を彼に祝ってもらえないとなると淋しい。

そういうことが頭の中で堂々巡りして、どうにもならない。

果たして、どうしたらいいのだろうか。

そんな事を思い悩んでいるうちに、どうやら待ち合わせ場所に着いたみたいで、待っている彼の姿を見つけて、傍まで走っていく。

早めに出たので、約束の時間より多少早いはずなのに、相変わらず

彼は私より先に来て待っている。

そういえば、時間に遅れることなんてこと一度もなかった。

その代わり、約束が果たせないときはあったけど。

そのときは電話なりメールなりで早めにしらせて、私の手間を省いてくれる。

まあ、だからといって、手放して喜べるわけではないんだけど。

それはさておき、彼の傍まで走っていくと、お決まりの台詞を言うて早速デートをはじめめる。

もちろんお決まりの台詞と言うのは、あの

「待った？」

「うっん、そんなことないよ」

である。

まさか自分までもがこんな事をするとは全く予想なんてしていなかったから、初めてそれを聞いたとき、呆れてしまったけど、改めてそんな状況になってみると、そうとしか言いようがないことが分かった。

それに、何も言わないのも失礼だし。

待たせていたわけだし。

そういうわけで、早速デートに出かけた私たちだったんだけど、まず早速腹ごしらえをするために近くにあるファミレスにはいった。

私はスパゲッティナポリタンで、彼はきのこ野沢菜のパスタを頼んだ。

たぶん、普通の男の子だったら足りないんじゃないかと思うかもしれないけど、彼は結構小食で、お弁当だって私よりか一回りくらい大きい程度ぐらいだ。

もちろん、私のお弁当は平均的な女の子の大きさで、極端に大きいわけじゃない。

だから、いつも彼はこれくらいしか食べない。

昼食を食べた後、私たちは早速買い物に出かけた。

その際、ちよつとしたごたごたもあった。

普段は割り勘なんだけど、今日はなぜか彼がおごると言い出したのだ。

しかも、彼にしては珍しく、押しが強く結局押し切られるようにして彼のおごりになった上に、更に今日は珍しく、誰かの買い物ではないらしく、純粋に街へ遊びに来たみたいで、いろいろな所を回り、ああでもない、こうでもないといって会話を楽しませてくれた。

本当に普段の彼からしてみれば、悪い言い方かもしれないけど、変だった。

だけど、それ以上に嬉しかった。

しかし夢の時間はいつまでも続かない。

デートを終えた私たちは帰途へと付く。

結局今日一日彼から私の誕生日に関する話題が出てくることはなかった。

それがたまらなく淋しくて、瞬間的に思わず今日が誕生日なんだといいそうになる。

けれど、それを必死に我慢すると、できるだけ楽しそうに話をする。

そして、ようやく彼に送られて家に着き、彼と一緒に玄関へと入る。

何か私のお母さんに用事があるらしく、入れて欲しいとのことだった。

もう、そのとき既にお母さんと彼は非常に仲が良くなっていたから、何の疑いもなく、玄関に入れた。

けれど、どうやら手がふさがっているらしく、中に入ってくるようにと彼に返した。

その時、もちろん私は焦った。

たぶん今は、私の誕生日の準備をしているはずだ。

もし、そんなところに言ったら、勘の鋭い彼だ、絶対に気付く。

どうにかして、回避しなくちゃいけない。

だけど、彼は私の内心なんてお構いなしで、スタスタと中に入っていく。

「ちょ、ちょっと待って。」

何とか止めたくてそういうけど、彼は全く聞き耳を持つ気がないのか、私の声を無視して中に入る。

もうだめだと思った。

仕方がないけど、諦めよう。

彼に少しいやな思いさせるかもしれないけど、それも仕方がない。

私は、覚悟を決めると中に入る。

けど、その瞬間

「誕生日おめでとう!」

クラッカーのなる音とともに両親、そして彼がそういう声が響く。

一体どういう事なのか全く意味が分からず思わず呆然としてしまう。

それがあまりにも全面に出ているみたいで、みんな今度は苦笑している。

「笑ってないで、説明してよ!!」

それがあまりにも悔しくて、ついつい怒った調子で叫んでしまった。

お母さんの話によると、こうなるらしい。

彼と私のお母さんがあつという間に仲良くなってからのことで、デートの帰りに、ほんの少し私の家によった事があるんだけど、その時私がちよつと席をはずしている間に聞いたらしい。

それで、その翌日深く話すためにわざわざ彼を呼んだと言う。

で、そのときの会話がこうなるらしい

「あの子の誕生日の事なんだけど、君の言うとおり内緒にしておいた方がいいと思うわ。そのほうが絶対驚くし、何より記憶に残りやすい。でも、それだけじゃやっぱりインパクトに掛けるから、その日一日完全に黙っておくの」

「黙っておくんですか?」

「そう。だって、お昼じゃなんとなくインパクトに欠けるでしょう? だから夜にするの」

「夜ですか?」

「そう、それで、二人が帰ってくるまでに私たちで準備しておくから、帰ってくるまでは何があっても誕生日関係の話に持っていけないようにする事。私も君が来る事は絶対に言わないから。そうすれ

ば、いきなり君にお祝いされてもうびつくり、そのままもうどこにでも、って言う感じよ。何なら、そのままお持ち帰りでもいいわよ」
もちろん、その時彼は大急ぎで断ったらしい。

理由のほうはどうしても教えてくれなかった。

お母さんに聞けば、いかにも楽しそうな顔をして、内緒、と言うし、彼に聞いてもそれは同じで、ふんわりとした笑顔で受け流す。

ただ、その目は何があっても言うものかと言う意思がもっていた。
つまり分らない、という事になる。

まあ、気にしないけど。

ものすごく、面白そうな事だけど、あきらめる事にする。

なんだか、思いつきり本人だけ蚊帳の外のような気がするけど、気にしないでおく。

彼の心を動かすのは、残念な事に今の私では無理だから。

それはさておき、四人で楽しい晚餐となった。

彼の話では、無理やりお母さんに丸め込まれたらしく、今日は家族と一緒に私の誕生日を祝ってくれるらしい。

まあ、お母さん曰くやっぱり恋人と一緒に誕生日の方が私は嬉しいだろうとのことらしい。

実際、それが事実なだけに何も言い返すことができないけど。

と言うか、諦めモードに入っている状況で、いきなり反転されたら、嬉しくないはずがない。

彼とお母さんが本当に楽しそうに話している。

いつの間にか、お母さんは彼のグラスにシャンパンを注いでいたらしく、それを飲んでいる彼の頬が少々赤い。

と言うか、お母さん私たちはまだ未成年なんですけど。

そんな事が頭の隅に浮かんだけど、すぐに諦める。

こと彼の事に関してお母さんに何か言ったところで、素直に聞いてくれることはない。

なぜか、どちらかというと、私より彼の方についている節がある。

それにお母さんの事だ、何かあるんだろうと思う。

「ねえ、私と浮気してみない？」

……訂正しよう。

きつと何も考えていないと思う。

「て言うか、娘の彼氏を口説かないでよー!」

この人は本当に何がしたいのか全く分からない。

普通母親が娘の彼氏を口説きますか？

「あら、別にいいじゃない。気に入っちゃったし。それに、たぶん彼あなたじゃいろいろと満足できていないみたいだしね。特に下…」

「お母さん！！」

一体、この母親は人の彼氏の前で何を言うつもりなのだろうか。

全く下品でたまらない。

なんだか娘を止めたくなってくる。

しかも、彼はと言うと、いつもどおりふんわりとした笑みを浮かべている。

「もううちの娘に手を出したのか！？」

て言うかお父さん、そういつて彼の胸倉を掴まないで。

絶対酔ってるでしょう。

思わずそんなことを内心で思いつつ、お父さんを止めに入ろうとするんだけど

「あら、あなた。私は別にいいわよ。彼にならこの子を任せられそうだし。て言うか、私も彼と浮気してみたいし」

「母さん!!」

お父さんはお母さんの発言で、泣きそうな声でそういつている。

て言うか、お母さんそれは本気なんでしょうか。

なんだか、どんどん頭の中だけが若返っていつているような気がする。

なんかもう、滅茶苦茶だ。

せつかくの私の誕生日なのに、主役を放ったらかしにして、勝手に盛り上がってる。

思わずため息をついてしまう。

けれど、はしゃいでいる両親は全く気付いていない。

それがなんだか余計に疲れるような気がして、私は再度ため息をついて、彼の方を見る。

彼はいつもどおりだった。

やはりアルコールが入っているため、少し頬に赤みが差ってきているけど、柔らかい笑みは依然健在だ。

たぶん、それがせめてもの救いだったと思う。

馬鹿騒ぎの後、彼と私は二人して庭に出た。

もう夏が終わり、秋へと季節が移ろい始める時期のため、薄着だけでは少々肌寒い。

けれど、なぜだか今の私はそれを感じない。

たぶん、あの馬鹿騒ぎのおかげで心も体もあったまったからだと思う。

「いい家族だね」

彼がそういう。

どこか、羨ましがだ。

でも、私にしてみれば、あまり誇れない。

ねじが一本外れてるとしか思えない母親。

おまけに、自分の彼氏と浮気をしようとか言い出すし。

お酒が入ると暴走する父親。

なんとなく、わかるんだけど、人の彼氏を目の敵にしてるし。

だけど、そんなことより気になることがある。

彼の顔。

その顔に浮かんでいるのは普段と変わらない笑みのはずなのに、どこか淋しげに思えた。

「と、それはいいとして、いつまでもお邪魔しておくわけにも行かないから、早めに渡しておかないとね」

彼はそう言うと、包みを私に手渡す。

「開けてみて」

そっという彼の顔はもう普段どおりだった。

一瞬考え込みそうになった。

けど、それを振り払うと、包みと箱を開ける。

中からでてきたのは

「オルゴール？」

たぶん、オルゴールだと思う。

これに似た感じの奴を前街で見かけたことがある。

もしかすると、彼は覚えていてくれたのかもしれない。

デートに行くたびに私の目がオルゴールに言っていた事を。

「誕生日おめでとう」

そして、彼はもう一度そう言って、優しい笑みを浮かべた。

第二十八話 彼と彼の妹とお母さんと

そのオルゴールは今も机の上に飾ってある。

今の私の一番の宝物。

クリスマスのときにももちろんプレゼントをもらったけど、それよりもこのオルゴールの方が思い出深い。

あの後、彼は両親に別れを告げてから家に帰った。

私はそのオルゴールをもって二階に上がり、ずっとその音を聞いていた。

曲名は分らないんだけど、旋律がすごく綺麗で、思わず聞きほれてしまうほどのものだった。

彼はこういうものを選ぶセンスがいいと思う。

クリスマスプレゼントだってそうだった。

まあ、クリスマスのときはそれほど長くは入れなかったけど。

さすがに、両家はさんでというわけには行かないし、だからといってどちらかで、と言うわけでも行かない。

結局夕食を食べてお開きと言う形になった。

まあ、それはそれで楽しかったんだけど。

それにお正月は一緒に初詣に行った。

初めてお母さんに晴れ着を着付けてもらったんだけど、それを見て彼は目を細めて似合ってるって褒めてくれた。

そのときは本当に嬉しくて飛び上がりたほどだった。

そして、その後しばらくしてから私は練習に入った。

そう、いつもいつも迷惑ばかりかけている彼に、せめてものお礼として彼の誕生日を祝うために、お母さんに協力してもらって……

気がつくとも携帯がなっていた。

一瞬彼からなのかもしれない、そう思って手に取ったけど、曲が違う事に気がついて思わずため息をついてしまう。

期待するだけ間違いなんだと思う。

もし彼が掛けてくるなら、さっきの電話だって出てくれるはず。

そんな事を内心で思いつつ電話に出る。

相手は昨日アドを教えた彼女。

「お兄ちゃんから電話がありました」

開口一番に彼女はそういう。

けれど、いいことのはずなのに、なぜか声はそれとは全く逆だ。

でも、たぶんそれもそろそろ教えてくれると思う。

そうじゃなくちゃ、電話なんて掛けてこないと思う。

そして案の定、彼女は話し始めた。

「お母さんがいうには、どこかに旅行に言っているみたいだそうです。しかも、話し方は全然何でもなさそうにあっけらかんとしていたそうなんです。それでお母さん、それに腹が立ったみたいで……」

つまり、またやつあたりをされたって言うことなんだろう。

「なんだか、本当にお兄ちゃんのありがたみが分かりました。いつもいつも、自分が防波堤になって、私たちを護ってくれていたんだなって。私なんて、お母さんの事あまり好きじゃないから、たった一度二度八つ当たりされたぐらいで、もう話したくもなくなるんです。お兄ちゃんも、私と同じで、お母さんの事なんて大嫌いのはずなのに、それでも自分の役割こなしてるんです。なんかもう、劣等感感じまくりですよ。て、すみません、なんだか愚痴になって」

「気にしなくてもいいよ。こういう時のために教えておいたんだし。どんどん言ってくれてもかまわないよ」

私がそう言うと、彼女は本当に安心したように息を付く。

きっと、彼女は学校では誰にもそんな事を愚痴れないと思う。

いくら親しい友達でも自分の身内の恥になるようなことは決してい

えない。

ううん、たぶん言わないようにいわれていると思う。

前、彼が言っていた。

うちの母親は自分を商品としてでしか見ない、って。

もちろん最初は、彼の思い過ごしなんだろうと思っていた。

その理由もはつきり教えてくれなかったし。

まあ、聞けなかった、というほうが正しいのかもしれない。

聞こうとすると、そのときは目に見えて分かるほど、彼の表情が変わる。

どこか自嘲的で、自虐的な表情になっていた。

だから、無理に聞けなかった。

嫌われてしまうのが怖くて。

だけど、普段顔をほとんど変えない彼がそこまで変えるんだから、それなりの理由があるんだとも思えた。

それに私自身も彼のお母さんに会ってみただけど、なんとなく怖かった。

どこか寒々とするような目をしていた。

表情は友好的に見えるんだけど、その目がどうしても気になって、怖かった。

その事は彼に言わなかったんだけど、すぐに分かったみたいで、すまなさそうな顔をしていた。

だから、きっとそれであっているんだと思う。

彼女からの電話が終わり、しばらくの間はもう何もする気力も起きなくて、ぼんやりとしていた。

それがお母さんにとっては、すごく心配みたいで、そんな顔をしていただけ、聞いてくることはなかった。

たぶん聞かれないことを分かってくれているんだと思う。

そのまま午後も自分の部屋で何かをするわけでもなく、ただぼんやりと時間が移ろい行くのを待つ。

自分は何て弱いんだろう。

思わずそんな事が脳裏によぎった。

今の私は何かをするだけの気力がない。

せめて、情報を集めることぐらいはできると思う。

なのに、私はそれが出来ないでいる。

たぶん、言いたくないんだと思う。

別れてしまったことを、誰にも言いたくなかった。

誰にもいわなかったら、もしかすると、まだやり直せるかもしれない。

そんな気がするから。

それに話を大きくしたくもない。

きつと、友達に言ったら大騒ぎになると思う。

だから誰にも言いたくなかった。

誰にも言うつもりはなかった。

第二十九話 置いてけぼりの心と向き合う思い

翌日、金曜日。

今日は、週に一回の登校日。

たぶん、彼も行くはず。

私は、服を着替えると、いつもの待ち合わせ場所へと向かう。

緊張のため、かなり早く起きてしまい、ご飯もほとんど喉に通らなかった。

彼は一体どうなんだろう。

もしかすると、彼もやっぱり緊張して、ご飯が食べられなかったりするのだろうか。

だけど、それはすぐに打ち消す。

たぶんきっと彼はきちんと食べてきていると思う。

例え無理やりだったとしても。

携帯を出して時間を見る。

約束の時間はとくに過ぎている。

やっぱり来ないか。

分かっていたはずなのに、ずっと待ってしまっている自分に苦笑してしまふ。

だけど、なぜか足は動かない。

ここで待っていても、彼は絶対来ない。

そんな事ぐらい分かっているはずなのに、足が動いてくれない。

時間はどんどん過ぎていく。

視線はいつの間にか、彼がいつも通る道へと向かっている。

そこで思う。

心のどこかで願っているんだ、と。

もしかすると、彼が来てくれるかもしれない、と。

けれど、やはり彼は来ない。

時間はどんどん過ぎていく。

もうそろそろ、ぎりぎりの時間になる。

だけど、視線は同じ方向。

彼が通る道。

でも、やっぱり彼は来ない。

もうそろそろ、走らないと間に合わない。

それでも彼は来ない。

私は走り出す。

泣きそうだった。

彼は来ない。

彼は私を待たない。

でも、もしかすると、もしかすると、ただ今日も休みのだけなのか
もしれない。

私は一生懸命になって走った。

遅刻しそうなもある。

だけど、それ以上にそうやって必死になっていないと、感情に押し
つぶされそうだった。

そうでもないかと、彼を信じられなかった。

でも、教室に入って見つけてしまった。

今までどおり、無愛想で仮面をかぶった表情で、ぼんやりとしてい
る彼の姿を。

彼はやはり、私を待っていなかった。

もう、終わりなんだろうか。

彼の中ではもう完全に終わってしまったんだろうか。

いやだ。

絶対にいやだ。

私は諦めない。

諦めたくない。

私が席に着くと同時に担任の先生が入ってくる。

今日は単に集まるだけで、これといってすることはない。

だから、担任が少し話すとそれでお開きになる。

クラスの人それぞれ散り散りになって思い思い友達と話している。

私のところにも、もちろん友達が来る。

別々のクラスになってしまった友達もそうだ。

だけど、今は友達と話している余裕なんて無い。

彼はもう既にかばんを持って、教室を出て帰ろうとしている。

「ごめん、ちょっと用事があるから」

友達にそう言うと、必死になって彼を追いかける。

私と違って彼は走っているわけじゃないのですぐに追いつく。

けど、全然私のほうを見ようとはしない。

「待って」

そういつて彼の腕を掴む。

そうでもしないと止まってくれそうにもなかった。

「お願い、話があるの」

腕を掴まれた彼の顔は、今までと違った。

うつん、付き合う前の、それこそ初めてあった頃の顔と同じ、柔らか味が消えていた。

だけど、めげない。

まだ、私は別れるつもりはない。

まだやり直せるはずだと思う。

だから、まず話し合いたかった。

彼の腕を掴んだまま、引つ張るようにして連れて行く。

場所は、お弁当を食べていた場所。

あそこなら、誰にも邪魔されず、話し合えると思う。

けれど、そこに行くまで、周りの私たちの見る目が怖かった。

なんだか、私たちが別れたことを見抜かれるんじゃないかって、思えて仕方なかった。

そんなはずはない。

そんな事があるはずなんてない。

心の中で、何度もそう言い聞かせても、効果はない。

我慢するしかなかった。

付くまで我慢するしかなかった。

だから、そこに付いたときはまずほっとした。

だけど、そんな事をしている余裕なんてない。

これからが本番なんだから。

第三十話 離れる心

「ねえ、一昨日昨日とどこ行ってたの？」

なのに、どうしても踏ん切りがつけなかった。

本当は、何で別れようと思ったのかを聞かなくちゃいけないはずなのに。

それでも、臆病な私は聞けなかった。

「城崎温泉。せつかくの休みだから、温泉でも行こうかと思ったから」

そんな私を尻目に、彼はいつもの彼で全く感情の変化を見せない。

ううん、それどころか、何を考えているのかさえ、予測が付かない。

それがとても悲しかった。

ここまで心が離れてしまっている事が。

でも、それでも私は繋ぎ止めたいと思う。

私は心を決めると、息を軽く吸い彼の方へと向き、本題に入ろうとした。

「そういえば、妹が迷惑をかけたね。悪かった。余裕があれば、家がどうなるかぐらい分かったんだけど、ちょっととどたばたしていて

ね。連絡する余裕がなくて、ついね。あいつにも悪い事をしたと思うけど、なんかいろいろと愚痴を聞いてくれたんだったよね。本当にごめん」

なのに、まるで私が何を言おうとしていたのかを読まれたみたいに、機先をそがれた。

そのため、思わず呆然としてしまったけど、なんだか彼の言っている事が一々腹立ってきた。

どこか投げやりで、感情がこもっていない。

うつん、はたから見れば本当にすまなさそうにしていると思うんだろけど、彼を知っている私からしてみれば嘘にしか思えない。

どうしてもよさ気にしか見えない。

それが腹立たしかった。

「そんな事はどうでもいいの」

思わず出てきた言葉はどこが低い声だった。

「私は彼女が心配だった。だから、相談にも乗ってあげた。ただ、それだけのこと。それに私が話したいことはそんな事じゃない。ねえ、どうして別れようなんて思ったの？何か私が悪い事でした？」

私がそついい終えたとき、初めて彼の瞳から感情がもれた。

今まで一度も見えなかった感情の変化がやっと見る事ができた。

だけど、それもすぐに鳴りを潜めると

「メールで送ったでしょ。疲れたって。それに、君が悪いわけじゃないって。ただ、それけ……」

「わかんないよ!!」

また元通りの表情になる。

また、どうしてもよさそうな、私になんかまったく興味の無いような表情になる。

それがたまらなくいやで、叫んでいた。

「全然、わかんないよ。どうして、疲れたのか。どうして私が悪くないのか。何で、別れなくちゃいけないのか。それが全然わかんないよ」

納得がいかない。

私は別れたくない。

だけど、彼がどうしても別れたいって言うんだったら、せめて納得のいく説明をしてもらいたい。

そうじゃないと諦めきれない。

そして、何より、きっとこの恋が終わることさえない。

「だから、教えて」

彼をじっと見る。

目をそらしてやるもんか。

何があっても、納得の行く理由を言ってもらわない限り、私は引くつもりはない。

彼はそつとため息をついた。

めったに付かない彼が、だ。

だけど、そんなことは今はどうでもいい。

大切なのは、答えた。

だから、目をそらさず彼を見つめる。

彼が答えるまで。

そして、その意思が通じたのか、彼は顔をゆがめた。

それほど言いたくない事なんだろう。

だけど、聞かないわけには行かない。

第三十一話 届かぬ思い

「信じられないから」

彼がそう答える。

ただどわけが分からずきよとんとしてしまう。

それに彼も気がついたんだろう、すぐに続ける。

「俺は君の事が信じられない。君が本当に俺のことを好きなのかどうか。本当に俺なんかでいいのかってずっとそう思ってきた。そう思っでずつと一緒にいた。だけど、ここ最近まともに連絡が付かなかった。メールも電話も適当になってきた。何か理由があるんだろう、そう思っていた。だけど、それが続いたびに、俺はどんどん不安になった。だから、思っただ。そんなに不安なら、もう止めてしまえってね。それに俺なんかといたって、君も疲れるだけだろうしね」

もう信じられなかった。

信じたくもなかった。

私の気持ちちが本気か不安だった？

私と自分が相応しいか不安だった？

私が彼と一緒にいて疲れる？

そんなわけない。

私は、彼が本当に好きだし、これから先ももっと一緒にいたいと思っ
っている。

それに私と彼がつりあわない？

そんなわけない。

確かに周りからはそんなふうに言われているけど、私からしてみれば、
全くの逆だ。

私のほうが、彼に相応しくなんてない。

そう思えて仕方なかった。

おまけに、私が彼と一緒に疲れる？

冗談じゃない。

彼といるときほど、安らぐときはない。

彼と一緒にいて疲れることなんてなかった。

たまに、嫉妬して後悔するときもあったけど、それでもそれを上回る
ものがあつた。

だから、そんなはずがない。

「私は、あなたのことが好き。もう、これでもかって言っぐらい好

き。それだけは、何があっても変わらない。だから、別れようなんていわないで。私はあなたと一緒にいたいし、あなたじゃないとだめ。他の誰かじゃだめなの。だから、お願いだから、そんな悲しいことを言わないで」

自分に自信を持って欲しい。

あなたは彼女の私が誇れるくらいすごい人。

だから、そんなふうに自分を卑下しないで欲しい。

この想い、伝わって。

心の中でそう念じながら、彼を見る。

彼の瞳に動揺の色が浮かんでいる。

彼の心を溶かしている。

だから、きっと、この思いは届いているはず。

私たちはやりなおせるはず。

お願いだから。

「悪いけど、やっぱり無理だ。」

だけど、彼は残酷な言葉で返す。

「どうして……！」

どうして。

どうして伝わってくれないの。

私はこんなに好きなのに。

そんな言葉ばかりが頭に浮かんでくる。

「俺は君を信じられない。これから先もきつと不安を感じ続けてい
なくちゃいけないと思う。それを考えるともうどうにもならない。
それに、やっぱりつりあわないよ。俺なんかじゃだめなんだよ。自
分の彼女のことを信じられず、逃げ出すような男なんかじゃね」

そういう彼の表情はどこか自嘲的で、自虐的だった。

いや、たぶんそのつもりで言っているんだと思う。

だけど、それが胸にちくりと痛む。

自分のせいだ。

ここまで彼を不安にさせたのは自分のせいだ。

私が軽はずみな事をしたから。

だから、これは私のせいなんだ。

悪いのは彼じゃない、私なんだ。

償いたい。

ううん、償わなくちゃいけない。

「だから、わか……」

「いや！そんなの絶対にいや。別に私のこと嫌いになったわけじゃないんでしょ？別に他に好きな人ができたわけじゃないんでしょ？だったら、やり直そう。やり直そうよ」

そのためにも、今終わりにするわけにはいかない。

償うためには、このまま続けなくちゃいけない。

「無理だよ。俺は、もう君を疑いたくない。君を疑って、傷つけてしまつかもしれないから。だけど、俺はそんなことはしたくない。だから、無理なんだ。終わりにしなくちゃいけないんだ」

なのに、彼は私の思いを汲んでくれない。

無理としか言わない。

それでも、それでも私は……

「傷ついてもいい。疑われてもいい。それでもいいから一緒にいて私はあなたのことが好き。もうあなたなしじゃだめ。あなたが傍にいてくれないと、どうにかなっちゃういそうなの。お願いだから、一緒にいて。私のことならいいから。あなたが気にする必要はないから」

諦めたくない。

彼の事を諦めたくはなかった。

「それでも、無理なんだ。俺は君を傷つけることが怖い。君には傷つき、壊れて欲しくない。俺と一緒にいればきつといつかそうなる。だから、もうここで終わりにしておいた方がいい。深みにはまる前に」

だから必死になって、言っているのに、それなのに、彼はそれを繰り返すばかり。

どうして、そんなに怖がるの？

別に私は傷ついてもいい。

他人同士の付き合いなんだから、傷つかない事なんてない。

それでもかまわないのに。

やっぱり彼は……

「優しすぎるよ」

そう優しすぎる。

「でも、その優しさは辛いだけだよ」

悲しみしか起こらないと思う。

「だから、お願い。そんな優しさなんて欲しくない。お願いだから傍にいて。私はあなたの傍でその優しさに触れていたい。あなたに包み込まれていたい。あなたは強いから、私のことをそっと包み込んでくれるほど強いから。だから……」

一緒にいて。

そういいたかった。

だけど、いえなかった。

彼の表情が全部消えたから。

わけが分からなかった。

どうして彼がそんな顔をするのが、全然分からなかった。

別に私は何も悪い事を言っていないと思う。

なのに、どうして彼はそんな顔を……

「……俺が優しい？強い？」

そう口を開いた彼は、ひどく冷たい目をしている。

「冗談じゃない。俺が優しい？優しいなら、こんな無理難題を押し付けたりはしないよ。俺は自分勝手に、自己保身しか考えていないだから、しつこく別れようって言ってるんだ。それにそれが優しさに思えるのは、俺が自己保身を考えて結果のこと。君のためでもなんでもないんだよ。それに強くもない。強かったら、いちいち城崎

までわざわざ逃げると思う？携帯の電源切って、無視すると思う？
そんなわけないだろ。弱いから切ったんだ。怖いから切ったんだ。
君を傷つけて、自己嫌悪に陥るのが怖いから。自分が傷つくのが怖いから。それでも、そんなふうにいえる？そんなふうに見える？俺のこと何も知らないくせに知ったふうに口聞かないでくれる！！」

彼が大声で言った。

こんな姿は初めてだ。

そして、そう言うと、彼は私を残して帰ってしまふ。

わけが分からなかった。

ううん、分かりたくないのかもしれない。

だって、たぶん、これはきつと……

「うつ、うつ……」

これはきつと、もう彼とはやり直す事は叶わないと言う事だから。

なぜなら、私は彼を怒らせてしまった。

私が良かれといった言葉は彼にとっては侮辱でしかなかった。

だから、きつと、もう……

第三十一話 届かぬ思い（後書き）

彼女視線はこれで終わります。
次回以降、彼氏視線に戻ります。

第三十二話 本当の思いは……

家に帰った私の心の中は自己嫌悪でどろどろだった。

いくら言われたくないことを言われたからといって、あそこまで怒鳴る事なんてなかったと思う。

彼女はきつと必死だったのだと思う。

俺なんかのことを必死で思ってくれていたのだと思う。

だからこそ、私はこうする事を選んだのだ。

私は家へと帰る汽車の中で考えた。

果たして、これからどうすべきなのかと言う事を。

もちろん、よりを戻す事なんか少しも考えなかった。

どう考えても自分とつりあいなんて取れてないと思ったから。

だから、別れた後どうするかと言う事を考えた。

卒業したら、私は県外の大学へと行く。

もう、これ以上両親と一緒にいたくなかったからだ。

既に部屋も冬休み中に決めてある。

彼女の部屋が隣だと言う事もあったけど、それもしばらく経てば気にならなくなると思う。

それに、それがどうしてもだめだったら、部屋を変えればいいだけのこと。

だから、きっとそれは大丈夫だとして考えた。

結果として、今の自分の性格をどうこうするしかない。

いつその事中学時代のように振舞ってみてもいいかもしれない。

いや、たぶん、そうしたほうがいいんだと思う。

あのときの私は、間違いなく輝いていた。

だから、それに戻す。

それまでは、今までどおりに、そういうことに落ち着いていた。

その際彼女には悪いことをすると思った。

だけど、そうすることしか自分を支えられそうにもなかった。

だから、彼女にあんな事を言われたときは正直言って面食らった。

まさかそこまでこんな私のことを思ってくれているとは思っていなかった。

だけど、それでも答えはノーだった。

怖かったのだ。

彼女を傷つけることを。

そして、その結果として自分が傷ついてしまう事が。

だから、私は断り続けた。

もう、これ以上彼女とはいられない。

たぶんきつと、また不安を抱き続けることになると思う。

けれど、それだけはいやだった。

何があってもいやだった。

もう、これ以上自分を傷つけたくなかった。

そんな余裕なんて無かった。

彼女と付き合い始めるとき、もうどうなってもいいか思っていたけど、それは全くの嘘だった。

やっぱりどこまで言っても自分の身はとてもかわいかった。

傷つく事が怖かった。

なのに、そんな私を、彼女を傷つける言葉しか言わない私を、それでも彼女は私のことをまるで賢者のような目で見ていた。

それがいやだった。

私はそんなものじゃない。

そんなたいそれたものじゃない。

そしていつの間にかにその想いが爆発して、怒鳴る事になってしまった。

最悪だった。

最後に見た彼女。

その瞳には涙が滲んでいた。

それが見て入れなくて、私は逃げるようにして帰ってきた。

私は弱い。

弱くて弱くてどうしようもない。

自分の身を守る事しかできない。

だから、きっと今の私には人を愛する資格なんてない。

心から愛してくれている人と一緒にいる資格なんてない。

きっと傷つけてしまっただけだから。

私は、机の上を見る。

そこには、包装紙で包まれた箱がある。

彼女へのお土産。

気がついたら買っていた。

どうせ渡せないくせに。

今日学校に行くとき、本当に緊張した。

出来れば行きたくなんてなかった。

ただ行かないわけには行かなかった。

たぶん、家にいれなかったと思う。

なぜなら今日の朝、追い出されるようにして、学校に行った。

母親は私に対して明らかに怒っていた。

昨日帰ったのは夜中だった。

雪で遅れて予定よりずっと遅くなったためである。

それで夜中に帰った私に母親は思いつきり平手打ちをした。

それから後はずっとお説教。

延々と、まるで自分の憂さを晴らすように。

だけど、私はそれを適当に聞き流すと、妹たちに謝った。

いろいろと迷惑をかけたと思うから。

説教している様子を見て、家がどんな状況だったのかぐらい予想が付いたから。

その時、聞いたのだ。

妹が彼女に世話になったことを。

そのときは、本当に申し訳なかった。

だけど、電話するわけにも行かず、結局今日になってしまい、おまけにけんか沙汰で、もう最悪。

きちんとした御礼もできなかった。

けれど、もう諦めるしかない。

もう、私と彼女のつながりは完全に切れてしまったから。

第三十三話 彼女の友達と

それからの私の生活は全くと言うほど活力がなかった。

母親からは事あることになじられ、妹たちにもあれやこれやと文句を言われた。

特に、彼女と別れたことをポロリと言えば、もう散々な言われようだった。

まあ、それも仕方がない、私が悪いのだから、それら全ては甘んじて受けるつもりだ。

そうやって、ぼんやりと一日を過ごしていたんだけど、呼び出しをくらってしまった。

相手は、彼女の友達だった。

たぶん、理由はいきなり別れたことだろう。

案の定、待ち合わせ場所の喫茶店に着くと同時に三人からの強烈な睨みつける視線と言う盛大な歓迎だった。

私は、内心でため息をつきつつ、彼女たちの応対に専念する。

まあ、それが気に食わないのだと思うけど、さらに視線を強烈にするけど、もう既に母親からので、なれてしまっている分、全く通用しない。

と言うか、彼女たちはなんだか勝手にヒートアップしている。

それほどまで、彼女のことが大切なんだろう。

やはり、彼女の人の見る目は良い。

男を見る目は余りよくないみたいだけど。

「ねえ、聞いているの」

そんな彼女たちを尻目にぼんやりと考え込んでいたんだけど、今度
はそれに噛み付かれた。

まあ、たとえ私がどんな態度を取ったとしても、気に食わずそうし
てくるとは思っけど。

「て言うか、大体、何で泣かせるわけ？男して最低でしょう」

そんな半ば諦め気味の私の内心など無視するように、痛烈な言葉を
投げかけてくる。

どうでもいいけど、この話、実はもう三回目。

さすがに、もうこれ以上は付き合ってはいられないと思った私は、
内心でため息をつく

「なら、そんな最低な奴に、どうして欲しいわけ？何、よりを戻せ
とでも言つつもり？」

ほとんどけんか腰で切り返す。

どうもここ最近、我慢ができなくなってきた。

良くも悪くも少しずつ昔の自分に戻りつつあるみたいだ。

「んな分けないでしょう。私たちが言いたいのは、土下座でも何でもいいから謝れって言う事よ」

けれど、そんな私の軽薄さ、または言葉が気に入らないのか、感情をあらわにして言い返してくる。

この際どうでもいいような気がするけど、どうして彼女の周りにいる人たちはこうも感情が表に出すぎるんだろう。

もう少し、隠せないのかと思う。

と、それはいいとして、彼女たちの言い分に対して答えなくてはいいけない。

「悪いけど、それは無理」

けれど、だからといって了承するつもりはない。

彼女たちもその言葉を聞いた瞬間ぎらりとした目で私のことを睨む。

どうやら完全に憎まれているみたいだ。

まあ、友達のをあそこまですたずに傷つけられたんだ、そう思っても不思議じゃない。

本当に友達想いだと思う。

だけど、私からしてみれば、それなりの言い分がある。

「よく考えてみて。いきなり別れようと言い出した奴が、今度は馬鹿みたいに謝りに来る。はたから見れば当然なのかもしれないけど、向こうからしてみれば良い迷惑だよ。もしかすると、もう終わったんだから踏ん切りをつけようとしているかもしれないし、まだ思いが残っているのかもしれない。それだけじゃなくて、他の場合だっていろいろあると思う。だけど、どの場合にしても、振った奴が後からいちいち謝りに行くのなんて、どう考えても自分勝手じゃないと思わない？ 混乱しているところに、わざわざ行つてさらに引つ掻き回す事になるんだよ。それこそ、逆に最低な事だよ」

私^がが会いに行つても、たぶん彼女は余計に混乱するだけ。

いや、それどころか、逆に罪悪感を感じるかもしれない。

悪いのは私だというのに。

だから、そんな事をするわけにはいかない。

もし謝るんだつたとしても、彼女が落ち着いてお互いもう何ともないときにじゃないと意味がない。

だけど、それが彼女たちにしては言い訳にしか聞えないみたいで、もうありとあらゆる罵詈雑言を並べてくる。

なんとなく、そう言うところは彼女と似ているような気がする。

と、それはいいとして、いつまでもこんなところにいても、しょうがない。

と言うか、逆に精神衛生上よろしくない。

「話がそれだけなんだったら帰るわ。これ、代金」

そういつて、代金を机の上に置くと、さっさと喫茶店から出る。

あれ以上いてもたぶん話は平行線でしかないことぐらい簡単に予想が付く。

けれど、向こうはそれに全く気がついていないらしく、私の名前を叫んでいるが、この際は無視。

聞いたところで時間の無駄でしかない。

それにもともと私は彼女たちのことがあまり好きじゃない。

第三十四話 追憶の砂浜

第一印象はもう最悪だった。

あたかも人のことを見下したような目で、おまけに汚物かなんかを見るような感じだった。

そりゃ、私と彼女とを見比べれば、まさしく美女とそれといわれても仕方がないと思う。

彼女はそれほどまで綺麗だったし、それに引き換え私は、根暗で平凡な男だったわけだから。

だから、そんな目で見られたとしても、別に間違いじゃないんだけど、それでもやはり納得が行くわけもない。

もし、彼女の友達じゃなければ、まず私は近寄る事すら考えなかったと思う。

私に対する女性の評価は本当に厳しい。

比較的仲の良い部活の仲間や同じ図書委員の人は、そこまで強烈なものと言ったりはしないけれども、たいていの人は私のことを『きらい』といった感じで見ていた。

もちろん、別に私が何かをしていたわけじゃない。

ただ、あまり友達を作らず、読書ばかりをしていただけ。

それだけなんだけれども、それがはたから見れば、おかしかったんだろう、健康的と思われることはなかった。

そして、それは彼女たちも同じだった見たいで、私のことをそういう目で見ていた。

もちろん、彼女との交際期間が長くなるにつれ、比較的それもなりを潜めたけど、それでもやはり今回のことで相当頭にきたみたいで、目が以前のものに近くなっていた。

まあ、どこまでも彼女の味方である彼女たちにしてみれば、徹底的に傷つけた私のことを許せないのも当然なのかもしれない。

けれど、それでも私は彼女に謝るつもりはないけれど。

さすがにこれ以上彼女のことを傷つけたくはないからだ。

私はしばらくぼんやりと歩いていたんだけど、ちょうど海が見えてきたので、あそこへと行く事にした。

もちろん、あそことは私のお気に入りのポイントで、何かを考えるには一番の場所だ。

私はすぐに砂浜に降りる。

冬特有の冷たい風が肌に触れるたび体の熱が失われていってしまう。

けれど、それが逆に気持ちよかった。

自分の中で鬱々とたまっている感情を洗い流してくれているようで。

海はいつもどおりに深い青と流木を抱き、悲しみくれるように、波立っている。

もしかすると、それが逆に自分の心を表しているようで、不思議と一体感をもてたのかもしれない。

そんな事を考えつつ、ようやく目的地に付いたのだけれども、そこには先客がいた。

もちろん、私の知らない人、いや子供か。

おそらく、小学校の中学年ぐらいだろうと思う男の子とが女の子仲良く遊んでいた。

男の子は、以前私がしていたようにその岩を登り、女の子はその姿をはらはらと見つめている。

その目は心配そうでいて、どこかうらやましげだった。

たぶん、きっとその女の子では無理なんだろうと思う。

さすがにスカートでそんな事に挑戦する勇氣はないと思う。

それでも、男の子はそんな事関係なさそうにどんどん上っていき、ついには絶好のポイントに到着する。

「うわ、すつげえ」

それと同時に感嘆の声。

その姿を見て、遠い昔の自分とだぶる。

初めてそこに到達し、そこからの景色を見た瞬間私は何かに取り付かれたように見入っていた。

そして、その後私は感嘆の声を漏らした。

あの時、あの場所を見つけた自分が誇らしくなった。

誰も知らない自分だけの秘密基地を手に入れたようで嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

だから、ここのことは誰にも教えなかった。

教えなくなかった。たぶんそのときからもう、私は心のどこか虚ろだったのかもしれない。

視線を先ほどの女のこの方へと戻す。

そこには既に姿はなく、気がつくとその女の子も男の子の傍で座り込んでいた。

たぶん、うらやましかったんだと思う。

男の子が思わず感嘆の声を漏らしてしまうほどの景色を見ている事が。

もし、昔、私が初めてここに来たとき、一人じゃなかったら、今の私はどうなっていたんだろう。

やはり、今のままだったのだろうか、それとも違う私になっていたんだろうか。

残念だけど、予測は付かない。

だけど、別にどっちでも良かった。

どっちにしろ、最終的に一人になることは変わらないと思う。

昔の私はどちらかと言うと、いいお友達でいましょうね、そういうタイプだった。

だから、きつと特別な誰かがいるわけではなく、どうにもならない孤独を感じ続けなくてはならないままだと思う。

特別な誰かに傍にいてもらう。

それもきつと幸せの本質のうちの一つに入ると思う。

たとえば、それが親でもいい、友人でもいい、何でもいいから、特別な誰か。

それがそつと自分の傍で寄り添っていてくれる。

孤独を拭ってくれる幸せだと思う。

けれど、残念な事に私には、特別な誰かはいない。

無条件で愛してくれる人はいない。

たとえ、親だとしても。

だから、私は探さなくてはいけないんだと思う。

私のことを無条件で愛してくれる人を。

だから、私はやはり元の私に戻らなくてはいけない。

昔の私のほうがはるかにとつつきやすいから。

海を見て、空を見る。

同じ青でもその源は異なるもの。

人も同じ、同じ人でも源は異なる。

一人一人が同一で、異端者。

一人一人が、枠の中から少しずつはみ出している。

そして、そのはみ出している部分に人は個性を感じ、惹かれて行く。

私も惹かれる個性を持たなくてはいけない。

今のままの個性ではどうにもならない。

変わるしかない。

変えるしかない。

方向転換をすると、ゆっくり歩き始める。

後ろからは本当に楽しそうな二人の声が聞えてくる。

彼女たちは幸せなんだろうか、それとも不幸せなんだろうか、それは私には分からない。

いや、たぶんきつと幸せと不幸せは表裏一体。

常に幸せの傍には不幸せが、不幸せの傍には幸せがいるのだろうと思う。

そして、その只中に、あの二人はいる。

できることなら、私のようなことはしないで欲しい。

それだけ近くにいるんだったら、私のように臆病にならず、信じる強さを持って欲しい。

そうすることで、不幸も幸せに変えられると思う。

私は階段を上り、砂浜から出ると、来た道を戻る。

時刻は夕暮れ時、もうそろそろ帰らないと、たぶんまた母親にとやかく言われることになると思う。

さすがに、これ以上面倒な事はごめんなので、さっさと帰って余計な事を言われぬようにするのが、まあ利口だと思う。

波の音が優しく鼓膜を震わせる。

母なる海、どこかでなくしたものをそつと渡してくれるそんな優しさを持っている。

まあ、私の家の母は私の心をどこかへなくすようにするけど。

そんな事を行って見たところで仕方がない。

所詮親も人間、完璧である事は不可能だろう。

もう既に分かりきっている事。

今更行つたところでどうにもならない。

そんな事をぼんやりと考えながら、夕焼けにそまる海岸沿いを私はゆっくりと歩いて帰った。

第三十五話 氷の華

昔後輩が言っていた。

先輩は氷の華なんだ、って。

私は意味が分からず、一体どうしてそんなふうに思ったのか訊ねた。その後輩の答えはこうだった。

一見すると優しそうな私だが、ひとたび怒ればその鋭さは鋭利で氷の如く冷たく、まるで氷の牙を首筋に立てられたような寒々しさを感じるらしい。

だから、氷の華。

華が花でないのは、どちらかと言うとかわいらしいイメージのある花より、優美で鋭さのある華のほうがあっていると思ったかららしい。

私はその後輩の鋭さに少し驚いた。

まさか、こつも自分の性格を看破されるとは思わなかったからだ。

私は怒ったとき、まず一番初めに来るものは狂気ではない。

いや、何も来ないといったほうが正しい。

ただ、鬱々と面倒臭げに処理をする。

その姿を見て、きつと氷のような冷たさだと感じたんだと思う。

ただ、なんとなく華と言うのは、遠慮したかった。

そんな綺麗なものに自分を例えられるわけがない。

それこそ、食虫植物ならまだしも、花なんて言い方はあわない。

それとも、ラフレシアとでも言うつもりなのだろうか。

さすがに同じ華でも、それだけは勘弁して欲しい。

別に私は毒など持っていないわけだから。

それはいいとして、私を近くで知るようになれば、第一印象と全然違う事が分かる。

すぐに猫をかぶっている事がばれてしまう。

それがいやだから、距離を置く。

誰でも、人に良く思われたいものだ。

そして、それは彼女とも同じだった。

今、思い返す中で、私は彼女を前にして、本当の自分を出した事なんて一度もなかった。

自分をひた隠しにして、極力いやな自分を出さないようにしていた。

もしかすると、あのメールは自分の心を表していたのかもしれない。

もう、自分を偽るのは疲れた、と。

私は臆病だから、だから自分を出さなかった。

彼女に嫌われなくなかったのだ。

彼女が好きになったのは、いつでも冷静沈着、顔色を崩さない男で、その仮面の下にある弱くて脆い臆病な男じゃない。

そんな素顔を持つ男なんかを好きになったんじゃない。

そう思うと、自分の素顔なんか見せられなかった。

私は彼女のことを好きだった。

大切だった。

そしてそれ以上に失いたくなかった。

だから、自分の素顔をひた隠しにしてきた。

けれど、それももう意味がない。

彼女のそばにはいられない。

傍にいつ続けるだけ不安を感じ続けることになるから。

私は、窓の外を見る。

いつの間にか、夜が明けるところか日が高く上がっていた。

どうやら、寝起きで頭の中が少々こんがらがっていたみたいだ。

起き上がると、私はすぐに服を着替えしたに降る。

今日は月曜日、家には誰もいない。

いや、もうそろそろしたら、母親が帰って来るか。

私が急に城崎へ行ったあの日以外、普段母親は昼までしかパートはない。

おかげで、昼は家にいられない。

何を言われるか分かったものじゃないからだ。

台所に行くと、籠の中に入っている菓子パンを手取る。

まあ、一応昼ごはんぐらい食べておかないといけない。

やはり昼は家で食べる気なんて起きない。

私は、その手に取った菓子パンの袋を開けて、ごみだけを捨てると裸のそれをかじりつつ外へ出る。

行儀悪くあまり褒められる事ではないけれど、この際どうでもいい。

今更、もう模範少年でいようなんて思わない。

腹ごしらえをしつつ、私は街へと足を向ける。

あまり、と言うよりか、はっきり行って好きじゃない街だが、こういつときには正直助かる。

一二時間ぐらいなら潰せるはずだ。

第三十六話 本望に望んでいたものは

世の中は皮肉なものだ。

嫌いな場所で私は夕方まで過ごしていた。

そして、その皮肉な現実是我を嘲笑する。

現実が小説より奇なり。

いい加減使い古され始めた言葉。

そして、それは今の私の状況も指す。

いや、もしかすると、これは小説通りの展開なのかもしれない。

そんなことはどうでもいいとして、今の私は自分の予想の範疇を超えた事態になっている。

私は、街で暇つぶしをした後、一旦家に帰ろうとしたのだけれども、途中で思いとどまり、公園による事にした。

彼女とはここへよく来た。

私が街に行く事を嫌がったからだ。

だから、ここにはいろいろな思い出がある。

たぶんきつと楽しい思い出だけが。

だけど、その場所につくと同時に声を掛けられた。

相手は、彼女の母親だった。

わけも分からず呆然としてみると、ベンチを指された。

どうやら座れと言うことらしい。

わたしは素直に座る。

そう言えば、このベンチはここに来るときは必ず彼女と座った席だった。

見晴らしが良くて彼女はお気に入りだった。

「今日、君の母親に会った」

ぼんやりとそんな事を考えていると唐突に彼女の母親が口を開いた。けれど、何が言いたいのか、私には分からない。

「君に初めて会った時私は思った。どうしてそこまで臆病なのか。けれど、それも今日分かった。君の母親が原因だね」

私は何も答えない。

いまだに彼女の母親が何を言いたいのかが理解できていないから。

「今日、君と話がしたくて、君の家に行ったんだ。だけど、どうや

ら君はどこかに出かけていたらしく、家には君の母親しかいなかった。仕方なく、君がどこにいいのか聞いてみた。答えは分からないだった。それは別にかまわない。親が子供のこと全部を知りようがないことぐらい同じ親である私が良く分かっていたから。けれど、君の母親は申し訳なさそうな顔をしていた。一体、どうしてなのだろうか。そう思っていたら、こういつていたよ」

うちの息子がなにかしましたか？

「私はびつくりしたよ。そして、それと同時に君の態度のわけも理解できた。君の母親は自己保身の強い方だ。自分の評価が下げられる事を嫌っている。そして、それと同時に君に悪評価がつくことを恐れている。君の評価が落ちるということは、自分の評価も落ちる事になるからだ。君の母親はたぶん長子である君に、ひとかどの人物になって欲しかったんだろう。だからこそ、君を今のような性格に育てた。大人に決して逆らわない子供。大人の都合だけで考えられた子供に。」

それは正しいと思う。

私の母親は小さいころから私を管理していた。

小学校に入るころには、もう友達が選べなかった。

まず、自分より年下の人と付き合うことなんて許してくれなかった。

最低でも自分と同じ年、そしてできる事なら、自分より頭のいい子。

そんな事まで事細かに決められていた。

もちろん、私はそんな馬鹿みたいなものを護りはしなかった。

そのためいつもいつも怒られていたが、そんなことはどうでも良かった。

泣いて怒って、こっちも言い返していた。

そして、それでもどうにもならず結局私はそれを受け入れた。

いや、違つか、母親の前でだけ、それを演じて見せた。

友達の前でだけ私は自分の姿を見せていた。

その友達も、今はいないけれども。

「そして、それが体の中に染み付いたんだと思う。そのせいで、君は苦しみ、そして娘を泣かせた」

彼女の母親の目が変わった。

獰猛な猛禽類のような目だ。

「私は君のことを少しぐらいなら分かる。君はまず臆病で、自分に自信がない。そして、人の顔色を気にしないと生きていけない。そんな君だからこそ、自分より周りを立てる。傷つきたくないから」

彼女の母親は私の母親より大人だ。

きつと私の母親じゃこんな考えていたらないと思う。

たぶんきつと自分の間違いにすら気付かず、私のことを責めるだけだと思う。

「そうですね、確かにそうなのかもしれません。けれど、それでどうしろというのですか？」

申し訳程度の敬語。

だが、その言葉には何の敬意も含まれていない。

ただ、形式的につけているだけで、単なる疑問でしかない。

「何も言わない。私はただ、それが分かったから言いたかっただけ。君が好きならにすればいい。君が傷つこうがどうなるうが私には関係ない。ただ、娘を傷つけなければね。いまだに、うちの娘は君を思っている。あの子は弱いからね。ものすごく弱いから、今までのようにはやっていけない。もう、肩肘張って生きていくだけ精神力もない。だからなのかもしれないし、そうでもないかもしれないけど、まだ君のことを思っている。心の奥底でもしかすると、言う可能性に必死にしがみついている。だから、うちの娘を傷つけるようなことをしたら、私は許さない。大切な一人娘だからね」

彼女の母親はそう言うと、立ち上がる。

もうこれ以上話す事はないのだろう。

私はその後姿を見ながら、彼女のことをうらやましく思った。

彼女のような母親を持った彼女のことを。

けれど、そんな事を言ったところで、きつとどうにもならない。

今の家に生まれてきた時点でもうどうにもならないことなのだ。

私は家に向かって歩き出した。

もうそろそろ、妹たちが帰ってきたころだと思つ。

さすがに母親も妹たちがいるまで、堂々と言うことはしないだろう。

だから、ちょうど良い。

夕闇に街が飲み込まれ、足音が響き始める。

その音はどこか淋しげだった。

いや、きつと淋しいんだろう。

私自身が淋しいのだ、足音もそんなふうに聞えてもおかしくはない。

今の私の心には寂しさだけが募っている。

今の私の心には悲しみだけが募っている。

それはきつと、彼女の母親とあつたせい。

私は今でも彼女のことを愛している。

あそこまで高ぶつた感情をそう簡単に沈める事などできるわけがない。

けれど、それでも彼女を受け容れられない。

怖い。

やはり、彼女のことを傷つけることが怖い。

彼女を傷つけること、それはすなわち自分を傷つけることにつながる。

私は弱い。

彼女や妹たちには堂々と言っていたけれど、私は弱く脆い人間。

傷つく事を恐れ、動けないでいる。

私は誰かに守ってもらわなくては生きてはいけないほど、力のない生き物なのだ。

だから、彼女とはいられない。

嬉しかった。

彼女が私のことを好きだと、必要だといってくれた事が。

けれど、嬉しかった反面、どうしようもなかった。

私は彼女のことを護れるほど、彼女のことを包み込んでいられるほどの強さなんてない。

いつも自分のことで精一杯なのだ。

だから、結局私はあの時彼女の願いを拒絶すること以外できなかった。

私は愛して欲しかったけれど、それ以上に護って欲しかった。

第三十七話 彼女の告白と彼の告白

月曜日に彼女の母親に会ってから以降は本当に何もなく、比較的穏やかな生活を送れた。

金曜日が、また登校日だったんだけど、その日は彼女は何も言っただけだった。

正直言っただけで一安心していた。

もし彼女にまた言い寄られたら、たぶん以前と同じく彼女のことを傷つけることになっていたと思う。

だから、その日彼女が何も言っただけだった事が何よりも私の心を落ち着かせた。

けれど、次の日の昼、メールが来た。

送ってきたのは彼女だった。

『いつもの公園で待ってます』

内容は、彼女らしくない、絵文字も顔文字も一切ついていない文字だけ。

私は思わず首を傾げてしまう。

けれど、こうして呼び出しを喰らってしまった以上良くしかない。

本当は行かない方がいいのかもしれないけれど、たぶんそれはそれで無意味だと思う。

行かなければ、おそらく彼女はずっとメールを送り続けると思う。

そして、私が来るまでずっと待ち続けると思う。

彼女は一旦こうだと決めると、そう簡単には心を変えたりしないから。

私は、外着に着替え、身だしなみを整えると、外へとでる。

その際母親がまた何かうるさい事を言ってきたが無視する。

あの日以外、私は母親が嫌がることを何一つしていない。

模範少年ではないかもしれないが、それでも普通の人らしくは振舞っている。

だから、余計な詮索を受けるつもりは毛頭ない。

途中途中で隣近所や知り合いの人あったので、しっかりと挨拶をする事も忘れない。

これは昔からやっていたことだし、やって無駄な事になるわけでもないので、一応しておいたほうが利口だからだ。

そんな事をしながら、十分ほど歩いたところでようやく公園に着いた。

いつもの使っていたベンチの方に視線を持っていくと、すぐに彼女の姿を見つけた。

やはり、いつもの公園のいつもの場所であっていたみたいだ。

できるだけ歩調を変えないように心がけながら彼女のところまで歩く。

ずっと俯いてばかりだった彼女だったが、足音で気がついたんだろう、すっと顔を上げる。

目があった。

久しぶりに見る彼女だ。

その姿は先週の別れ話のときと違い、氣力に満ち溢れ、生き生きとしていた。

もしかすると、ようやく吹っ切れたのかもしれない。

そんな事が脳裏を掠めた。

そして、それと同時にその言葉に信憑性が強い事を感じる。

やはり、俺みたいな人間に強い執着心を感じるような人はいないのだ。

「用は何？」

彼女と目があうとすぐにそう訊ねる。

私のほうは、無駄に時間が余っているのでもどっちでもいいのだけでも、彼女の時間を無駄にしたくはない。

彼女は一旦目を伏せ、深呼吸をすると

「渡したいものがあって」

そういつて、すぐ傍においてある手提げバッグをあさる。

なんだろう？

一瞬、わけも分からず、ぼんやりと考え込んでしまったが、すぐに思い当たるものがあつた。

たぶん誕生日とクリスマスに渡したプレゼントか何かなんだと思う。

やはり、別れた男の物をいつまでも持つておくのが忍びなかったのかもしれない。

私としては、今更返されても困るのだけれども、まあせめてもの罪滅ぼしとして、受け取るつもりだ。

どうやら、ようやくお求めの物を見つけたらしい彼女が、包みを手に持って私に差し出す。

わざわざ私が挙げたものにラッピングまでして。

内心でそんな事を思いつつ、それを受け取ろうと手を伸ばそうと……

「えっと、バレンタインのチョコレート」

「え？」

として、途中で固まった。

バレンタインのチョコレート。

それは、一体どういう意味なのだろう。

「やっぱりね、どうしても、他の人じゃだめみたいなんだ」

私の内心に気付いたんだろう、一旦差し出した包みを抱き込むと、
そういう。

「いろいろと考えたんだ。あそこまで嫌がられたんだから、やっぱり諦めるべきなんじゃないのかってね。私はあなたのことが好きで出来ればいつも一緒にいたいと思う。あなたには笑っていて欲しい出来れば、私の前で。でも、私と一緒にいると、辛いだけなんだったら、もう諦めたほうがいいんじゃないかって」

そう語る彼女は眼を伏せる。

一瞬泣いてしまうんじゃないのだろうかと思っただけで心配になったが、もう一度顔を上げた彼女の顔は先ほどと変わりなく、意思と活力に満ち溢れていた。

「それでも、やっぱり心の奥底では諦め切れてなかった。嫌われたり、他に好きな人ができたわけでもなかったわけだから、どうしても納得できなかった。それにやっぱり一度好きになっちゃった以

上、そう簡単に自分の気持ちを切り替えられるほど、器用でもなかったしね。だから、そんな思いの中で、ずっと揺らいでいて、心はずっと不安定で、どうしようもなかった。だけど、そんなときに、お母さんが言ってくれたの。求めるだけじゃだめ、求められている事を叶えてあげないと、って。私はずっとあなたが何を考えているのか分からなかった。何を思って、私といてくれるのかって言う事が。だから、どこかでもしかすると、私はずっとあなたに甘えていたいと思っていたのかもしれない。あなたの傍って本当に居心地が良かったから。何も考えなくてもいいほど私は私のままでいられた。だから、私はたぶん求めているばかりだったんだと思う。自分でも気付かないうちに。」

私の世界。

それは、周りの事ばかりを考えて作られた世界。

だから、彼女の言うとおりで居心地がいいのかもしれない。

いや、たぶんいいんだと思う。

私は誰かに嫌われなくなかった。

だから、いやな思いをしなくてもすむ居心地がいい人間を心がけていた。

「あなたは、もう傷つきたくないんだよね？もう、これ以上私が傷つくところを見たくないんだよね。でもね、たぶんきっと私は生きている限り、傷ついていくしかないんだと思う。生きていくってことは簡単な事じゃないと思う。悲しい事や辛い事を経験していかないといけないと思うの。それは嫌だし、できれば避けたい事だけど、

どうしようもないと思う。それはあなたがどんなにがんばってもどうしようもできないと思う」

人という生き物は、たぶん周囲の環境に敏感なんだと思う。

だから、私がいくらがんばったところで、私が無理をしている事にやがて気がつく。

そして、それに気がついたものの内、必ず一人か二人は悲しみ、そして悔やむ。

だから、どんなにがんばっても傷つかないって言う事はない。

そんなことはとっくの昔に知っていた。

それでも止められなかった。

たぶん、それをする事で自分の世界を支えていたんだと思う。

逆に言うと、それでしか自分の世界を支えられなかったんだと思う。

私は臆病だから。

「あなたは臆病なんだって、お母さんが言ってた。誰かに必要とされていないとだめで、ただ必要とされすぎるとその期待に答えようとして無理をして、やがて疲れ果ててしまう。それは、私のときでも同じで、私はずっとあなたに頼っていて、苦しむ事は全部あなたに任せてきた。悲しいときも辛いときもあなたによりかかって、見ないふりをして、あなたに全部押し付けていた。あなたが無理をしてそれを受け止めている事に全く気付かないで」

どんどん、彼女が私の本当の姿に近づいてく。

誰にも見せたくなかった、

彼女にも絶対見せたくなかった私の素顔。

それにどんどん彼女が近づいていく。

けれど、どこか私は落ち着いていた。

それどころか、安心していた。

以前、彼女が私の心に触れようとしたとき、私の素顔に近づこうとするときは、恐怖を感じていたのに、今の私は、どこかそれに安堵している。

彼女は、もしかすると、私の願いをかなえようとしてくれているのかもしれない。

私は、彼女に護ってもらう事を望んでいた。

男として、情けない事なのかもしれないけど、それでも護ってもらいたかった。

私は彼女のことを好きだ。

たぶん、それは時間がたっても変わらないことだと思う。

だからこそ、私は彼女にとって居心地のいい私を演じ続けた。

そうすることで、私の居場所を作っていた。

逆に言えば、そうすることでしか、私の居場所は作れないと思っていた。

だから、怖くて私は彼女に護ってもらおうとはしなかった。

いや、そんなそぶりを見せる事ができなかった。

私は、彼女に甘えていたい。

できる事なら、彼女と一緒にまどろみの中で生きていたい。

私の心は弱いからそれを望んでいた。

けれど、弱いからこそ、拒絶される事を恐れていた。

彼女は前言った。

もう、私なしでは生きられないと。

けれど、それは私も同じ、彼女なしでは生きられない。

彼女の笑顔なしで生きていけるなんて思えなかった。

だからこそ、私は彼女に拒絶される事を恐れ、私は彼女が望むままの私を演じ続け、何も望まぬように振舞い続けた。

そして、別れる時は、もう彼女の笑顔が見れないなら、いつそのの

事自分の手で、と思い、やがて、彼女を傷つける事しかできないなら、自分から身を引こう、そう思った。

彼女は続ける。

「私はね、あなたのことが好きなの。情けない話、もうあなたなしでは立ってられない。今だって、断れたらどうしよう。拒絶されたらどうしよう。そればかりが頭の中に浮かんでくるの。私は一年前から成長してない。初めてあなたに告白したときも、私はそんな事ばかり考えていた。私の自信はあなたの前では木っ端微塵になつてしまう。好きな人の前では、どんなに自分に自信があつても、傷つく事が怖くて、自分が見えなくなってしまう。それでも、こうしてここに居るのは、やっぱりあなたのことが好きだから。どんなに傷つけられても、どんなに冷たくされても、それでも私は好きだから。臆病だから人一倍人を愛さないと生きていけないあなただけど、そんなあなたが好きだから。だから、決めたの。もう、これ以上あなたには甘えない。もう、これ以上求めてばかりではない。私も成長する。せめて、あなたの苦しみや悲しみを感ぜられるくらいには。だから、私の前ではもう、強がらなくてもいい。私だつてももちろん優しくされたいし、愛されていたい。だけど、無理はして欲しくない。優しくされたいし、愛して欲しいけど、それ以上に私はあなたのことを愛していたいし、護つてあげたい。あなたはあなたのままでいられる。臆病なままでもかまわない。今のあなたもう本当のあなただから。そんなあなたを私は愛しいと思ったから。だから、あなたは私に甘えてくれてもいいの。辛かったら、私に寄りかかってくれてもいい。悲しかったり、苦しかったら、私に愚痴を言ってくれてもかまわない。私はそんなあなたでも受け入れるから。だから、お願い。もう一度私をあなたの傍に置かせて」

今日、ここで言おうと思ったことは全部言つたんだろう、もうこれ

以上何も言う事はないという顔をしている。

昨日見た彼女の顔。

それは昔よく見た、私の大好きな顔だった。

だから、もう昨日のうちに全ての決心はついていたんだと思う。

いまだに迷い続けていた私とは違って。

彼女の提案は私にとって破格のものだと思う。

そこまでしていつているんだから、受け入れても全く問題がなさそうに思える。

いや、受け入れなくてはいけない提案だと思う。

それでも、今の私は迷っている。

いまだに恐怖心が拭いきれていない。

「俺はね、ものすごく臆病者で、しかもよわっちくてね、自分でもいやになるくらいなんだ。性格がひねくれていて、物事を真正面からとらえられなくて、いつも曲がったものの見方しかできない。人に優しくされても、どこか違うところに目的があるんじゃないかと疑ってみないと、何もできない。裏切られて、傷つく事が怖いから。正直言つて、昨年、君に告白されたときも、同じだった。俺は自分に自信がない。特に顔がいいわけでもなければ、頭が言いわけでも、スポーツができるわけでもないし、性格も性根が曲がっていて、しかも根暗だから、そんな自分に自信なんて持ちようがなかった。

た。だから、君に告白されたとき、これはもしかすると、芝居なんかじゃないのか、そんなふうに思った」

彼女の顔が何ともいえないものになる。

彼女からしてみれば、たぶん一世一代の告白だったんだと思う。

それを芝居なのかもしれないと、疑われたんだ、そんな顔になっても仕方がない。

けれど、そのときの私の気持ちはまさしくそんなものだった。

「俺のように自信のない奴は、たぶんそんなふうに感じると思う。明らかに、自分とつりあわない人に告白されたら、まず面食らい、その後訝しがる。馬鹿みたいに喜んで、騒ぎまわるような事はしない。それは付き合い始めてからも同じで、自分に自信がないから、いつ振られるのかと言う事ばかりが頭に言っで、まともに自分を出せない。変に自分を出して嫌われたりでもしたら、そこでおしまいだからね。だから、後手に後手に回ってばかりで結局疲れてしまい、小さなことで簡単に壊してしまう。俺のようにね」

結局、自分を護りたいのだ。

他人のせいにして、自分が傷つかないようにしたのだ。

それはたぶん卑怯な事なんだと思う。

けれど、そうでもしないと、自分に自信のもてない人は、自分の感情をもてあまして、さらに卑屈になってしまっだろう。

結局は、そう自己防衛手段なのだ。

「正直言つて、俺は自分に自信がない。それはたぶん、どんなに時間がたつても、どんなに偉くなったり、有名になつたりしても、変わりはないと思う。一度、そんなふうに分を位置づけしてしまつた以上、それは変えることはできないと思う。私は臆病で、弱くて、それで誰かに必要とされていないと、生きてはいけないと思う。だから、もし、ここで君の願ひを受け入れたら、君を傷つけることになるかもしれないし、甘え続ける事になるかもしれない。君の事を護つたり、君の事を包み込んだりできないかもしれない。それでもいい？本当の私は、君が思っているほど、たいした人間じゃない。どちらかと言うと、弱い部類に入る人間だけど、それでもいい？そんな俺でもいい？」

それが私から見た本当の自分。

だから、もし私と一緒にいたいと思うなら、いてもいいと思うなら、こんな私だとしても受け入れてもらわないといけない。

こんな私を受け入れる覚悟がなくてはいけない。

そう思つての、私の一世一代の告白。

彼女が勇気を振り絞つて告白したのなら、私もそれに見合つ告白をしなくてはいけない。

だから、私も彼女と同じく、私の心の中にある言葉で、彼女に返事をする。

そして、私は彼女が言つたように、私もまた彼女と同じく言つべき

事を言った。

だから、返事を待つだけ。

彼女の眼を見る。

その瞳は輝いている。

私の瞳も彼女と同じように光り輝く事が出来るのだろうか。

それともやはり、私の瞳程度ではどんなにがんばって見たところで輝く事なんて出来ないのだろうか。

そんなことは、分からない。

だけど、それはそれでいいのかもしれない。

私が輝けないなら、彼女が輝けばいい。

何も二人して輝く必要なんてない。

ただ、それだけのことなんだ。

エピソード

現実には優しくない。

そして、それと同時に夢もまた優しくはない。

優しいのは幻。

その人が描く幻影。

現実には、ただ悲しみだけが溢れかえり、夢も希望も食いつぶしていく。

現実には、ただ虚ろで心の中に深い孤独感を産み落としていく。
けれど、それでも人は生きていかなくてもはいけない。

幻の中で生きてはいけない。

幻の中の住人は主人公であるその人だけ死が存在しない。

けれど、現実には誰もが主人公で、誰もが脇役であるがため、たった一人でも現実から外れてしまうと、歯車が狂い始める。

だから、たとえ悲しくても、私たち人は現実で生きていかなくてもはいけない。

そんな事を人は呪うのかもしれない。

けれど、現実には悲しく、辛い、それと同時に、幸せもある。

物事は常に表裏一体。

表だけでは存在する事は叶わず、その逆もまた同じ。

悲しみがあるのと同時に喜びもある。

だから、悲しんではかりはいられない。

不幸ならば、自分のみにある幸せを探さなくてはいけない。

いつまでも悲しみにとらわれていてはいけない。

それでは、幻の中で生きているのと同じだからだ。

「ねえ、おいしい？」

夕暮れの公園のベンチに座っているわたしの隣にいる彼女がそう問
いかける。

「うん」

私がそう答えると、本当に嬉しそうな顔をする。

彼女が私の恋人で、私が彼女の恋人。

それ以上でなければ、それ以下でもない。

たった、それだけのこと。だけど、それだけのことで、今の私に

とつては、幸せ以外なんでもないこと。

ただ、それは同時にやはり不幸にもつながっている事でもある。いつかは傷つかないといけないという事。

「でも、手作りなんてがんばったね。確か料理って苦手じゃなかった？」

もう一つ口に運んでいると、思わずそんな疑問が浮かんできた。

外見も性格も言い彼女だけど、料理だけは苦手だった。

と言うよりも、したことがないため、といった方が正しいか。

「うん、まあね」

だから、盛大に褒めてあげようと思ったのだけれども、当の彼女はどこか難しげな顔をしている。

一瞬、何か悪い事でも言ったのだろうかと思って考え込んでいたら、一つだけ思い当たる事があった。

「もしかして、メールとか電話が適当になってたのって……」

これだった。

なんとなく、これじゃないのかと思って、思い切って言うてみたのだが、どうやらそれで正しかったみたいで、

「ごめんなさい」

すぐに謝った。

「お正月の後から、ずっとお母さんに頼んで練習してたの。ほら、もうすぐ、私一人暮らしをする事になるでしょう？だから、そろそろ覚えておいた方がいいかなって思っで。それに、うまくなったらあなたに食べてもらいたかったから。ううん、と言うよりもたぶん一人暮らしなんてものはたぶん建前で、あなたに食べてもらいたいためだけにしてた」

そういう彼女の顔は本当に申し訳なさそうだった。

けれど、別に彼女は悪くない。

いや、それどこか、嬉しくて仕方のないことだ。

そう、たぶんただ時期が悪かっただけ。

私の精神的余裕がなくて、いつの間にか自分のことで一杯一杯になっでいたから、こんな事になっでいたのだ。

「ありがとう」

気にしないで、とか、君は悪くない、とか、俺が悪いんだ、という言葉が頭の中で浮かんできたが、どれも間違っではいないが、正しいと思えなかつた。

だから、ありがとう。

私のために、がんばってくれてありがとう。

それが一番いいんじゃないかと思った。

「たぶん、すごく苦勞したと思うけど、よくがんばったね」

心からそう思う。私がそう言うと、彼女は本当に嬉しそうに笑う。

私なんかの言葉で彼女がこんなに喜んでくれる。

「うん。でもね、その苦勞が今ようやく実ったかな」

彼女の笑顔はすごくまぶしい。

彼女は綺麗だ。

そして、彼女はかわいい。

その愛らしい二重のくりくりした目。

触れて分かったぶつくりとして柔らかく、そして弾力のある唇。

まるで神の仕事と思わんばかりに絶妙な配置のかんばせ。

化粧などしていないのに、淡く白い雪化粧のような肌。

しみやそばかすなど全くない綺麗な肌。

枝毛なんてない肩の辺りまで伸ばした亜麻色のさらさらの髪壊れそうなほど華奢な体。

周りを明るくする話し方。

その全てが男を魅了する。

けれど、彼女の本当のよさはそんなものじゃない。

彼女の本当の魅力は、心を穏やかに和ませる雰囲気。

この世にある幸せの一つの具現。

それがたぶん彼女の魅力なんじゃないかと、思う。

「そつか。なら、今度はさ、その、えっと、手料理の方も食べて、みたいかな？」

そんな彼女の魅力に照らされて、私も少しずつ少しずつ変わっていく。

恋は狂気。

それは彼女と付き合い始めて思ったこと。

そんな自分が怖くもあり、満たされてもいた。

たぶん、今もそれと同じ。

どんどん変わっていく自分が怖くもあり、どこかで変わっていきたいとも思っている。

彼女と一緒に。

「うん、任せて。お母さんにしっかりと教えてもらったから、きつ
とおいしいものを食べさせてあげれると思う」

そう言っていると、彼女はまた笑う。

「うん、楽しみにしてる」

だから、私もつられて笑顔になってしまう。

彼女の笑みにはそれぐらいの力が秘められている。

自然に笑顔にさせてしまうほどの力が

「やっと、見せてくれたね」

「ん？」

「特別な笑顔。周りを明るくさせるような人懐っこい笑顔。」

私はいまだに自信がない。

自分のどこを見て自信を持てばいいのかなんて分からない。

けれど、それでも彼女といたいと思う。

たぶんそれは、彼女が一番、私のことを理解しようとしてくれてい

るから。

それと、何よりも、彼女という自分が一番好きだから。

エピローグ（後書き）

これで、第一部終わりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689p/>

氷の華　～二度目の告白～

2011年1月2日10時42分発行